

鹽竈ざくら



講話集

鹽竈ざくら

第二十一回神道講演全国研修大会 宮城大会

御挨拶

神社本庁総長 矢田部正巳

第二十一回神道講演全国研修大会・宮城大会の開講式にあたり、一言御挨拶申し上げます。神道講演全国協議会の皆様には、平素より神社本庁の諸施策に対し、格別なるお力添へを戴き厚く御礼申し上げます。

さて、本研修大会は、長きに亙り神道講演を通じて斯道の興隆に御尽力戴いた石井寿夫先生・佐古幸嬰先生の御志を受け継ぎ、修練と同志結集の場として、昭和四十六年より回を重ねてこられました。会員の皆様が、本大会において地道に研鑽を重ねてこられた成果は、奉仕神社における社頭講話を始めたとした教化活動の大きな要になってゐると存じます。このことは、斯界にとりましても実に心強い限りであり、これまでのためみな研鑽に対し、深く敬意を表するものであります。

また、本年は、日露戦争戦勝百年・大東亜戦争終結六十年といふ大きな節目であり、この秋にあたり私どもは、改めて神道講演に関はられた先輩諸兄の御遺志を継承発展させて

ゆかねばならないとの思ひを強くするものであります。

敬神崇祖といふ言葉に表される自然への畏敬、神々と祖先への尊崇は、神代に連なる我が国の悠久の歴史のなかで培はれてきたものであり、混迷を深める昨今、自然との共生を文字通り体現してきた神道の教へが、国の内外で高い関心を呼んでおります。

かかる状況にあつて、神道精神を分かり易い言葉で氏子崇敬者に説き、正しく伝えてゆかうとする貴会の活動の意義は、弥が上にも増すものと確信しております。

どうか会員の皆様には、教化活動の第一線に立つとの自覚のもと、斯道の興隆、ひいては我が国の発展と国民精神の昂揚のために、尚一層の御挺身を賜りますやう切に願ひ申し上げます。

終はりに臨み、貴会の愈々の御隆昌と参加各位の益々の御活躍、御健勝をお祈り致しまして、開講式にあたつての御挨拶と致します。

序

平成十七年八月二十三日より二十五日までの三日間、当神社を会場に第二十一回神道講演全国研修大会・宮城大会が開催されました。この度、その成果が纏められ講話集が刊行されましたことを、心よりお慶び申し上げます。

大会期間中は、講演実習はもとより、自己紹介、意見発表に至るまで、そのすべてが真剣なものであり、全国各地よりご参加の研修生お一人お一人の姿に神社界の将来を担わんとする気迫があふれておりました。

その熱誠に最も強く感銘致したのは、当神社神職養成所の十三名の生徒たちであります。神社実務の実践の中で培われた貴重な講話、正に生きた神道講話を拝聴した生徒たちは、口々にその感激を話し合っておりました。氏子崇敬者への神道講話の重要性を感じ取り、将来は自分達も、かくありたいとの自覚が芽生えたようです。また、神職としての大先輩たちが全国各地より集まり研修する、その真摯な姿勢を学び得たものと存じます。この点こそは、宮司として又、本養成所の所長として、この上ない喜びでもありました。

氏子に御祭神の御神徳を語り敬神の念を昂めることは、祭祀の厳修と同様に、神職の大切な使命であると思います。

神道講演全国協議会の村田会長、佐古副会長を始めて御関係の皆様御活躍により、本研修会が益々発展されますことを祈念致し、講話集刊行に際しましての御挨拶とさせて戴きます。

宮城大会会長

志波彦神社
鹽竈神社

宮司 宇仁繁儀

目次

御挨拶

神社本庁

総長 矢田部正巳

序

志波彦神社鹽竈神社

宮司 宇仁繁儀

記念講演

鹽竈神社の概要

志波彦神社鹽竈神社

禰宜 野口次郎

2

第二十一回神道講演全国研修大会・宮城大会

勝岡八幡神社の一体走り

道彦

武智輝子

22

返矢

村田和弘

26

杜の教

生 畠 經 和

34

お塩とお宮の切れない関係

村田佳子

39

夏越大祓まつり

西村純子

46

平和をこよなく願った日露戦争の將軍

松吉宣和

49

時を刻む

芦原高穂

53

社報二〇四号に思う

河野誠

58

登山に学ぶ

渡邊知宣

63

島根県「竹島は誰のもの」

一宮への誘い

お臍は何故あるの・・・

人を育む心

心を澄ます

うすさまの御神札

すばらしきもの「生命」

生いたちと伝えていきたい事

蛭とともに

終戦六十周年を迎えて

岩木山信仰について

九州の神宮林

神のみこともちとして

家族の愛こそ神の心

―お日待（新年神棚祭）の後で、子供対象に―

寺本正徳 69

鈴木雅史 74

高尾宗嗣 78

青木信市 82

山下裕嗣 87

河本文夫 91

中木屋豊 96

大島守彦 100

竹中基将 104

渡邊光彦 108

武内尊英 114

黒田明司 118

佐々木美津子 123

黒須主計 127

神慮への感謝

日露戦争戦勝百周年にあたり

真の愛

神宮月次祭を奉仕して

美しい心

終戦六十年に思うこと

敬神の家に余慶あり

日本狼の絶滅百年に思ふ

機会屋

忠孝一本

子供の躰は大人のつとめ

ゲーム脳

教育のヘソ

子供の育成を考える

武士道の心

川崎太久美

三浦久幸

牟禮照子

榊原久康

岩田健司

水谷光衛

石垣正彰

南美宜

佐藤勇穂

野口次郎

佐古一洌

村田和之

戸内康雅

松本スミ子

井出舜

130

135

139

143

147

153

157

162

168

172

178

183

187

191

195

神道講演構成法

宮城大会の記録

神道講演全国大会のあゆみ

神道講演全国協議会役員名簿

あとがき

宮城大会実行委員長

村田和之



第21回 神道講演全国研修大会・宮城大会

平成17年8月23日

第二十一回 神道講演全国研修大会 宮城大会

とき 平成十七年八月二十三日～二十五日
ところ 宮城県 志波彦神社鹽竈神社

鹽竈神社の概要

志波彦神社

欄宜 野口次郎

鹽竈神社

はじめに

第二十一回神道講演全国研修大会・宮城大会が当社にて開催されるにあたり、神道講演全国協議会の村田会長佐古副会長を始め多くの同職の皆様が、神道講演研修への熱意をもつて全国各地より御参集されましたことに対し、心より敬意を表し又歓迎を申し上げます。

さて、今回この記念講演の大役をつとめる訳であります。私は平成十一年三月に前任の靖國神社より当社へ来たばかりでありまして、経験はもとより勉強は甚だ不十分であります。しかしながら、当社の宇仁宮司より強く勧められ、又、靖國神社奉職当時の宮司であり貴協議会顧問の大野俊康先生からも「又と得られぬ貴重な機会、精一杯つとめるように」との激励と共に、過去の大会講話集を一包みも送って戴きました。かような経緯もあり、非力をかえりみず、この大役をお受けした次第です。

「受け手に理解してもらう為の工夫が大切だ」との大野先生の指導を思い出し、言葉の不足を補うために、大型画面に社殿や祭典などの様子を映しながら、お話を進めたいと思いますので、何卒よろしくお聞き取り願います。

志波彦神社

当神社の境内地を一森山と称しております。この一森山に志波彦神社と鹽竈神社という二つの旧国幣中社があるわけで、社務所名なども二社名を並記致しますが志波彦神社が先であり、御両社に共通の祭典である歳旦祭・祈年祭・新嘗祭・朔日祭なども基本的には志波彦神社より御奉仕致します。

このように、通称「しほがまさま」として親しまれている当社において、志波彦神社を先んじる事由について説明致します。

志波彦神社は、もともと現在の仙台市宮城野区岩切の地にあった神社で、延喜式内社の名神大社として、朝廷の尊崇も篤き御社でありましたが、明治の御維新を迎えた頃には、岩切の氏神様の末社のような状態となっておりました。しかし、明治四年、全国で十五社が国幣中社に御列格、志波彦神社は、その一社でありました。

二年後の明治六年、初代宮司として落合直亮宮司が着任、現状を憂いて、明治新政府に對して志波彦神社の復興を働きかけたのです。ちなみに、落合宮司の養子となったのが、著名な国文学者である落合直文です。落合宮司の懸命な働きかけにもかかわらず、財政基盤の固まらぬままの新政府からは社殿再建等の沙汰はなく、正に窮余の策として明治七年に鹽竈神社別宮への遷祀が決定、と同時に鹽竈神社は国幣中社に御列格されたのであります。同年十二月二十四日に御遷祀、この時の祭文には、「此地に新宮造奉りて鎮め奉らむ日まで此御殿の内に座せ奉り併せ祭らせ給う」とあり、あくまでも新宮造営までの仮遷座であつたことが知れるのです。

以来、歴代宮司により社殿造営の為の努力が重ねられました。明治より大正・昭和と御代は代わり、遂に昭和九年に起工、十三年に竣工、同年十一月二十九日遷座祭が斎行され、現在に至っており、国費造営の最後の神社建築と言われています。

つまり、国幣中社に御列格の順、及び志波彦神社の御遷座を受けて鹽竈神社御列格との経緯により、志波彦神社を先んじるといふ習わしとなつてゐるのです。

志波彦神社の御祭神は志波彦大神、国土開発、農業守護の御神徳を仰いでおります。前述の通り、御遷祀より百三十一年、現社殿への御遷座より六十七年の年月を経ておりますが、

この一森山の信仰の中心は今でも鹽竈神社であり、志波彦神社の御神徳宣揚こそは大きな課題でもあるところです。

鹽竈神社の社殿

次に、鹽竈神社の社殿についてお話し致します。

鹽竈神社の御鎮座御創建の年代については明らかではありません。しかし、平安時代初期の弘仁式の中の主税帳に「鹽竈の神を祭る料壺萬束」とあり、当時すでに有力な神社であったことは間違いないものと思われます。

社殿造営については、もっとも古いものとして、天正九年（一五八一）に留守職であった伊沢政景が社殿を再建したとの記録があるものの、その内容が知れる資料は残っていません。留守職とは、奈良・平安朝の頃より「遠の朝廷」と呼ばれた多賀城政庁の国司が、実際に都から来ることがなく遙任した場合の現地官僚のことであり、留守を預かっていた留守職が鹽竈神社をも宰領することは伊達政宗の時代まで続きます。

その政宗による社殿造営は、慶長の造営（慶長十二年・一六〇七）として「奥州一宮鹽竈神社成る」と記録されています。

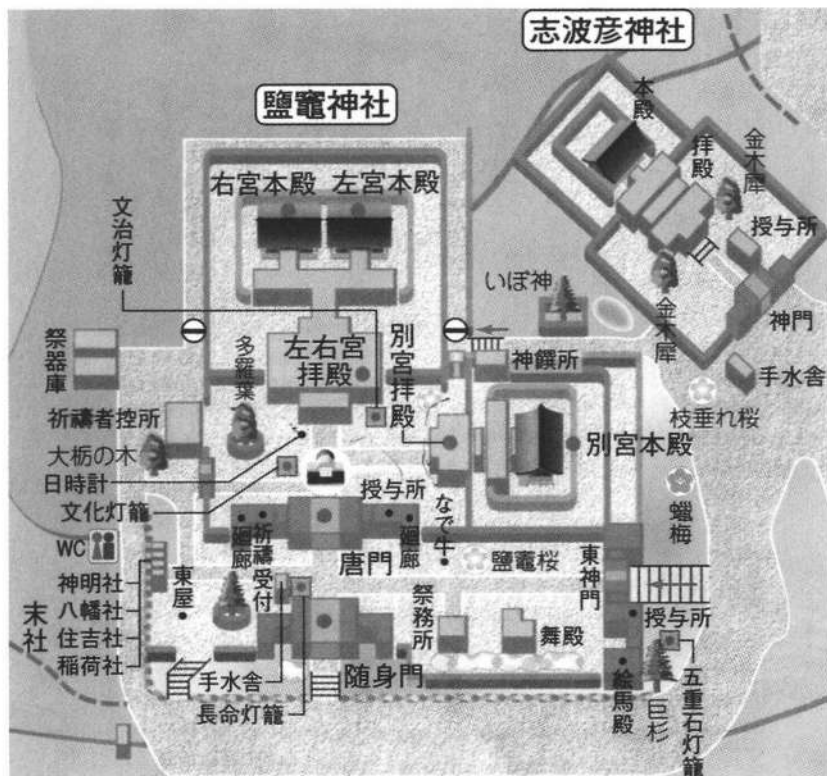
政宗は、慶長八年（一六〇三）に仙台城を完成させ、翌年には松島の五大堂つづいて瑞巖寺、大崎八幡宮と桃山様式の建築を多く残しています。しかしながら、この時の鹽竈神社の社殿がどのようなものであったかは不明です。

次の寛文の造営（起工は万治二年・一六五九、竣工は寛文三年・一六六三）については、棟札が現存し社殿配置を示した図面が残っています。それによりますと、一つの拝殿と一つの本殿が正面にあり、只洲社と貴船社と記された末社が東側にありました。

鹽竈神社は、中世以降二つの本殿が並び建っていたとの記録がありますが、この寛文の造営時には一つの本殿に統合されていたようです。

しかし、その竣工から僅かに三十二年後に、元禄の造替が起工され一七〇四年の宝永元年に竣工、これが現在の社殿であります。この時に、寛文造営の拝殿をそのままに、その本殿は東南方向に移動して別宮の拝殿としています。新たな本殿については、別宮に一字、左右宮に二字と全く同寸同型の三本殿を新造し、ここに三本殿二拝殿の現社殿が出来上がったのでした。

寛文の造営から僅かに三十二年後に元禄の造替を起工した背景には、伊達藩が総力をあげて取り組んだ日光東照宮の修理による建築技術や意識の向上があったのでしょうが、何



よりも伊達四代藩主綱村公の篤き敬神の念がありました。綱村公は、大河ドラマにもなった山本周五郎原作の「樅の木は残った」にも描かれた伊達騒動、幼少時にその渦中にて様々な辛酸を味わいました。その分、非常に信仰心が篤く、歴代藩主の中で最も多い十四回の参拝、そして数々の鹽竈の繁栄政策を実施しているのであります。

このような尊崇の強い思いを以て、鹽竈神社の縁起をまとめて祭神を明らかにするようにと、綱村公は命じたのです。これに応えて縁起調査に力を尽くしたのが仙台藩の儒学者遊佐木斎であり、木斎こそは山崎闇斎門下の高弟にして熱烈たる尊皇思想の持ち主でありました。

木斎の思想については、後ほど改めて述べてみたいと思います。

ここでは、別宮に鹽土老翁神・左宮に武甕槌神・右宮に経津主神と祭神が明らかにされ、三つの本殿が建立された、その背景に木斎のまとめた鹽竈神社縁起があったということを、御理解しておいて戴きたいと思えます。

藻塩焼神事

塩作りの神として知られる鹽土老翁神。その塩作りの様子を今に伝える神事が、藻塩焼

神事で、毎年七月四日から六日までの三日間、鹽竈神社の末社である御釜神社にて斎行されます。藻塩焼神事は大きく二つの柱からなり、その一つは「神釜の水替え」、もう一つは「藻刈りと塩焼き」であります。

神釜と呼ばれる四つの鉄釜が御釜神社の境内にあります。この鉄釜の中の海水を取り替える神事が、「神釜の水替え」であります。

七月五日午前十時御釜神社にて奉告祭の後、釜の中の海水を、海に返す分と神事の最後に再び神釜に戻す保管分とに汲み分けます。この後に神釜は藤蔓にて洗浄致します。奉告祭奉仕員は海に返す分の海水を樽に入れ、港より小舟に乗り松島湾内の釜ヶ淵に向かいます。ここでの神事の後、海水を海に戻して、満潮時に新たな海水を汲んで御釜神社へと帰ります。この時の海水には神釜に入れる分と、塩作りの為の分が含まれているのです。

次に、「藻刈り塩焼き」の神事について説明致します。

藻刈り神事は、七月四日午前十時に塩竈港より奉仕員を乗せた小舟が出航、七ヶ浜町花刈浜湾上にて神事の後に、ホンダワラと呼ばれる塩分を多く含んだ海藻を刈り取り唐櫃に納めて御釜神社にお供えし、塩焼き神事の日を待ちます。

いよいよ七月六日、御釜神社例祭並びに藻塩焼神事が執り行われます。藻塩焼神事では、

竹で編んだ簀の子の上にホンダワラを敷き、その上から汲んできた海水を注ぎます。これによってその下にある鉄釜には塩分の濃い海水が貯まります。これを煮詰めて、水分が無くなれば塩の出来上がり。ちなみに、塩は焦げることがありませんので、しっかりと最後まで水分を飛ばすことができます。

こうして、出来上がった塩をお供えし御釜神社例祭を斎行。実は、この祭典次第にとっても重要な儀式があるのです。

先の水替え神事にて、洗浄されて新たな海水が入った四つの神釜。そこに保管していた旧海水を戻す神事です。これは、潮（海水）の命を嗣いでいくとも称され、永遠の潮の命を伝える象徴的な儀式であると言われています。この神釜の水は古来より枯れたことが無く、江戸時代には「水の色が変化すると天災や異変が起こる」と信じられていました。

鹽土老翁神の塩作りについては、紀州・和歌浦に鎮座の鹽竈神社の伝に、鹽土老翁神が全国をわたって製塩法を教えられた箇所が十三カ所あり、和歌浦はその九カ所目にて、奥州の鹽竈はその十三カ所目にあたり、世にこれを「はての鹽竈」といっております。

いずれにしても、鹽土老翁神が教えられたとされる製塩法を、今に伝えているのが藻塩焼神事と言えるのです。

源 融（みなもとのおる）

鹽竈の塩焼きは、平安時代から多くの人の知るところであつたようです。現在の京都市下京区には、塩竈町・本塩竈町との地名があるのですが、ここに、源氏物語の光源氏のモデルとも言われた左大臣源融の邸宅がありました。融は、陸奥・出羽の按察使にて、實際は遙任であつたようですが、塩竈についての知識も多く、邸宅の庭は塩竈の浦を模して造り、わざわざ大阪湾から海水を運んで塩焼きをしたようです。融の死後は、塩焼きの煙も上らなくなりさびしいことだと、紀貫之は次の和歌を詠んでいます。

きみまさで煙たえにししほがまの うらさびしくもみえわたるかな

又、当神社所蔵品の中に、「融」と銘された茶杓があります。これは千利休の孫である宗旦、その弟といわれる千宗甫が、利休の法要茶会の為に作つたものと伝えられています。宗甫の心中には、利休の頃のように茶の湯の煙が上らなくなったことを嘆く思いがあつたようで、そのことを「融」亡き後に藻塩焼きの煙が上らなくなったことにかけてものと思われまふ。

更に、融の又従兄弟である在原業平は、「わが御門六十余国の中にしほがまという所に似

たるところなかりけり」と、伊勢物語に記しています。これも融が塩竈について語り聞かせたためと言われています。かように塩竈は、融を通じて多くの都人の知るところとなつたと言つてもよいでしょう。

紫式部にも

みし人の煙になりしゆふべより　なもむつまじきしほがまのうら

との一首があるように、都から遙かに遠い地でありながら、塩竈を歌枕とした平安歌人の和歌は実に多く、ゆうに二百首を超えています。それは、塩竈の景色を描いた屏風絵を飾つて、多くの都人が歌会を開いたからではないかと推測されています。このように、塩竈は、都人あこがれの景勝地であつたことは間違いないものと思われれます。

塩竈桜

塩竈神社の社紋にもなっているのが塩竈桜であります。国の天然記念物として、境内にある二十数本が指定されています。塩竈桜はサトザクラ系の八重桜で、その特徴は、雌しべがその役割を果たす前に葉に転化してしまうことで、実生を残すことができない点です。その為、山桜などへの接ぎ木により育成をしてきましたが、接ぎ木では時間がかかり活着

不良も多くありました。以前より鹽竈桜の育成に関わり熱意を持っていたのが宇仁宮司で、たまたま、染井吉野の古木が再生する内容をテレビ番組で知り、早速テレビ局に連絡し、日本製紙グループの森林科学研究所にたどり着きます。こうして、同研究所に苗木づくりの支援を依頼することとなったのでした。その技術を簡単に説明すると、炭酸ガスを充滿した部屋に鹽竈桜の新芽を入れて、日照と闇とを繰り返し、新芽の光合成を促進し苗木にまで育成させる独自の技術です。実際、同研究所に昨年送った新芽が、五センチから三十センチの苗木に育ち、今年になって神社に戻り境内で順調に育っています。全国の鹽竈神社を始め、希望される公園などにもお分かちできる日も遠くないと大いに期待しているところです。

鹽竈神社の祭事

特殊な祭事として、先ず紹介致しますのは「嘉津良比祭」^{かつらひさい}であります。毎年十二月一日に左右宮にて斎行される祭典で、古くは旧暦十一月一日に行われた左宮の祭事であったようです。嘉津良比と呼ばれる兜を形取ったお餅をお供え致します。その他にも特殊神饌として、雉・つるし柿・勝栗・生あわび・すえ（黒い魚）をのせた三方それぞれに櫨の葉と

紙垂を添えています。又、神楽は奈良の春日大社に伝わる男の四人舞、倭舞を奉奏致します。前述のように、左宮の御祭神は春日大社にも祀られる武甕槌神であります。同大社の春日権現記にある「鹽竈の浦に天降った神は武甕槌神」との記述、此に依拠したとされています。つまり、嘉津良比祭は、武甕槌神が塩竈を拠点に荒ぶる神々を平らげて東北の平定を成し遂げた、その戦勝を祝う祭として、神饌も神楽も組み立てられているように考えられます。

七月十日の例祭にて、特殊と思われるのは「御出幣式」であります。

この神事は、三つの本殿にそれぞれ奉安している大きな神幣を、宮司が出し奉り権宮司・禰宜が奉戴、参道正中に敷かれた清砂の上を進み、楼門先に敷かれた真薦の上にて、正中に別宮、左側に左宮、右側に右宮の大神幣が横一列に南面して並び、左右左と揃って振り奉り、次に振り返り社殿に向かって同様に振り奉り、本殿に還御されるのであります。この時、権禰宜以下は神宝を捧持しお供するのですが、清砂の上を進むことは出来ません。御出幣は、古くは国司や留守家当主参拝時の神事でありましたが、奉幣の古い所作を伝えていると考えられています。

さて、鹽竈さまの御神輿は荒れ御輿として有名ですが、現在のもものは享保十六年

(一七三二) に作られたもの。重さは約一トン、二〇二段の表坂を上り下りする時を除き、十六人で担ぐこととされています。平均しても一人六十キロ以上の重さであり、慣れない者だと一分も担げないと言われます。更に特筆すべきは、担ぎ手である氏子たちは、十日前禊と称して、各祭典ごとに十日前から禊行に励み、その後に御奉仕する伝統を厳格に守っている点であります。

この御神輿が、三月の帆手祭、四月の花祭、七月のみなと祭と一年に三度、市内を巡幸されます。特に、みなと祭では志波彦神社の御神輿も出御され、それぞれ塩竈港より御座船に乗り、松島の島々をも百隻余の御供船を従えて海上巡幸。その景色は実に勇壮です。

各祭典とも、御神輿巡幸のクライマックスは、二〇二段の表坂、この急坂を上つての還御の時であります。「がんばれ、がんばれ」との大勢の市民の声援を受けて、最後の力を振り絞って、御神輿は斜度三十度以上の坂を一段一段上ります。そして、上りきった時にあがる歓声、御神輿とその場にいるすべての人の心が一つとなる、神人一体の感激の瞬間です。この感激のある限り、年間三度にわたる塩竈の御神輿渡御は孫子の代までも続いてゆくことでありましょう。

社家

宝永年間の記録によれば鹽竈神社の社家の数は二十九家となつていますが、明治となりすべて帰農しています。現在でも、その子孫により旧社家講が結成されており、毎年六月第二日曜日に祭事を行つて祖先の遺徳を顕彰しております。

江戸時代、鹽竈神社でも神仏習合思想により祭祀が執行されていましたが、実際には別当法蓮寺の支配力が圧倒的でありました。

こうした状況にあつて、社家の中から唯一神道祭祀を主張する機運が生まれてきます。

享保五年（一七二〇）に左宮二の禰宜であつた鈴木晴金は、法蓮寺の非違について仙台藩に直訴したのです。その訴状内容には「別当法蓮寺は社人が学問に精励することをよろこばず、そのために社人には無学文盲の者が多い。したがつて神社の実務はすべて法蓮寺の自由なるままである。」とありました。

これに対する審理は三年に及びます。それも、訴状が慎重に審議されるべき内容であるとして認められたからに違いありません。結果、晴金は閉門、後に隠居を命じられましたが、法蓮寺及び脇院には不行届の重い処分が下され、晴金の意見が多く取り入れられたものとなりました。

我が身を顧みず神社祭祀の正常化を主張した晴金。実は、その精神的支柱ともなったのが垂加神道思想であり、その指導者が、先に紹介致しました、鹽竈神社の縁起をまとめた遊佐木斎であったのです。

遊佐木斎の思想

現社殿を造営した仙台藩四代藩主伊達綱村は、造営に先立ち家臣に命じて祭神に関する調査を実施。それは、鹽竈神社の縁起について確定したものが無く祭神も不明であり、社殿造営の基本理念が立てられない為でもありました。こうして、鹽竈神社縁起一卷が纏められ、左宮は武甕槌神、右宮は経津主神、別宮には鹽土老翁神と三柱の祭神が決定。この縁起作成の実際の任に当たったのが、山崎闇斎門下の遊佐木斎でありました。と、ここまでは先にお話致した通りです。

山崎闇斎は元和四年（一六八八）生まれ、当時は全国的に儒学が興隆普及する中、闇斎も儒学の面では朱子学を受け継ぎ、激しい鍛錬をもって学習者を実践的求道者へと導いておりました。さらには、たびたび伊勢の神宮に参拝し、天壤無窮の神勅を仰ぎ、日本の国体の尊嚴を讃え、何よりも革命を否定することに徹底し、その革命の行われたことのない

日本の歴史の有難さを強調しました。闇斎の考えは、孔孟の説を批判する内容で、当時としては驚くべき新説でありました。この点は特に重要でありましょう。

闇斎の神道は垂加神道と呼ばれ、実践性を重んじ、特にその尊皇思想には、「京都に異変が起こったら何はさておいても飛んで行け、旅費が無ければ乞食して行け、死ぬならば皇居の壁にもたれて死んで土壁となっても皇居を守れ」といった御垣守の精神があり、きわめて厳しい実践性を求めています。その影響力は大きく、幕末の尊皇運動にも強い力を与えました。

遊佐木斎は、萬治元年（一六五八）の生まれ、仙台藩の儒学者であり、十九歳より二十二歳まで京都に遊学、その際に師事した学者が山崎闇斎であったのです。闇斎に師事した期間は短かったのですが、木斎こそは闇斎の学問を正しく継承した門下の高弟でありました。闇斎学派の研究の大家、平泉澄博士は木斎について次のように記しています。

「闇斎の学問を理解し、忠実に師説を伝えた一人は遊佐木斎でありました。その木斎が室鳩巢と論戦したことがあります。鳩巢は將軍徳川吉宗の信任を受けた人ですから、当時の学会では主流の一人。その鳩巢と考えるの違うのが木斎です。

鳩巢の考えは、道は世界に唯一つ、万国共通のものであり、それは即ち儒教である。それ

の外に、我が国の道とか、神道とかいうものがあるはずはない。木齋は日本の国体を重んじ、それは天壤とともに無窮だというが、およそ世の中に永久不滅というものはない。国は興つて必ず亡び、人は生まれて必ず死ぬのだ。支那の歴史を見ればそれは良くわかる。

之に対して木齋の答えた所は、きわめて親切でありました。即ち君臣の間の道徳は、どこまで行つても変わるはずは無く、君は君、臣は臣であつて、君が臣となつて、臣が君となる事はあるべきでない。天照大神が皇孫をおくだしになる時、宝祚の隆ならんこと、まさに天壤とともに窮なかるべしと仰せられたのは祝福の言葉であらうが、その祝福は、神徳と正教によつて実現しているのである。それ故に、外国はその歴史が革命によつて汚されてゐる事を恥ずべきであり、我が国はその万世一系の天皇を戴いてゐることを誇るべきであるのに、鳩巢が支那を基準として物を考え、革命を当然の事とし、我が国にもまたその機会が来るであらうというのは、はなはだ誤つてゐる。自分はそのような不吉な説が、皇国の前途に暗い影を投げるかも知れないと憂慮に堪えない。若しそのような不幸が起れば我々は一命を捨てて道を守り、国に殉じるのみであるが、鳩巢もよく反省してほしい。」

かような国家観、日本の国体への確信と敬慕を持っていた木斎によって、鹽竈神社縁起は作成されました。この点が、実に重大であると思います。

参道正面の社殿に武甕槌神（左宮）と経津主神（右宮）、向かつて右手の社殿には鹽土老翁神（別宮）を奉祀するという特殊な配置である現社殿。

土着の国つ神である鹽土老翁神を、あえて右手に、そして正面には天つ神の武甕槌神・経津主神を配した意図はどこにあったのでしょうか。私には、ここにこそ木斎の思想があったように感じています。天孫による建国事業を導く役割を果たされた武甕槌神・経津主神、この両神の猛々しい御働きによって、荒ぶる東北の地も平定され秩序が打ち立てられていきました。伊達家はもちろんのこと、この地を治めた者が鹽竈神社を拝する心中には、武甕槌神・経津主神の御神威のもとで地域の秩序安寧に努めたいとする誓いがあり、それによって立派な国造りに励みたいとの決意があったに違いありません。

更に言えば、天孫への忠義を以て御働きになった両神に習い、建国の理想その為に尽力するとの決意確認の場所、それが鹽竈神社ではなかったかということでもあります。

まさに、鹽竈神社は東北に於ける皇室敬慕・建国理想発信の地であり、だからこそ、奥州一宮として東北の地の安全を守護してきたものと考えるのであります。

以上、鹽竈神社の概要について、お話をさせて戴きました。駆け足の説明でもあり御不明の点が多々あったものと思いますが、何卒御許し願います。

長時間にわたり、ご静聴戴きまして心より御礼申し上げます。有難うございました。

参考文献

押木耿介著

「鹽竈神社」

学生社

昭和四十七年

横山秀哉著

「鹽竈神社の建築」

一森山叢書第一編

昭和四十三年

平泉 澄著

「少年日本史」

皇学館大学出版部

昭和四十五年

保田與重郎著

「皇大神宮の祭祀」

伊勢神宮崇敬会

平成十一年

勝岡八幡神社の一体走り

武智輝子

松山城の天守閣に登り北の方を見ると、瀬戸内の和氣の海が広がり、そして左手に海を背に勝岡八幡神社の杜と、樹齡五〇〇年の天を衝く松の並木が、目に飛び込んで来ます。勝岡町を初めて訪ねて来た人に、「あの松並木を目あてに」と教え、勝岡を忘れた人に、「あの大きな松の馬場・・・」と言えば、「あつ、松で思い出した」と即座に返って来る程、勝岡神社の松並木は有名でした。

御祭神は、小千御子おちのみこ、應神天皇、仲哀天皇、神功皇后、日賣大神ひめのおおかみをおまつりしています。母の話に依りますと、戦争中は勝つということ、おまいりの方が多かったそうです。そして、当地開拓に尽くされた、今は墓のみ残る片岡太右衛門一族の偉大な功績を讃え、

幾千代も語り伝えよ片岡の

松のみどりの有らん限りは

栄枯盛衰は世の常とは言いながら、全く感無量であります。

偉大な景觀を誇った宝の松も、大正、昭和に及んで樹齡尽きて幹が空洞となり、或いは樹勢衰えて伐り払い、数個の切株が在りし日の雄姿を偲ばせています。

勝岡八幡大神は、朝廷より菊の花の御紋章を賜り、神社からは遠浅の地の利による氏の特産物、食塩を献上しておりました。その為御用船は都としばしば往来したと伝えられ、和氣浜沖に停泊する御用船へ、神輿や唐櫃で裸の輿^{よちよう}丁が奉仕して、遠浅の浜を渡海し、故事にならって当社独特の神輿一体走りが、五〇〇年以上も前にはじまったと伝えられ、又一説では、大神の鎮座まします白人^{うらんど}の丘、広い神域の近くまで入江で、塩田浅瀬であり、氏の神に奉獻する五穀海山の幸を唐櫃に収め、裸の若者が奉仕して掛声勇ましく、潮時をみはからって往来した事に始まったとも伝えられています。

旧の例祭日は八月七日、現在は十月七日、例大祭日は日の出の頃から始まります。拝殿から神門まで御神輿は高く差し上げられ、勇壮豪快な御神幸であります。

高い石段、長い馬場、金色に輝く七体の御神輿は、松のみどりに、黄、赤、青の優雅なお衣の色調、勇ましく、美しい。ジャン、ジャン、ジャンの鈴の音は広い神域にこだまして、優美勇壮、まことに豪華絢爛、大絵巻を一時間三十分にならって展開していきます。お旅所で厳かな祭典の後、いよく待望の一体走ります。神輿一体に十人で走ります。

神守しんもりの青年は、家ではお頭付の鯛の膳をいただき、真夜中に和氣の海にて禊を行います。

優雅なお衣の色に調和させた、赤、白、黄、青の襷たすき、鉢巻はちまき、褌ふんどしのりりしいでたち、筋

肉たくましい健康美は、若き男の子の晴姿でもあり、女の子のあこがれの的でもあります。

一体走りの栄誉に輝く若者は、神輿の前で記念撮影の後に走る順番を待ち、予定の時刻が来たら合図一声、裸の若人に支えられて、さっと揚がる金色の神輿一体、千万の眼は一斉にこれに集中、無事に走り抜け、立派に走れと祈る心は皆ひとつ、徐ろに若者の肩にのりる神輿、湧く喚声、ワツサの掛声、動き出す神輿、波打つお衣、高鳴る鈴。激しい動きが、鈴の音が止むと神輿は宙に浮いて、百数十メートルを一直線に快走、息づまる一瞬、将に神人一体、尊厳神秘の極致に至るのであります。無事完走、魅せられた大観衆は万雷の拍手と喚声を以て之を賞揚します。

川の上流より一の体から七の体まで次々と、私達先人が遺した、まことに由緒深く、又勝岡神社独特の「松山市指定民俗無形文化財一体走り」は、子々孫々に末長く存続していきたいと思っております。

氏子の皆様方、本年も御協力よろしくお願い致します。

鹽竈神社の松青々と秋暑し

(愛媛県 勝岡八幡神社 宮司)

道彦

村田和弘

朝夕に神の御前にみそぎして、すめらが御代に仕えまつらむ

イーエツ エーイッ

遠つ神固め修めし大八洲、天地共にとはに榮えむ

エーイッ ホ

天津神国津神たちみそなはせ、おもひたけびて我が為す業を

エーイッ サ

これは我々神社界で禊を行う時の一つ「鳥船行事」の和歌であります。

今年の七月、私の念願でありました奈良県天理市の石上神宮で行われる神道行法すなわち「禊」の研修会に参加する事が出来ました。本来であればこの時期は四国の愛媛県石鎚神社の夏山大祭のご奉仕を行なっているのですが今年は時間を頂き「心身」の禊にと禊の道彦養成の講習に行つて参りました。

仏教では道彦のことを「雲水」といい、厳しい行と聞いていますが神道に於ける道彦養成の行程は朝四時起床、先ず最初に「禊」、朝食後講義と続き昼食、昼より講義夕食後「禊」

その後拝殿にて「鎮魂」行法の修行です。期間中は禁酒・禁煙となかなか厳しい内容でした。その中で唯一の楽しみと言えば食事の事だけです。その食事も「行」の一つだと思いました。一善のお粥と梅干し、それに一品のおかずといった質素な食事です。当然お代わりなどありません。ゆつくりとお粥を噛みしめ食事を行うのです。そのお陰で改めて物のありがたさを充分にしみじみと肌で感じました。後片付けを行う時、誰一人として食事を残す人はいませんでした。しかし、一般家庭とくらべてどうでしょうか？疑問が残ります。

「道彦」という言葉。神社界では「禊」を行う場合先達としてよく使う言葉。その道の先頭に立って指導する立場のことです。一見、周りを見回して見ると何処にでもおられるような人ではありますが、会社にしても社長という会社を代表する立場の人、学校にしても校長という立場。一昔前私達が子供の頃には「悪ガキ大将」と言うある意味で一目置かれた立場の人がいたと思います。最近では「悪ガキ大将」という言葉さえ聞く事が少なくなってきた様な気がするのですが・・・どちらにしても道彦とはその道のリーダー的存在の人を意味します。

私が子供の頃には、よく近所の仲間と遊びあちらこちらで悪い事をし、その度に近くの「カミナリおやじ」から説教を聞かされていたことを思い出します。その甲斐があり、やっ

てはいけない事・良い事を判断し、謝る事を覚えました。しかし今は「ゲーム脳」と言う最近の子供達は悪い事の判断が少し劣っている時代となりました。神社の境内で近所の子供達を注意をしても一言も「ごめんなさい」「すいません」という言葉も聞かれず、ボソボソと返事を返し何を言っているのかわからない現代っ子です。

一昨日、仙台空港でバスに乗った時の事です。バスを降りる時に、一人の小学生が側にいたサラリーマンの人にぶつかってしまい、その子供はとっさに小さい声ではありましたが「すいません」と謝りました。しかし、その大人の人は何も返事もせず子供を無視。その後子供はサラリーマンの前を歩きながら、チラチラと何度も振り返って大人の人を見ていました。その時大人が一声子供に返事をしたらお互いに気持ちよい一日を過ごせたのではないのでしょうか。私が一番気になる事は、もし、この子供がまた同じ様な事に遭遇した場合「謝っても謝らなくても何の返事もかえらないのなら・・・」と思い「すいません」との一言は無くなるのではないかという事です。

基本的な礼儀作法は人から教えて頂くと共に、自らの体験を通じて学んでゆくものだと思いますが、経験の長い私達大人が教え育てて行くのが私達大人のつとめで、先に生れた先生であり道彦といえるものと思います。しかしどうでしょう？。先生であり道彦たる私

達大人が子供や後輩達から尊敬される様な行動を取って生活しているでしょうか？。仕事の合間に仲間同志と私的な会話をしたり、自分が苦手なつらい仕事を頼まれると他人に押しつけるなど自己本意な仕事を選んではいませんか？ 子供は見えていないようでしたらとその後ろ姿を見ているものです。どこの世界にも模範となる人が存在します。私達大人がきちんと手本となり、今のこの荒廃した世相が少しでもよくなる様努力し導いて行かなければならないのではないのでしょうか。

神様は見てござる 子は親の後姿を見て育つ

千早振る神の開きし道を又開くは人の力なりけり

先人達は数々の教訓を残してくれました。今私達大人が立上がり教え導かなくては誰が道彦となるのでしょうか。

戦後六十年鹿児島知覧の飛行場より沖縄に向けて多くの若い青年達が特攻隊として飛び、散って行きました。日本の行先を安じ、妻や親を思い尊い生命を捧げ後を継ぐ人々に日本人の心を教え残しました。

「咲くもよし、散るはなほよしわかざくら」 岡山県第四〇振武隊少尉 中上敬一 十九才

(広島県 長束神社 祢宜)

返矢

畠田明彦

「悪い事をすれば罰が当たる。」子供の頃よく親や周りの大人達から聞かされた言葉です。「罰」とは神仏が人の悪行に対して下す「懲らしめ」であります。例えどのような巧妙な手口で人を欺けても、神様は必ず見ておられる。そして必ずその報いがあると言う事であります。現在各地で多発している非情な青少年犯罪を思う時、学校や家庭でもつとこのような事を、当たり前の事として教えて頂ければと最近つくづく思います。

さて、演題の「返矢」ですが、まさしくその「罰」を諭すものであります。

「返矢」と言えばまず思い浮かぶのが、古事記の天若日子のお話ではないでしょうか。最初にそのお話を口語でわかりやすくさせて頂きたいと思います。

高御産巢日神と天照大神は葦原中津国を平定させるために 初めに御子である天忍穗耳命を天降らせましたが、下界は物騒だと言って命は途中で引き返してしまい、次に天菩比神を天降らせましたが、この神は大国主命に媚びへつらつて三年も復命しませんでした。

そこで高御産巢日神と天照大神は八百万の神々を集め、「今度はどの神を遣わそう」と相談されると、思金神おもいかねのかみが「天津国玉神あまつくにたまのかみの子、天若日子を遣わすのがよいでしょう」と提案されました。そして天若日子に天之麻迦古弓あめのまかこゆみと天之波波矢あめのははやを与え天降させます。しかし天若日子は大国主命の娘下照比売したてるひめを娶り、この国を自分の物にしようとして、八年も復命しませんでした。そこで天若日子が長く留まっている訳を問い質すために雉鳴女きとのなきめが遣わされます。雉鳴女は天若日子の家の門の湯津楓ゆつかつらにとまって、洩れなく天津神の言葉を伝えます。これを聞きつけた側女そばめの天佐具売あめのさぐめは「この鳥の鳴き声は大変不吉です。射殺すべきでしょう」と天若日子に進言します。天若日子はすぐに天津神から賜った天之麻迦古弓と天之波波矢でその雉を射殺いたします。その矢は雉の胸を貫通して天安河の河原に鎮座している高木神たかぎのかみ（高御産巢日神の別名）と天照大神のもとにまで届きます。高木神がその矢を取って見ると、矢の羽に血がついていました。高木神は「この矢は天若日子に賜った矢だ」と言って神々に見せ、「もし天若日子が我が命を違えずに悪しき神に放った矢ならば天若日子に当たるな。もし逆心の心があるのならその命を奪うだろう」と言って矢を地上に投げ返しました。そして矢は床で寝ている天若日子の胸を貫き死に至らしめるのです。

この返矢の伝説は聖書にもあります。簡単に紹介させて頂きます。

旧約聖書の創世記十章に登場するニムロデ（ニムロッド）にまつわる物語です。ノアの曾孫にあたるニムロデは勇敢な狩人であり、地上で最初の勇士・権力者となります。主によつて力を得た人物だったようですが、その権力に任せて諸地方に進出し、それらの地方を配下に収めていったようです。「ラビの伝承」ーラビ・ユダヤ教の教師ーによれば、ニムロデは一国を支配する王となり、自らを神になぞらえ、やがて彼は天に侵攻しようと考えます。もつとも天に近いところまで登りつめようとして、そのための階梯となるバベルの塔を建築するのです。そしてその最上階から神目掛けて天上に矢を射ると、その矢が神によつて返されニムロデの胸板を貫くと言うお話です。

創世記十一章の伝説には、「当時世界中の人間はみな一つの言葉を話していた。しかし神は『この塔は神と同じ高さまで登り詰めようとした人間たちの驕慢な心の象徴である。人間たちが皆同じ言葉を話しているからこのような事を企てるのだ』と天から降りて人間の言葉を混乱（バラルーバベルの語源）させてしまった。これによつて現在の六千にも及ぶ言語が誕生した」とあります。

この二つの「返矢」。何れも神に弓引く行為に対する報いを説いたものでありますが、根本的な違いがあるとは思われませんか。

「ニムロデの矢」は唯一絶対神に叛逆して放った矢であります。そして「絶対」の領域に人が踏み込む事があつてはならない。犯した者はこのような結末になる。人は神には絶対になれないのだ。と神に矢を返されるのです。そして後にニムロデは、神に叛逆し、政治的な権力をもつて力の支配をこの地上にもたらした最初の人物として伝承される訳です。これに対し「天若日子の矢」は、少々情けない話ですが、側女の言葉にそそのかされ、うるさい雉鳴女に矢を放ち、それが貫通して天上に届いてしまふ訳であります。またこれは人が神へ叛逆したものではありません、神々のお話なのです。また高木神は邪心の有無の判断を返矢に託しています。表現が悪いですが、そこには人間臭さを感じられます。つまり同じ「返矢」でも神の温かみを感じられるのです。

神を凌駕しようとする人間の傲慢さに対しての「返矢」。人間的で絶対ではない神々が織りなす日本神話の「返矢」。天若日子の返矢は、神への叛逆と言う単純なものではなく、人間の弱さ、心理の複雑さを捉え、その上での邪心を戒める奥深さがあると思います。

次世代を担う若者達の心が闇と化している現代、日本神話そして神道こそがこの「闇」に希望の明かりを灯し得るのではないでしょうか。

杜の教

生 寫 經 和

今年もまた、日本列島は猛暑に見舞われ、一方では大雨による水害、一方では深刻な水不足と、一週間前にはこの宮城県でも震度六弱の地震が発生するなど、自然の猛威に翻弄されつつ、漸くに夏の終りを迎えようとしています。

そうした自然現象ではありませんが、近年全国的に熊や猿などの野生動物が町中に現れ、果ては人家に侵入し食物を盗っていくというニュースを頻繁に見聞きいたします。

私は、京都市の西北部に位置する住宅地の一角にある小さな神社に住まいをしておりますが、ある晩、外でゴソゴソと音がするため、玄関の隙間から恐る恐る覗きますと、大きな猪と、うり坊が数頭悠々と境内を徘徊しておりました。もちろん、我が家に猪の餌があるわけもなく、すごすごと帰ってしまいました。

しかし、そうした以前には間近で見ることのなかった動物たちに頻繁に出くわすことに

なり、最近頃に顕著になった生態系の変化に驚かされます。もともと人は里に、家畜以外の動物は山や森にと明確な棲み分けがなされ、うまく共存してきたものであります。それが天候不順や乱開発による樹木の伐採などの影響で、山や森にエサがなくなり、色々な動物が町中に出没することとなり、動物と人間との生活の範囲も、今やボーダレスの時代となった感じがいたします。

最近、「里山」という語をよく耳にいたします。この里山といいますのは、村や人里に近く、雑木林にわき水や湿地が接している小さな自然環境をいうそうであります。里山は平地、裏山、小丘陵とさまざまで、かつては農家が灌漑用の水や、燃料となる薪、肥料用の落ち葉などを確保できたのは、地域住民共有の里山があったからだといわれています。また、そこはさまざまな野生動物、鳥の生息の場でもありました。ところが、農家に化学肥料やガスなどが普及するにつれ、その存在は軽視され、宅地開発などが進むにつれて、急速に姿を消してしまいました。その鳥や獣と人間のいわば緩衝地帯であり、区分がなされていた場所が、いつの間にか境界がなくなり、人間はそれこそ傍若無人に開発の名の下に、森へ山へと押し入り木を伐採し、餌の無くなった動物たちはやむなく人家近へ出沒せざるを得なくなっていました。

現代の里山の多くは、ただ近場にある雑木林となつてしまつた感がありますが、十数年前から、この里山の積極的な見直しと保全がさかんに提唱されつつあります。現在では都市生活に緑の潤いを与え、いわゆるヒートアイランド現象を緩和するなど重要な役割が考えられていますし、「里山」の存在と、「神のモリ」である神社、すなわち鎮守の杜とは深い関わりがあるといえます。もともと、神社の祭りはむらの広場に神を迎え、収穫を祈り、感謝したところから始まりました。春になると山の神は里に下りて田の神となり、秋の収穫が終わると再び山へ帰るという去来信仰がありますが、その信仰の中心をなすのが、祭祀の場である杜の存在であります。

森と人との関係について、平野秀樹さんという林野庁の研究普及課長をされている方が、ある講演の中で次のようにおっしゃっています。

「自然界は森の場合は四億年前からあるわけです。我々（人間）は、たかだか五百万年前に登場した生物です。サルまで遡つてもわずか五千万年ですから、いずれにしても森のほうがずいぶん先輩になるわけです。ですから、森にとっては、後発のヒトがいなくても全然関係ないわけですが、我々ヒトは森がなければ生きられない。そういう関係にあります。

『共生』というのは、要するに一方がいないと生きていけないという関係です。ヒトと森の関係はそうではなくて、我々は森がないと困るのですが、森は我々がいなくても全然困らないということである。そういう意味で考えると、私たちは森に『寄生』していると言い換えた方が正しい」と。

非常に的を射た、ある意味では皮肉な指摘であるといえましょう。確かに我々は自然の恩恵を無料で受けるばかりで、古来の日本人が当然の如く持ち続けてきた自然に対する畏敬と感謝の心を忘れ去ってしまっています。

我々の祖先は、山や川、草木など、すべての自然の中に神を見いだし、自然を称えて神と仰いでまいりました。日本人にとって、自然は人間によつて征服せられるものではなく、永遠の生命をもたしてくる大いなる存在であります。

神話の中では、イザナギ・イザナミ二柱の神からこの国土や山川草木が生まれ、そしてまた人々の祖先となった多くの神々が生まれています。つまり自然と人間は、産霊の神から生まれ出た兄弟であると云うことが出来ます。

そして、その神を迎えて神社としてまつりました。緑溢れる鎮守の杜は本来の自然そのものであるのは当然であります。最も大事なことは、そこに古来の私たちの祖先の信仰

が脈々と息づいていることでもあります。その自然への限らない信仰が私たちの「神道」にあります。神道とは、自然と共に生き、祖先と共に生き、人々と共に生きる心であるといわれます。すなわち神道は「命の教え」であるといえます。

天地の中にみちたる草木まで 神のすがたと見つつ恐れよ

卜部兼邦の和歌であります。鎮守の杜は、人に様々なことを教え導き、人間は自然に対する敬愛と慎みを忘れない。それが寄生ではない、真の共生の姿であらうかと思えます。

(京都府 松尾大社 権宮司)

お塩とお宮の切れない関係

村田佳子

友人と外食に出かけた時、料理屋の玄関先であれ？と思う光景を目にしました。玄関の前に塩が盛ってあるのです。いったい何のために？興味を魅かれる光景でした。何だろうとついついそのお店へと招きいれられてしまいました。

これが世に言う『哀れな牛の招き塩』。その昔、中国、晋の初代皇帝は、後宮に控える一万人を超す女性の中から、本日の相手を探すのに、いちいち選ぶのが面倒になって、自分の乗る牛にひかせた車がぴたと止まった所の部屋を選ぶ事にしたのです。すると、女性の中にも頭の賢い人が居て、彼女は自分の部屋の前に塩をばらばらと撒いておいたのです。好物の塩を目の前にして、牛は必ずその部屋の前で足を止め、塩をペロペロとしている間に、彼女は皇帝を自分の部屋に招き入れることに成功するのです。とまあ、これがお料理屋の前に盛ってあるお塩の起源と言われる話なのです。（山原條二『もっと知りたい塩の話

（英伝社）参考）

しかし、私の目にはきれいに掃除され打ち水をした所に盛つてある白い塩は、ただ単に、興味を引く為だけのものではなく、「私どもの店は掃除もお食事の準備・心構えも含めて全て皆さんをお招きする準備が整っています。いらつしやいませ。」という気持ちが見れているような印象も与えてくれました。

日本人は昔からの風習で、お葬式から帰つて来た時、家に入る前に体にお塩をかけ、そして舐めるといふ事をします。近年、この風習は、お葬式が終わつた後汚いものを祓うような行為で、死者に対して失礼だとか差別につながるとして撤廃しようとする動きがあります。しかしこれは決して汚いからお塩で祓っている訳ではないのです。日本の伝統的スポーツである相撲では、土俵に上がる時、力士は必ず塩を舐めたり撒いたりします。

お相撲さんは汚いから塩を舐めたり撒いたりするのでしょいか？

調べてみると、これにはちゃんと理由があるようで、先述の『もつと知りたい塩の話』によれば、『力士の間では「土俵の土はケガを悪化させない」と言い伝えがあり、ケガをしたら実際に土俵の土をケガした部分に擦り込んだ』のだそうです。また、『塩には神経を興奮させるはたらきがあり、塩をなめることで闘志を奮い立たせている』のだそうです。

これと同じ事で、お葬式の後でお塩を使うというのは、故人とお別れをして、これから

は生きてその姿を拝することや声を聞くことの出来ない辛さ、悲しさ、寂しさから来る、とても沈んだ非日常的な気持ち、塩の持つ力で元氣を取り戻そう、氣分を少しでも高めようとする為のものなのです。

生命は海から生まれたと言われています。実際に人間の体内に流れる血は、海の成分とよく似ているとされますし、『手のひらを太陽に』という歌にも出て来ますが人の血液には血潮という呼び名もあり、まさしく海を連想させるものです。そして胎児が育つ羊水も海の水そのものなのです。あのしょっぱい海水から日本人は塩を取り出して来ました。生きて行く上で、なくてはならないものだからです。日本人は、歴史の中で塩の大切さや効能に氣付き、塩に関わる文化を沢山持つています。梅干に代表される保存食は、漬物から魚の干物に至るまで塩を無くして語る事は出来ません。

塩の効能に氣付いて大切にして来たのは何も日本人だけではありません。ピエール・ラズロ著・神田順子訳の『塩の博物誌（東京書籍）』によれば、『（ユダヤ・キリスト教文化圏において）塩が関係する儀式はすべて聖書と関連がある。ユダヤ人にとって、塩は聖書から切り離せない。聖書には、塩に関する激命が随所にみられる。たとえば「献げ物にはすべて塩をかけてささげよ」があります。保存ということに関すれば、遠くエジプ

トではミイラを作るのに塩を使つたとされています。

塩は、世界中の国々で大切にされて来たのです。

日本において塩の大切さを語ろうとする時、お宮さんの存在無くして語ることは出来ません。日本の神話である『古事記』（西宮一民校注・新潮日本古典集成より）に

ここに、天つ神のもろもろの命もちて、伊耶那岐の命・伊耶那美の命の二柱の神に「のただよへる国を修理め固め成せ」と詔らし、天の沼矛を賜ひて、言依さしたまひき。かれ、二柱の神天の浮橋に立たして、その沼矛を指し下して画かせば、塩こをろころに画き鳴して、引き上げたまふ時に、その矛の末より垂り落つる塩の累り積れる、嶋と成りき。これ淤能碁呂嶋ぞ。

とあります。日本の国のはじまりはイザナギ、イザナミの男女二神が海水を矛でかき回し、その矛から滴り落ちる塩が積み重なって出来た島だとされているのです。国生み、つまりは国の成り立ちからして塩は切り離すことが出来ません。

また日本には全国各所に「塩釜神社」というお宮があります。どのような神さまを祭つたお宮かと言えば、海そのものを表すとされる「塩土老翁神」です。全国にある塩釜神社の中でも殊に有名な社に、宮城県は松島海岸を眼下に望むことの出来る、志波彦神社・鹽

竈神社があります。その神社の名譽宮司であられた押木耿介氏が昭和四十七年に著されたものを、今年六月、学生社から新版として改行し出版された『鹽竈神社』に詳らかに示されている所です。この鹽竈神社で有名な神事に「藻塩焼神事」というものがあります。この神事では、海からホンダワラという海藻を取って来て、それに海水をかけ濃くした海水を、竈を利用して煮詰め、塩を作り出すという事が行われます。

竈から塩をとる以前は、土器を利用して塩がとられていました。今でこそお店に行けば簡単に塩を手に入れる事が出来ますが、壊れやすい土器から竈への変化は、その文化が伝わった当時の人にしてみれば、本当にありがたいうれしい事であつたに違いありません。この塩の製法を伝えたと言われるのが「塩土老翁神」なのです。

塩を大切にする心と、その製法を伝えた神さまへの感謝の心が今なお神事として受け継がれていることに感動を覚えずにはられません。

特殊な神事に限らず、日本全国どこのお宮さんに行っても、塩を使わない所はありません。お宮参り、地鎮祭、夏祭り、秋祭り、どのお祭りをするのにも、必ずお塩によって祓いが行われてから神事が始まります。神さまに日ごろの感謝を報告する時など、神さまに向かう心はいつも以上に真剣であることが相應しいと感じます。いつも以上に気持ちの高

まった状態、人によっては穏やかと感ずるかもしれない状態に心を置くためにお祓いをするのです。

そして気持ちを高める為だけではなく、人が生きる為に絶対必要である大切な物として、また、海からとれる幸の代表として神さまへのお供えには塩はなくてはならないのです。神棚で塩が祭られているのもそういう理由からなのです。

私たちのご先祖は、長い歴史の中で塩の持つ効果や大切さに気付き大事にして来ました。豊かに物が溢れる時代にあつて、自然からの贈り物であるお塩に感謝するという心は悲しいかな、忘れられがちです。しかし普段忘れがちな自然への感謝の心を、お宮では日々の祭りや、季節の祭り、様々な祭りの中で守り伝えてきたのです。

何気なく使っている塩、されど塩なのです。お宮さんの祭り、守り伝えられた伝統には必ず意味があるのです。

どうか皆さん豊かな時代ではあるけれど、ぜひともご家庭において神棚をお祀り下さい。そしてお塩をお供えし、一日のはじめと終わりに神さまに向き合う時は感謝の心で胸をいっぱいにして、元気でハツラツとした生活を送られます事を祈念いたしまして本日のお話を終わらせたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

(広島県 長束神社 権禰宜)

夏越大祓まつり

西村純子

毎日早朝より「セミ」の大合唱から始まる暑い毎日、今年の夏も大変厳しい暑さでございました。

歳を重ねるごとに厳しく感じられますが、皆様いかがでしょうか？

少し油断をすると、体調が狂い、負けそうになります。私達が生かされている、ありがたい大自然も狂ってきています。いわゆる地球温暖化のせいもありましょうし、いずれにしても私達で出来るところは目標に向って努力して、「生かされている」ことに感謝して、有意義に一日一日を大切に過ごして参りたいと思っています。

さて私達は罪・穢が無いと思いたいのですが、日々一生懸命生活しているうちに、知らず知らずと罪・穢にふれ、思わぬ災難や事故に遭うことがあります。

そこで、私達を一番近くで見守って下さっている「氏神さま」で先ずお祓いをし、心も体も清めると共に、更に清く、明るく生活できるように、神さまに謝恩と自己反省の祈り

をする日として、「大祓」という人々の罪・穢を祓う行事が、昔から年二回、六月と十二月の晦日に行われてきています。

そこで「夏越大祓まつり」（茅の輪くぐり）ですが、夏越は字の通り暑い夏を災いなく無事に過ごせるようにと参拝して祈願するわけで、境内に茅で作った大きな茅の輪をくぐり、これも昔から和紙で作った「人形」^{ひとがた}に名前と年令を書いて、ご自身の息を吹きかけ、ご神前に納めれば無病息災、一夏を無事に過ごせると言い伝えられています。

当神社、生名八幡神社の文化伝統行事の一つとして、精一杯今日まで継承しています。

氏子の皆様、数多くの神さまが見守って下さっているからこそ、幸せな毎日が送れます。感謝の気持ちを忘れないで神社に参拝いたしましょう。

また、アトラクションの一つとして、小学校五・六年生の男女児童有志による「立石太鼓」の演奏を行っています。

この立石太鼓は「イヤーツ」というかけ声と太鼓の音とともに勇壮な姿を披露し、まっすぐに彩りを添えているのです。

昭和六十年に、この「立石太鼓」は立石山の磐座と祭の太鼓をイメージして、私、西村純子が素人ながら作曲したものです。

早いもので、あれから二十一年目を迎えますね。これからは少子化で子供が少なくなりますが、続けて演奏できれば幸甚です。

最初は女性である敬神婦人会の方々へと考えていましたが、受けていただけなくて、男性の役所にお勤めの方、また商工会の方々に指導し、四、五年は演奏していただきましたが、それぐ多忙になられ、残念ながら続かなかったのです。幸い子供達にも指導していたのが、今日まで継続して演奏されているわけでございます。

さて、皆さまご承知のとおり、今年は日露戦争戦勝百年、また大東亜戦争終結六十年の還暦の節目の年であり、重要な時期でもあります。

靖国神社参拝の問題、歴史教科書の問題、拉致の問題、他にも沢山問題がございます。

先ず自分のできることを、知っていることを若い人々、青少年に話し、語り合い、戦争のない、世界中「平和」でありますよう祈り上げましょう。

(愛媛県 生名八幡神社 宮司)

平和をこよなく願った日露戦争の將軍

松吉宣和

乃木希典は、嘉永二年（一八四九年）十一月十一日、父乃木十郎希次、母常陸土浦藩士、長谷川金太夫の長女寿子の長男として、武蔵国江戸麻布日ヶ窪、長州毛利藩上屋敷で誕生。周りからは、体が弱く泣き虫で、からかわれた。父は高齢で再婚の為、子供は無理とあきらめていた時にさずかったので、無人と名付けた。（先妻の子供二人を亡くし、三人目）

八歳で、島田松秀に付き句読、習字を学び、九歳、松岡明義に、小笠流躰方を学び、十歳の時、乃木十郎希次が、藩より百日間の閉門の刑を受け、江戸より家族全員で（下僕を含め八名）、長州豊浦の地に移り住み、小串屋（割烹旅館）に寄宿、横枕に定住（現旧邸）。

十一歳、結城香崖に漢文詩文、江見後籐兵衛に武家礼法、弓、馬術、故実を修め、十三歳、工藤八右衛門に人見馬術、小島権之助に日置流弓術、多賀鉄之丞に洋式砲術、福田扇馬に兵書歴史を学んだ。十四歳、中村安積に宝蔵院流槍術、黒田八太郎に田宮流剣道を学び、十五歳、藩学敬業館集童場に入學、十二月に元服、名前を源三と改め、父より吉田松

陰遺著「武教講録」を手写して与えられたが、武芸で人に勝つことは難しいと考え、学問で身を立てようと思い、十六歳、両親に無断で、萩の叔父、玉木文之進のところに行き「私は体が弱く、生涯学問で身を立てたい」と話したところ、「体が弱くては学問は出来ない」と、ことわられ、数日間、門の外で野宿をして許しが出るまで、その場を動かなかった。文之進の妻が見るに見かねて、三度の食事におにぎりを内緒で差し入れ、親元に帰ることを進めたが、その場を動かこうとせず、奥様は熱意にうたれて文之進に、「源三を私にあずからして下さい」と願い出て、その日から、夜明けより日暮れまで、毎日農作業にあけくれ、夜は遅くまで勉学に励み、虚弱だった体は、頑強な体となった。

十七歳の九月、明倫館文学寮に通い、栗栖又助に一刀流剣道を学び、十八歳、軍務に就き奇兵隊と出会い、山県有朋元帥達の指導を受け、名を文蔵と改めた。二十歳の正月、栗栖又助より一刀流剣道の目録を伝授され、二十一歳、報告隊の漢学助教授となり、伏見御親兵兵営入営、二十二歳、藩命により、長州に帰り、豊浦藩陸軍練兵教官を命ぜられ、二十三歳、陸軍少佐を命ぜられて、正七位を賜り、名を希典と改めた。

明治十年、二十九歳、政府軍の連隊長として、西南戦争に参加、河原林少尉が負傷し、連隊長より預かった日の丸の軍旗を、敵に奪われ、責任を感じ、乃木連隊長は、明治天皇

に命を預けた。

十一月三十一日、父乃木十郎希次は、江戸で七十三歳の生涯を終えた。

三十歳のとき、薩州藩士湯池定之の四女お七（後に静子と改名、二十歳）と結婚、翌年八月長男勝典誕生、赤坂区新坂町に邸宅を設け、三十三歳、十二月次男保典誕生（長女、三男、幼児の時死亡）、三十八歳、明治天皇の御名代で英国皇太子の戴冠式に、川上操六陸軍少尉と出席し、同時に独逸遊学を仰せつけられた。四十八歳、台湾総督に任命され、共に生活していた、母寿子が六十九歳で台湾において他界。

十八歳より、軍人として歩んだ希典は、明治三十七年、五十六歳、日露戦争が始まると第三軍司令官として、旅順要塞の攻略戦で指揮を執り、露西亜軍を降伏させた。ロシアの將軍ステッセルと水師營で会見したとき、各国の軍事記者から「写真を撮りたい」と、申し出があり、將軍は「敵の將軍にとって後々まで恥が残るような写真を撮らせることは、日本の武士道が許さない。会見後我々が友人になって、同列に並んだところを一枚だけ許そう」と言い、ステッセル將軍以下に帶刀を許し写真に収まった。帰国してもその喜びはなく、大勢の犠牲者を出し、長男勝典二六歳、次男保典二四歳も戦死し、涙を流し申し訳ない気持ちで、普段着で一人列車に乗り、全国各地の遺族と傷病兵へのお見舞いに訪問し、

その人達の為の病院建設に、自分の財産をはたいて協力し、その時、義手を発明した。五十九歳、学習院院長を明治天皇より命ぜられ、昭和天皇、秩父宮、三笠宮の幼児教育に携わった。みんなに慕われた希典は、明治天皇御大葬の九月十三日に静子夫人と共に辞世の句を残し、東京赤坂の自宅で殉死。六十四歳

各国の賢人達は、「乃木を生んだ日本だから、日本人は皆立派であろう」。「日本に、乃木のような大將が生きていたならば、第二次世界大戦はおこらなかったであろう」と、第二次世界大戦後の処理にあたった、連合軍司令官マッカーサー元帥はこう回想している。

輝かしい多くの勝利と数知れぬ犠牲、日露戦争の明暗を一身に担い、乃木大將の功績は、恒久平和を後世に語り継がれることを願い、武運長久、学問の神として、全国八ヶ所の乃木神社の御祭神として祭られている。

(山口県 乃木神社 宮司)

時を刻む

芦原高穂

四月二十五日午前九時二〇分ごろ、兵庫県尼崎市のＪＲ西日本福知山線塚口―尼崎駅間の第一新横枕踏切の手前で、宝塚発同志社前行き快速電車の車両七両のうち四両が脱線、一―四両目が線路脇にはみ出し、一・二両目はマンションに激突、大破した。電車には乗客約五八〇人が乗っており、死者男性五十九人、女性四十七人。負傷者は四六一人に上った。高見隆二郎運転士（二三）も同日午後、運転席部分から遺体で収容された。

この痛ましい事故は、高見運転手が、ほんの一・二分の遅れを取り戻すべく制限速度を超えたスピードで、カーブに入ったこととなっておりますが、これは時間を守るといっても時間に拘束された運行実態というものが見えてくるわけであります。

良きにつけ悪しきにつけ、この背景にある定時運行・定時運行率といわれる我が国の鉄道の定時性は、世界も驚嘆するもので、新幹線は三十秒・在来線でも一分以内と言われている。

フランス版新幹線であるTGVの定時性は

九十%ですが、その誤差は十四分以内ということで統計の基礎が既にちがっております。

「たいへいの眠りを覚ます 蒸気船 たった四はいで 夜も眠れず」嘉永六年（一八五

三）浦賀沖のペリー来航では、江戸中が大騒ぎになりましたが、しかし、夜も眠れなかったのは、何も江戸の人々ばかりではなかったのです。黒船船長のペリーも眠れなかったのです。それは、陸のあちこちから鳴り響く時を知らせる鐘の音でした。

当時は時を知らせる手立てとしての、鐘は寺院のみならず町々に設置された鐘が九つ八つ七つ等と時を知らせておりました。

こうした鐘を警鐘と思ったペリーは容易に眠りにつくことは出来なかったようです。

このことは当時の日本人が鐘の音によって時を共有し、その共通の時刻をもとに生活していた事を示しております、時間の正確性を培う一助になったことは間違いありません。こうした全国一律に時報を実施する仕組みは角山栄の『時計の社会史』によれば、江戸時代中期と言われているようですが、世界的に見てもこのように正確な時刻を知らせることが出来ていたのは、同じ時代のイギリスぐらいであったそうです。

また、このことにより勤労者の勤務時間や婦女子の外出時刻の規制、商店の営業時間、

あるいは一日の記録や日記などの記録類への記帳に非常に役立ち、時刻を共有することができれば、大体赤穂浪士の討ち入りも実現できませんでした。

移動の手段としての鉄道を考えるとき、その定時制と言うものが重要になります。時刻を迎えたら何かが確実に行われる、という仕組みは、時間を有効に使うためには絶対必要な事であります。

こうした定時制の上に立って人の移動のプログラムである移動行程の成立をみる上で、見逃してはならないのが、江戸時代における参勤交代であります。この全国諸大名の移動については、随行の人数、馬・武器の数などが定められ、事前に報告しなければならず、道中の宿泊場所である陣屋に別の大名が重ならないように家臣たちが何ヶ月も前から調整したと言われておりまして、こうした苦労を物語る資料として、加賀藩の軍学者有沢永貞考案の金沢・板橋間駅里程表という表が残されており、これが網の目状の行程プログラムで、現在の列車プログラムを想起させるものがあります。つまり一日単位と一分単位を変えただけで共通するものがあるわけです。

こうした時刻という仕組みの基礎があつて明治の鉄道事業という外国の定時制を求める事業展開は、優秀な土木技術と相まって鉄道事業の基礎となった事は言うまでもないこと

であります。

諸外国に比べ急速に鉄道網を充実させることが出来た背景にはそうした国民性と国家の完成された仕組みというものが息づいていると言うことです。

この時を刻むと言うことを公式に国家の仕組みとして取り入れられたのは、近江神宮の御祭神でもあります天智天皇であります、

ご承知の通り七世紀中期に活躍された天智天皇は、中大兄皇子として、大化の改新を通じて、古代日本の建国に貢献された方であります。殊に即位後は有名な公地公民制・班田収授制をはじめ、戸籍の整備と共に暦なども整備し、漏刻と言われる水時計を取り入れ、それに併せて時刻を庶民に伝えたと言います。

自然と共存する生活の中で、時を刻みこれを共通認識として、社会秩序を形成するといふ、現代では当たり前の事ながら、その先進性を鑑みると、天智天皇のその先見性こそは正に御神徳そのものであると思うのであります。

私たちはそうした先人の先見性というもので人生そのものが成り立っていると言っても過言ではありません。そうした先人の足跡を学び、大切なことは真摯に感謝することでありまして、心の中から将来の課題を解決する糸口が見えてくるのではないのでしょうか。

(北海道 旭川神社 宮司)

社報二〇四号に思う

河野 誠

社報「さえりやま」の創刊号は平成三年六月でした。前々より社報を発行したいと考えていたのですが、なかなか発行に踏み切れずにいました。偶々高校の講師の勤務が、常勤より非常勤に変わったのを機会に、長年の宿題だった社報の発行することに決意いたしました。果たして、継続して社報が出せるだろうか。文章に自信のない自分に、他人様に読んで戴けるような紙面が作れるだろうか。考えていけば、不安はつのるばかり。そこで、ままよ、兎に角、一步を踏み出す事が肝心と、不安を懷いた儘創刊号を発行しました。

どちらかと云うと、よく考えもせずに、決断する性格の私だけに、妻にも遠慮しながら社報第一号を出したわけです。

父の好んだ言葉に「熟慮断行」と云う格言がありますが、発刊へと動き始めました。

社報の構成は、用紙はB4、四頁ものと決め一頁の上段は神訓または今月の言葉を書き、その解説をしました。この言葉は昭和五十八年西日本神道講演研修会松山大会で、故佐

古幸嬰先生より、「格言、ことわざ等を社頭に掲示するのは氏子教化にとって良いことだ」とお教え頂き早速実行致しました。爾来二十二年間毎月掲示の言葉を替えました。試みに最近の「今月の言葉」を紹介します。

◎当り前の事に 感謝しよう

◎生きてゆきたし 敬老に相応しく

◎お米を粗末にすれば 罰があたる

◎良い種を蒔こう

◎明日に希望を懷き 今を生き抜こう

◎無償の愛に生きよう

◎五月晴れのような 心をもとう

◎一木一草に命あり 人は命賜りて生きる

◎今年こそ心身淨化に 精出そう

◎助け合いの共生社会を創ろう

◎暑ければ暑いほど 待ちこがれる秋の風

これを毎月氏子区域に掲示して回るのです。この一つの言葉に対して千二百字位の解説

文を書いています。

一頁目の下段は今月と来月の神社の祭典並びに行事予定を書き、又亡くなられた方の供養として、氏神様に御寄付下された事に対する御礼等を書きます。来月の予定を書くのは、予め神社のことを承知して頂いて、出来るだけ御協力を願う為です。氏子の計報は社報を見て頂ければ分かる様にしてあります。

次に二頁目ですが、齋島神社の神社史を毎号書きました。齋島神社（旧村社）氏子区域の大浜町は北條時代には現在の氏神様の山の嶺線を境に、幕府と朝廷側に二分されていたといわれ、所謂租界地的な存在だったと云います。従って隣町とはかなり町民性が異なります。江戸時代の神社史は郷土史と表裏一体です。元和時代に火災により社殿を焼失してより再建、それ以後の棟札二十枚は大切に保管されています。江戸時代には棟札以外には神社の記録はありません。江戸時代迄は隣町の中庄八幡神社の摂社でした。明治十三年、神社の独立運動を始めました。当然本家筋の中庄八幡神社よりは猛烈に反対をされました。それに耐えて新しい神殿と祝詞殿、拝殿は新築され、神職も専任宮司に着任願いました。新殿の敷地は岩盤をかなり掘削して造られており、基礎は岩盤の上に構築されています。当時の氏子の心意気の凄まじさを感じます。

この神社史も平成十六年十二月号・第一九五号で区切りを付け、現在は「神社奉務回顧」と題して、私が四十一歳の初老よりの奉務期間四十年の出来事や、感じたことを書き綴っています。

二頁目の下段は神社に拘らず郷土の経済風俗等を、将来郷土史に関心をもたれる人々に参考になるように、できるだけ具体的に数的に書くように心がけて書いています。

最近のものを二、三挙げて見ると

一、知友との出会いの初詣りの神社境内

二、小路の地藏さん

三、神明祭のあれこれ

等です。また三頁四頁には氏子の一人である須山正明さんが毎号二頁に渡り「小天下」欄に投稿され、花を添えてくれています。現代の世情への批判、思い出等あらゆる分野に健筆を振るって下さっている事に感謝しています。

又氏子三百戸といった小さな神社で、毎月社報が発行ができ、今月号で二〇五号を数えることになります。又毎月の月例祭には氏子の約三分の一の九十余名の人の御参拝をいただいているのは、御神徳の広く高い氏神様のお加護の賜と感謝せずにはおれません。

氏神様のお仕え人として益々謙虚に誠心誠意ご奉仕させて頂き、氏神さまにも、氏子の皆さまにも愛される神職として、日々送らせて頂く所存です。宜しく御指導をお願い致します。

(広島県 齋島神社 宮司)

登山に学ぶ

渡邊知宣

今日は、私が若い頃から好きであつた登山、いわゆる山登りの事について話をしてみたいと思います。

皆様も一度や二度は近くの山々に登られた経験をお持ちだと存じますので、その時の事を思い出しながらお聞きいただきたいと思います。

低い里山は別にして、高さ千メートルを超えるような山の場合、その頂上目指しての山道は決して楽ではありません。楽ではないどころか疲れて、もう一步も歩けないという事や、ひやつとする危ない事が度々有ります。

しかし頂上に到達したときの充実感、その道が楽ではなかったほど大きく、本当に素晴らしいものです。

この登山という行為は、私たちにいろんな教訓・人生訓を教えてくれるように思っています。

昨年、私は数え六十一歳の還暦の歳を迎えました。第二の人生の出発の年と言われるこの年の記念にと、長年の念願であった富士山の登山に挑戦致しました。

最近、ほとんどの人が五合目までは車で行き、そこから登山を開始されていますが、私は昔ながらに麓の富士浅間神社をお参りしてからの登山、いわゆる〇合目から登り始めました。私一人だけの単独登山です。

富士山は三、七七六メートルという日本一の高さだけにやはり本当に大変でした。

そして今年は、満で数えて六十一歳を迎える想い出にと九州では最高峰の宮之浦岳の登山を試みました。

宮之浦岳は、縄文杉で有名な屋久島にあります。無人の山小屋に宿泊しながらのこの登山も、非常に厳しいものでしたが、石楠花の花が満開の季節で想い出の深いものとなりました。

今日は、子供の頃登った近くの里山である小岱山、学生の頃登った阿蘇の山、若い頃登った北アルプスの山々、さらに昨年今年と登った富士山や宮之浦岳などの登山により、あらためて感じ教訓として学んだことを述べてみたいと思います。

一、半歩一步の教え

これは半歩も二回繰り返せば一步となり、1/3歩も三回繰り返せば一步となるということ。この事は当然あたりまえの事です。山に登ったことの有る人にはその奥の意味する事が理解してもらえenと思います。息切れして苦しい時に立ち止まっていれば何時間でもその場所のままですが、苦しくても少しづつでも足を動かせば前に進むことができます。と言う事です。

このことは、何事でもコツコツと弛まぬ努力こそ進歩発展の基本である事をいつも思い出させてくれます。

二、目標最重要の教え

今までに富士山に登った事のある人は、登ろうという目標を立てた人々だけです。富士山を知らない人や登ろうと思わなかった人は登っていません。

このことは何事も、まず目標や希望を持つ事が成功の秘訣であることを教えてくれるように思います。

「おほぞらにそびえて見ゆるたかねにも 登ればのぼる道はありけり」という明治天皇の御製に励まされる事もしばしばです。

三、苦勞と感動比例の教え

頂上に到達した時の感動の大きさは、登る為に要した苦しみや努力の大きさに比例します。

よく家族や友人から、そんな重い荷物を背負って、何時間も歩きつづけて、汗だくになって、何が面白いのかと聞かれることがしばしばです。

確かに登り続けているその時には苦しくて倒れそうになる事もありますが、頂上に立てば全ての苦勞が吹き飛んでしまいます。そしてこの登りきった達成感が、豊かな宝物の想い出となって何時までも残り続けます。

登山に限らず、勉強や仕事や人生における全ての面において、得られる感動や幸福感は登山の場合と同じく、苦勞や努力の大きさに比例するものと思っています。

四、水と空気は生命維持の原点の教え

登山に、水の持参は必須条件です。谷川の飲み水を利用できる場合はまだしも、炎天下の水なし登山は命取りになります。

さらに、二千メートル以上の高山への登山は空気即ち酸素が、我々生き物にとって最も重要であることを、あらためて教えてくれます。富士山の頂上を目の前にして酸素不足に

よる頭痛や吐き気のために、断念した方々が沢山おられます。

我々は生命の支えであるこれら水や空気を疎かにして、汚して仕舞っているのではないのでしょうか。

環境問題の大切さを、この登山からも学ぶことができます。

五、日本は島国という天恵の教え

今年登った宮之浦岳登山からも貴重な教えを気づかせてもらいました。

屋久島では樹齢千年以上の杉を屋久杉と言い、縄文杉は七千二百年とも言われ、幹の周りが十六メートル以上もある巨木です。樹齢数千年のこのような屋久杉は標高千メートル以上の山奥に残っています。しかしこの屋久島が、島ではなく陸続きであったなら今頃は、この屋久杉も全て切り倒され恐らく全滅していた事でしょう。そして「世界遺産」登録にもなっていないかもしれません。

日本の国も島国であったればこそ、二千年以上の長きにわたり万世一系の天皇陛下の治められる穏やかな国であり続ける事が出来たのだと思います。現在はテレビやインターネットなど情報網の発展の為に島国であることの利点が薄れてしまい、陸続きの他の国々と同じような条件となり、治安や道德の面で急低落しています。

今後の外国との交流は、島国という天の恵み、あるいは島国的発想の利点を最大限に生かして、充分に取捨選択して行うべきであろうと思います。

縄文杉のある屋久島の山々を登りながらこのような事を考えさせられました。

以上述べましたような事をその場で体得させてくれる登山の教えは、真に神々の教えのように思えます。なぜならば、木花開耶姫命の御神体山である富士山を始め、日本全国殆どの山の頂上には神社や祠があり、神様が祀られているからです。

神々の山々に恵まれた日本の国です。

あなたも山に登ってみませんか。

(熊本県 正野神社 宮司)

島根県「竹島は誰のもの」

寺本正徳

戦後も六十年がすぎました。色々なことが昔物語りのように語られる時代になりつつあります。

島根県議会が「竹島の日」を制定されたことは誠に意義のある行動だと思います。

私は「竹島は誰のもの」と題してお話しますが、日本国民の多くは、竹島とか李承晩ラインとかを知らない世代になりつつあります。そこで敢えて「竹島問題」を取り上げ領土の認識を新たにしていただこうと思います。

竹島とは、旧島名松島、島根県隠岐郡五箇村に属し日本海に浮かぶ「竹島岩礁島」のこ

とをいいます。

この岩礁島を日本人が利用した歴史は古く、江戸の初期には鳥取藩の回船業者が、竹島ウルンド（松島）及び鬱陵島への航路を開拓、日本の領土として広く利用し幕府もこれを認めていました。

当時の朝鮮半島は、李王朝の時代であり日本とも深い関係があり、鬱陵島は磯竹島ナクシヨとして、竹嶼は竹島として漁業権を保有した時代がありますが、李王朝の事情、幕府の鎖国政策との関係もあり、渡航は幕府の許可制にした時代もあります。しかし李王朝は、鬱陵及び竹嶼に本土住民の流入を防ぐと共に、海賊島化を防ぐために「空島政策」を取り、一切の住民の上陸を許しませんでした。だが幕府のお墨付のある鳥取の回船業者だけは昔と同様に日本人の島として十九世紀末まで島の経営に務めてきた事実があります。

だが昭和二十年、日本の敗戦により情勢は一変、韓国政府は、鬱陵も于山も竹嶼も竹島岩礁島も自国の固有の領土であり、日露戦争により日本に強奪され侵略された領土だと主張、サンフランシスコに於いて対日平和条約が成立、日本の占領が終了したのに時を合わせるごとく突如日本公海上に「李承晩ライン」を宣言、竹島岩礁島を取りこみ韓国沿岸から六十海里の領有を宣言、合せて「海洋主権を宣言」「領有に於ける地下資源確保宣言」をしました。

これにより日韓間双方に於いて「竹島問題」が発生します。

当然のごとく、米国も英国も中華民国も抗議の声をあげますが、これ等の声には耳も傾けず、日本海に浮かぶ絶壁の孤島を武力により占拠しました。この行為は国際海洋法上に

於いても違法行為であり、日本の国際司法裁判所に於ける裁定にも同意せず、竹島岩礁島周辺に於ける漁民の立入を一切禁止。「漁船の拿捕、漁民の抑留、漁船の没収、釈放に関しては多額な損害補償」まで要求してきました。

この間日本政府も領有権確認のため竹島に「島根県隠岐郡五箇村竹島」の標柱、「無斷立入禁止の制札」も建てましたが、ことごとく抜き去り「独島リヤンコール」と刻んだ石柱、接岸施設、有人灯台を始め国旗を建て何人も近づけない島として占拠しました。

日本の外務省も外交交渉に於いてこまねいていたわけではなく、韓国の主張する矛盾点を指摘、強力なる外交交渉をしてはきましたが、交渉にならない交渉ばかりで今日を迎えています。

外交交渉の中で領有権を主張する韓国側の重大な論拠として提出してきた「安龍福^{アンヨンボク}」なる人物の証言した記録が、李王朝時の「肅宗実録」。その記述に、

「自分が日本に渡り鳥取藩との交渉で鬱陵島、于山島は朝鮮の領土だと認めさせた。」だから自国の領土、日本は略奪したという論法ですが、李王朝の時代、幕府は両国の関係に於いて鬱陵島も于山島も朝鮮領だと認めているのです。だが問題の竹島＝旧島名松島は日本固有の領土だとの主張を譲りませんでした。その他韓国側の数々の主張を一つ一つ説明、

さすがの韓国も気が付いたのでしょいか、次なる交渉より竹島岩礁島を「独島」^{トクト}と呼び変えて席につくようになりましたが、日本の主張する問題の竹島岩礁島は

明治三十八年（一九〇五）一月二十八日

「他国二於テコレヲ占拠シタルト認ムベキ形跡ナシ」と認むると

閣議に於いて決定、同年島根県告示第四十号により島根県に編入、「竹島と命名」した経過がありますが、その時大韓帝国からも、世界中のどの国からも何の声も上がりませんでした。

ざつと話せばこれが今日の竹島問題の走りです。

昔から領土所有権というものは厄介なもので、ボタンの掛け違いにより大問題になることがしばしばあります。

ドイツの法哲学者、イエリングの理論によると

「領土の一部でも失って黙っている国民は、領土の全てを失う危険がある」

全てを忘れかけようとしている日本国民に領土の何たるかを問い掛ける警鐘ではないでしょうか。

この前も学生の一団が参拝に来て、竹島のパンフレットを持ち騒いでいます。

一人の学生に聴きました。

「君たち、竹島の問題知ってる？」「竹島さんて誰のことですか。どこの人ですか・・・」

こんな状況です。

外国の教科書には、日本の侵略、抗日戦争のこと、日本の取った奴隷化教育のことが、数ページにも渡って書いてあるのに、日本では真実さえも教えません。

戦後六十年の歳月は、美しき国日本のよさをいま正に崩そうとしています。一番近い国が一番遠い国になりつつあることは残念です。もう一度「言霊の幸ふ国」にしたいものです。

ご静聴ありがとうございました。

(大阪府 稻荷神社 禰宜)

一宮への誘い

鈴木雅史

私たちのご奉仕させていただいております神社の信仰には、お伊勢さんの伊勢信仰をはじめとして、蟻の熊野詣といわれるほど隆盛した熊野信仰や全国に約四万社ある商売繁昌の神様お稲荷さんの稲荷信仰等、多数の信仰がありますが、これらの信仰にはそれぞれ信仰の対象としての本社や分社があり、又それらを信仰する側の講組織や崇敬者があります。しかし、近年これらの信仰の形態とは異なり、本社や分社、講組織や崇敬者を持たず、どちらかと言えば仏教の四国八十八ヶ所や西国三十三ヶ所の巡礼のような形で、全国の一宮を巡詣することにより、神祇を崇め、顕彰する形の一宮の信仰が盛んになってきているのをご存じでしょうか。

一宮については、一宮市や一宮町等地名にもありますので、耳や目にしたことがあると思いますし、一宮といわれる神社は全国に多数散在しており、今日お邪魔させていただいております鹽竈神社も陸奥国の一宮であり、皆様が今迄御参りされた神社の中にも知らず

知らずの内に一宮が何社もあったのではないでしようか。

一宮は、古代の律令体制から中世の封建社会へと移りつつあった平安時代の末期から鎌倉時代の初期に、諸国の国司が赴任時に一番最初に参拝したり、国庁の在庁官人が社司を務めていたり、社殿の造営や祭祀を各国が行った各国第一の鎮守社であり、中央政府よりも各国の国府と関わりが深かった神社であります。そのため一宮は、社格といっても『延喜式神名帳』に載せられた三三三座の式内社のように国家が定めた社格ではなく、国々の事情に合わせて自然発生的に出来た社格であり、国によっては一社だけでなく論社がある国があり、全国に百社近くの一宮があります。

しかし、百社近くもある一宮の内、成立時期からあった一宮はさほど多くなく、南北朝時代頃に吉田神道の吉田家が著したとされる全国の一宮を一覧にした『大日本国一宮記』を論拠とする一宮が少なくありません。

江戸時代前期の神道家橘三喜は、この『大日本国一宮記』をもとに、延宝三年（一六七五）から元禄十年（一六九七）の二十三年間をかけて、全国の一宮を巡り、全十三巻からなる紀行文『一宮巡詣記』を著します。三喜の巡詣した一宮は既に国司の崇敬した国第一の鎮守という当初の一宮ではなく名のみのものでありましたが、この巡詣には国史を探り、

全国の神社を参詣する楽しみと喜びがあったのではないでしようか。

過日『産経新聞』の地方版に、「心安らぐ日本再発見」と題され、民間組織である全国一宮巡拝会が、全国一宮を百万人の人が巡拝することを呼びかけ運動されていることが、掲載されておりましたが、私自身も実はこの運動の御陰を持ちまして、一宮を信仰させていただいている一人なのであります。学生時代に神社の御社頭で、この全国一宮巡拝会と神職組織の全国一宮会が共同で頒布しておられる『全国一の宮御朱印帳』に出会いまして、それ以来今日迄、全国の一宮を巡詣させていただいております。

全国の一宮を巡詣させていただきますと、街の真ん中にある神社もあれば、山の山頂にある神社、海辺にある神社等、どの神社も神様が鎮座されるのにふさわしい土地にあり感動させられます。いつも一宮を巡拝させていただく時、私は先ず御本殿へ進み参拝を済ませ、それからしばらく境内を散策し、国の第一鎮守として隆盛した時代のことを思い浮かべます。そして、参拝した記しとして最後に御朱印をいただきますが、御朱印をいただいていると、時には同じ御朱印帳を持っている方に遭遇することがあり、中には声をかけてこられる方もいらっしやいます。

現在、全国の一宮を巡拝されている方がどれほどいらっしやるのかは存じませんが、巡

拝を終えた方が著された本も何冊か出版されており、既に二回廻り終え、三回目というような方もいらつしやるようです。

学生時代から始めたこの巡拝も現在六年目を迎えますが、三十社余りの一宮を巡拝させていただきました。目的のある神社巡拝には、達成した時の喜び、次を目指す楽しみがあり、新しい発見もきつとあるに違いません。皆様も是非、全国を旅行される時には一宮を参拝されてはいかがでしょう。

(京都府 八坂神社 権禰宜)

お臍は何故あるの・・・

高尾宗嗣

何百億年も昔に太陽を中心とした惑星が存在し、未だに我々人間界では発見出来ない惑星があると聞く時、この果てしない大気圏の中で地球のみが、自然界に浮かんでいるのだと、つい先日宇宙界の探索に参加なさった野口聡一さんも目にした地球が、TVによって観ることが出来る様になったのは近年からことですが、その地球がどうして浮かんでいる事が出来るのか、昔から浮かんでいるからだろうと言えばそれまでですが、それにはやはり自然界の摂理があるのではないでしょうか。私には良く判りませんが太陽を中心として巡っている星が地球であり、地球を中心に巡っているのが月であるのが自然の現象であつてみれば、地球上に生息しているすべての生物、人間を始めとしてあらゆる動植物は、中心を起点として生かされているのではないのでしょうか。毎日の活かしの節々に中心を外さない様にと心を配っている事の多いことを考えてみたいと思いますが、大きな物では建造物の様々があります。四角い建物、高層ビル、丸いの等あります。それらの部所で

は、中心が狂わない様にと細心の注意を払い乍ら建て進みゆきます。生活の隅々に活用されてゐる器物にも中心を持ったものの多い事はどなたにも思い当たる事と思います。

「耐え難きを耐え、忍び難きを忍び・・・心を一つにし悠久の太平を築かん」とのお言葉を戴き、今日まで六十年、日本人が祖先から伝統として受け継いだ還暦の歳であります。が、昨今の國民感情は誠に悲惨なものがあります。

理由の解釈に苦しみ様な事件の多い事。盗みに入り込んだ家人を皆殺しにして河底に沈めた隣の國の若者組。親兄弟をも殺傷する若者。自分の理念を押し通さんものと大勢の人を毒殺に導いた事件などはとても考えられない出来事です。これらの起こるべくして起こった理由が、六十年前に戦勝國が日本國を負國として圧政の指令の第一に、昭和二十年八月三十日、マッカーサーが厚木空港に上陸、九月二日ポツダム宣言による降伏調印と矢継ぎ早に指令を發して、十二月十五日、神道指令なる法を發令しました。國家神道・神社神道に対する政府の保証支援保全監督並びに弘布の廃止に関する件として九項目、國家及び官公吏は神社に対して関わってはならぬ、市町村役場や学校に神棚を飾る事はならぬ等の指令を出し、日本人の心の根底からの改造を目差し、歴史的的神話まで廃止に追い込んで來たのが始まりと言わねばなりません。六十年前迄は祖先を中心として代々家を守り、

子孫繁栄を念じた施策の中に戸籍法があり、一家の謄本を取り寄せると、爺様から孫迄記載されていた筈が、今は個人別の戸籍になり、結婚する事によって個々の籍の登録表となつて親子が別々の生活するのが当然の様であり、老人の一人暮らしを増やす事が法の定めている型となつている。

人間としてもっとも大切にし、お互いが研鑽すべきであるとして、明治二十年十月に發布なされた教育勅語に至つては、現今全く姿が見えなくなつたのはとても残念至極な事です、他國では、人の道は此れでなくてはならぬと、盛んに指導育成の基本として尊重されていくと聞く。何故我が國の天皇様が國の中心として広く國民が勅語の心を体得し、生きて行く心懸けを学び家の發展、國の隆昌に努力することが大切であると諭された事が、廢絶されねばならぬのだろうか。六十年前戰勝國である各國が、日本文化の強い力を知らされた為に、二度とその力を出現させない事を主目的として、あらゆる施策を必要とした結果としか言い様がない。神道指令が発せられた時、来日の米國新聞記者マークゲインは、この指令はきつと反發暴動が起こるに違ひがないと思つたと記している。然し起こりそうになかつた。國民は我々の中心であられる天皇様が「堪え難きを堪え、忍び難きを忍び……」とお諭しになられた大御心を想う時、日本人として耐えねばならぬと想つたの

が実情の様です。我々人間を始め哺乳動物は大抵臍を持っております。親子の絆として最も大切なものであり、育つ為の栄養も呼吸も智慧もすべてを授かる絆であり、現世に生れ出でて、お臍を冷やしては体に悪いと腹巻をして大切にすることを教えられていた。「お臍を出している」と、雷さんが取りに来てやぞ・・・」と子供の頃よく聞かされた。今思い起こすと誠に重要な事柄を教えて下さったのだと思う。出来もしない事を大ぼらを吹くと「臍が茶を沸かすぞ」、こゝ一番の勝負にのぞむ時「臍下丹田に力を込めて」などと言っています、重いものを持ち運ぶ時中心を狂わさぬ様にと、何事にも中心を良く見極めての行動が肝要な事と云わねばなりません。國には國のお臍、県にも市にも中心となるお臍、町村には中心となる氏神の杜、家には神棚が中心、家族には家長お父さんが中心となつて、心をつにし日々繁栄の道を進む刻、日本も世界も栄える地球となることを祈りたいものです。

(富山県 大木白山社 宮司)

人を育む心

青木信市

先月、私は神道国際友好会宗教事情視察団に参加する機会を得て、チベット自治区を訪れることが出来ました。その時に目にしたラサ郊外に広がる麦の収穫風景は、昔懐かしい日本の田園風景に非常に似てゐました。その近くの村人たちは、われわれに対して穏やかな表情で歓迎してくれる純真無垢な人々でありました。けれど、かれらチベット人の子ども達はチベット語を殆ど喋れなくなりつつあります。

さて、われわれ日本人は母国語に対しあまりにも無神経な面があります。昔の文字もそのまま読める日本人には、母国語を無くす人々の苦しみに対し疎いのではないでせうか。戦後六十年の間、日本経済の発展と共に豊かな情報化社会となり、われわれ日本人の生活環境が年々著しく変貌してゐる中、それまで築いてきた国民生活の精神的豊かさは意外なほど失はれてゐます。特に昨今の日本人の世代間の言動は、あまりにもひどい。教育問題、道徳問題、外交問題、憲法問題などを真摯な態度で受け止める歴史認識を持たず、マスコ

ミに扇動され、批判や中傷はすれど明確な答へを出せず、慢心さが目立ち、言動に対する無責任さ、敵対する国際情勢などに危機意識は殆ど関心無く過し、喋つてゐる言葉とは裏腹に他人が凝視する力に負け、言ひ訳上手の發言の多さが世相に表れてゐます。昔から「興国の人まじめなり、衰国・亡国の人ふまじめなり」とあります。この国の憂ひはいま、国民に様々なカタチで表れてをります。異文化への逃避的な好奇心（例えば、韓ブームなどと称し）をマスコミが煽動し、さうした人々を、單なるブームとして安易に見ていいのでせうか。昔から当たり前と思はれてゐることが、今は実に理解するに大變だつたりします。だれもが解つてゐること、知つてゐることを、実は意外とそのことを知らなかつたり、教はらなかつたりする思ひ込みが多いのではないでせうか。人はそれぞれ同じ受け取り方ではないのはいふまでもありませんが、そこには、いろいろな問題があると思ひます。

例へば、表現力や伝達手段なども含め、同じものを観ても伝はる感動や表現方法は人によつても多少違ひます。当たり前のことが、ついつい忘れ去られ、人によつては会話の糸口さへも見出せないままで終はり、それ以上話せなくなり、なにも出来なくなることがあります。他人の意見をよく聞いてから、それから自分の意見を言ふ。その意見さへも言へない人が益々増えてゐます。大事なのは、何事も人から尊敬や信頼が得られなければ、協

力や理解も得られないことは当然のこと。其の為には、まづ己自身が他人に関心を持ち、いろんな対話の中から共通の認識を見出すことではないでせうか。自然の会話から相互の信頼が生まれ、さらに実行力を伴ふ努力を継続しながら、人の信頼を集め、やがて人からの尊敬を得られる努力も大切なことであります。人によつては好き嫌いをあからさまに出す人もゐるが、お互ひに親しみ合ふ関係ができれば、少しづつでも他人の話を自然と耳を傾け聞いてくれます。さういふ人づくりが何よりも必要であり大切であると思ひます。だからこそ、昔から人を育てるには、子供のうちからいやでも対話できる環境づくりが必要なのです。「三つ子の魂百まで」の言葉のとほり幼いときが肝心なのであります。

昔話や神話などを家庭のなかで父母や祖父母などから学んだ環境。教へるもの、教はるものが自然と対話しながら、素直にそれぞれが偏見や差別感を持たず、心を癒しながら遊び学ぶ環境がそこには生きてゐました。さうして学んだことで、相手の心の痛みが分かり合へるし、相手の心が一層見えてきます。さうした環境が、自分の身体を通して物事をしつかり見据ゑ、人としての体験や経験や祖先の教へが、生きてゐる証であり、祖先の生き方と同じやうに心の精神的ゆとりが生まれてくるのではないのでせうか。まづ、相手の立場に立つて考へ、物事をしつかり見つめ、留意しなければいけないこと、自分の言葉で咀

嚼しながら真心から相手を思ひやることで、ゆける人になると思ひます。

常に心に余裕があれば、自分勝手な解釈で相手を見たりして余計なことを考へたり、余分な苦勞をしたりすることになります。本当に相手に対する真の心とは決して権力や裕福の上に成り立つものではなく、只管に相手を思ひやる心だと思ひます。自ら種を蒔かないで、人から何かしてもらふ、人が何かをしてくれると期待することは、單なる自己中心的な思ひ込みの心であります。いかなるときも自ら正道を求める心こそ思ひやりの心であります。「天知る、地知る、我知る」からこそ、生きる真心は人の真心を呼び、その人の真心に共鳴し続けるのです。もし、時として諍ひがおきても、その諍ひを鎮めることが神ながらの道に通じるのです。言ひ換へれば、その諍ひを収めることが鎮魂なのです。鎮魂こそまさにその言霊が示すとほりわれわれ日本民族は、社会的にも人間的にも道德的にも尊敬するに価する努力をしてゆく国民でなければなりません。昔から貴人を歓待の精神道德を持ち、諍ひを解消することができるとを暗に顯示してゐます。したがって常に真摯な心を育むことが、われわれの日常の生き方にも通じ、人としての道の心構へがいかに大切かを教へてくれます。其の為に、われわれは意識や無意識に捉へるかは別にしても、物事を深く考へ、それらを抱へ込みながら、現実を直視してゆく柔軟性のある精神道德が必要

であります。その日本の精神道徳の源泉として「皇室の尊厳」がいかに大切かをわれわれ日本人は、先人たちの時代を学ぶことで知つてゐたのであります。そこには、日本人本来の精神思想である敬神と崇祖とを一体のものとして把へることでもあります。だからこそ、人は神様に対しての心の表現、拝むことが日本人の意識においては常識なのであります。さうした常識の無さが、今日の社会の乱れの一因であり、道徳心の欠如にいたつたのであります。氏子崇敬者の皆様が神社に参拝して常に安堵の気持ちを抱き、少しでもこの世の不安などを解消出来うる努力をすべきとわれわれ神職に語つてをられるのでは無いでせうか。尊厳な神社に奉仕する神職は、ほんものとしての神職が求められる時代が来てゐることを忘れるべきではありません。これから互ひが社会道徳的にも人間的にも尊敬に価する国民として向上し、行く先ある国民社会のために努力する奉仕精神を少しでも高めてゆく「茅こじ精神」と共にこの国の発展を願ひ、国益を守ることの出来る人づくりに欠かせない精神道徳の意は人を育む心ではないでせうか。

(鹿児島県 霧島神宮 権祢宜)

心を澄ます

山下裕嗣

さて、神様とはそもそも目に見えない存在であるという事は周知の事実であります。ではその目に見えない・形の無い神様はどういう方法で私たちを守って下さるのでしょうか。耳元で囁いてくれるのでしょうか……。それとも、夢枕に立たれてお告げを戴けるのでしょうか……。私が思いますに神様の御力というものは、私たち人間を動かす大きな力であると思います。勿論、物質的に人が動かされるのではなく、私たちの心を動かす大御稜威であります。

皆さんの暮らしの中で、ふと思いついて行つた行動が良い結果となつた事はありませんか……。無我夢中で猪突猛進にやつたことの結果より、心を穏やかに思ひの為すがままに行つた行動が認められた事はありませんか……。すべては心に働きかける神様の大御稜威なのであります。その大御稜威を戴く為には、常に心を澄まし、精神的に健康な生活を送ることが大事なのです。

人の心というものは本来純粹で透明な丸い魂であると言われております。しかしながら、知らず知らずのうちに心に潜んでゆく「罪」や「穢」があり、この罪や穢れでよんだ心では神様の大御稜威を感じ戴くことは出来ません。常に心を澄まし、清らかな心で神様の「みたまのふゆ」を感じることが大事なのであります。ではどうすれば常に心を澄ますことができるのでありましょうか。

人はそれぞれが「欲」を持って生きています。欲と言うと悪いイメージがありますが、欲は向上心にもつながり、人として必要なものであります。気をつけなければならぬのは、欲が留まる事を知らずどんどん大きく広くなってゆく事です。本当に必要な欲求が満たされれば、人の心は大きく、より丸くなるでしょう。しかしながら欲が欲を呼び、本来求めるもの以上に欲が膨れ上がって行きますと、満足のいく結果にならず、不満が残って心がよどんで行きます。「欲張って」「欲が出る」と色々なものが欲しくなり、ついに「欲に目がくらんで」罪を犯してしまいます。勿論法的に罰せられるほどの罪もあれば、自分では判らない小さな罪もあるでしょう。むしろ法的に罰せられれば後悔の心が罪の穢を薄くしてゆきますが、自分では気づかない罪が積もり積もって心をどんどん濁らせてしまいます。「欲」は欲望であり欲求であり、常に望み常に求め続けねばならないという感に囚わ

れる、いわゆる「欲にはまって」しまつてはいけません。

では「欲」を出さずに心のうちに秘めておいては如何でしょうか。欲が心の中で大きく膨らみすぎて広がってしまうから「欲が張る」欲張る。欲が心の中から大きく飛び出すから「欲が出る」。欲は人として必要なのですが自制心を持つて心の中に置いておきましょう。ちよつと思ひ浮かべて下さい。透明なまあるい心の中に小さな欲の粒が転がっています。丸い心の内側でコロコロと転がっている欲は、そこから飛び出すことも無い無邪気な心です。心のうちに秘めた小さな欲はわずかな祈願の心でもあります。常に小さな願いを持つて過ごす人の心です。小さな願いは持ち続けるが故に少しづつ少しづつ叶えられるものです。叶えられた願いは感謝の心に変わります。感謝の心は重ねることに透明で大きく広がって人の心を大きく澄んだものにしてくれます。澄んだ心を持ち続けるには、欲に埋もれることなく、常に小さな感謝と少しの祈願を心のうちに秘めて敬神生活を送ることに他なりません。透明で丸い大きな心には神様が御稜威をお示し下さいます。戴いた御稜威は人の心を動かし、人の生活を導いてくれます。このお導きが災いを避け、幸せを招いていただける事は言うまでもありません。私たちは大神様により生かされて生きているのです。神詣でを通じて、心を透明でまあるいものに広げてゆきましょう。必ずや御神意が発

揚されて、すばらしい時を過ごす事ができるでしょう。

白山本宮白山比 神社の参集殿に書家林紅鶴女史の扁額が掲げられています。「澄神以凝虚」（神を澄まして以て虚を凝らす）精神（心）を清らかにして、思いを凝らす（一心になる）と注があります。私はこの後半部を神様と一つになると訳を付けたいと思います。「虚」は実の反対で目に見えないもの。「凝る」は夢中になる集中するの意味もありますが、別の意味で一か所に寄り集まるという事に解釈し、「神を澄まして以て虚を凝らす」の訳は、「精神を澄まして、目には見えないが神様の心と一つになる」とします。この言葉を本日の「心を澄ます」の演題の締めといたします。

（石川県 白山神社 欄宜）

うすさまの御神札

河本文夫

荒神様の祭典滞りなくおつかえいたしました。さて、本日は、ご参拝の皆さんに、少し変った神様を紹介いたしましょう。

それは、年も改まった、一月始めのことです。私は御日待の祭典に車で回っておりました。すると携帯電話がブルルと鳴るではありませんか。まずは安全な所に車をとめて、「はい宮尾八幡宮の河本でございます」と。「今、高泊神社の社務所の前に来ておりますが、どなたもいらっやしません。見ますと、玄関ドアに不在の時の電話番号が書いてありましたので電話させていただきました」と、ご婦人の声が致します。「それは、お手数かけます。どのようなご用件でしょうか?」「はい、年も改まりましたので、御神札を受けに参りました」「どの様な御神札でしょうか」「はい、荒神様、水神様、うすさまの御神札をいただきたいのですが?」と、荒神様、水神様、うすさま? なになに! 「うすさま」コリヤなんじゃ。聞いたこと無いな。

私は、「うすさま」なんぞ聞いたことありませんでした。こりゃ困ったとは思いましたが、なにしろ、長きにわたって民間企業に勤め、お客様は神様との精神がたたきこまれております。受注しなくては話になりません。悲しい習性で「はい御座います」と答え、授与する日を決めまして、電話を切ったのでありますが、うーん「うすさま？」何か聞いたことあるような気がするが思い出せません。御日待の祭典中も、うすさま？ うすさま？

父から聞いたこともないし、私の地元で「うすさま」なんぞ聞いたことはありません。こりゃ、全く別の世界で聞いたのかもね、と思いつつながら。過去の記憶を、辿っていきましたら、なんと思ひ出しました。これは思いがけず、そうだ、あの人がそんなこと言ったな。そうなんです、思い出しました。

それは、去ること二十年程前、私がまだ、神社に仕える前、某企業に勤めていた頃のこととであります。ある商社の課長さんが、私に「今度うすさまにお参りに行くんですよ」と私に、おっしゃたことを思い出しました。その方は、森村商事の金沢さんという課長さんでした。大変、親しくしていた関係で、私の故郷は家が神社であることを知つてのことでした。其の時「金沢さん、うすさまって？」と聞けばよかったです、まさに『聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥』を、実践しているようなもので、其の時は「それは良いで

すね」なんて答えていたのかもしれませんが。

わが人生に、「うすさま」は二度目の登場です。しかし、何の解決にも結びついてはおりません。

困ったな、意味も知らずに、うすさまって書いた御神札を渡すには忍びないしな。

神主虎の巻を見ましたが、色よい回答は見つからないし。隣町の長老の神主さんに聞いてよいが、万倉の河本は何も知らんぞと言われるのも癪だし。どうしたもんかなと思っておりました。

そうだ、インターネットで調べてみよう。さっそく「うすさま」とひらかなで、入力。なんとなんと、出てきた出てきた、あるある、知らないのは私だけ。東京の氷川神社、次に伊豆半島にありました。伊豆半島を走りますと、看板が出てまいります。この看板にその解答は書いてございます。なんと書かれているのでしょうか。これが問題です。さてなんとお思いですか。わかれば簡単。そう「便所の神様うすさま」と書かれているのであります。「便所の神様うすさまはこっち」。

便所の神様、「うすさま」と、なんだ便所の神様か、これでわかった。字もわかりました。便所の神様か？これで二十年来の疑問解決。金沢課長が、「うすさま」にお参り行かれる理

由がわかりました。

森村商事それは、東京虎ノ門、文部科学省の斜向いにあります。この会社、明治九年の創業。ノリタケカンパニーリミテッド、東陶等を立ち上げた、その親玉であります。そうなんです。便器なんです。これで、先ほど話しました、二十年前の疑問解決です。なんと二十年ぶりに一件落着。

さっそく、うすさまの御神札作りまして、氏神様にてご祈祷し、お渡しすることができました。大変喜ばれました。

さて、うすさま。ご利益が色々ありまして便所の神様でシモの病氣にご利益があります。「いつまでも人の手を借らず用が足せますように」「おしっこの切れの悪い方」下半身全てにご利益のある神様です。

今日ご参拝の皆様に、朗報でございます。今年より、宮尾八幡宮では新発売、うすさまの神札、此れをパンツに張ってお過ごしになりますと、おしっこの切れが悪い方、元氣の無い方。じわじわと効いてまいります。一体千円です。ぜひとも、お受けになりました。うすさまの御加護をいただいでください。本日お参りになりました方々、うすさまのお札の必要と思われる方、見ますと一人、二人……、十人。縮めて一万円。わが

生活も楽になりますし、皆さんのシモの病氣も治りまして、目出度し目出度しでございます。

それはそうと致しまして、この神様を、自治会の講祭で紹介しているのですが、先日あるところで、「宮司さん！私は、うすさま聞いたことあります」と言われる方がありました。その方の話されるには、私がまだ幼い頃、確かその方は、私のお婆ちゃんとおっしゃいました。トイレの掃除をお婆ちゃんとしたことが在るのですが、その際、「便所にはうすさまという神様がおられるから、いつもきれいにしておかなくちゃいけないよ。」そして「便器はうすさまの口だからいつもよく拭いておかないとね。」と云って掃除をしたこと覚えております。なんとすばらしい話でしょう。

この様に、日本では私たちの生活いたるところに神様がいらつしやいます。それを日々の生活のよりどころとし又、おかげをいただいていることに感謝して、又子供を教育してきたことに日本人のすばらしさを感じるのであります。これからも荒神様のお祭、ますます盛んに、またこのようにお仕えできますこと大変感謝しております。有難うございました。

すばらしきもの「生命」

中木屋豊

鹿児島は、節分の時期に厄払いだけではなく、「星祭」と称して家内安全を祈願する風習が色濃く残っています。今年もようこそ参拝いただきました。常に申し上げることですが、初春という言葉があるように、春から一年が始まると、考えられるからです。これはヨーロッパなども同じなのです。英語で九月のことを、セプテンバーといいます。十月をオクトーバーといいます。本来それぞれセブン「七」であり、蛸のことをオクトパス八本足と表現するのですから、三月マーチから一年が始まると考えられたことが分かります。

英語もそうですが、日本語にも元々の意味があります。節分は本来季節の変わり目という意味ですから、立春だけでなく立夏立秋立冬の前の日も節分だったわけです。天然自然に対する畏敬の念、たいへん強いものがありましたので、特別な日の意味合いがあったのだでしょう。季節とともに生活様式を変化させながら、合わせる生活の知恵がありました。たとえば、夏の「打ち水」、その光景を思い浮かべるだけで、涼しくなってきます。クーラ

のスイッチを入れる生活に慣らされた現在では、考えられない人が大多数でしょう。しかしながら今都会は、アスファルトジャングルとかヒートアイランドとか表現されます。「打ち水」が見直されています。たくさんの人が、水をまけば温度を下げる事ができると、すでに全国的な取り組みも始まっています。

高層ビルが、風の流れをさえぎって、熱が集まってしまうという問題も、川や用水路を利用して解決する取り組みも始まりました。ビルの屋上に緑を植えることでも、高温対策になるといわれます。明治神宮の代々木の杜は、今日的課題を想定して、作られたものと確信する次第です。「打ち水」のように、昔の生活の知恵を現在に活かす取り組みが、とても大切になってきている気がしてなりません。

世相を現すとして、毎年漢字一字が選ばれるのをご存知ですよね。昨年平成十六年は、災害の「災」の字でした。相次ぐ台風の襲来と、大雨の被害は甚大でした。和歌山沖地震新潟中越地震の被害も目を覆うものでした。最後がスマトラ沖の大地震と大津波です。「ずばり言うわよ」でおなじみの、女性占い師は、昨年を引きずり今年も大変な年になると占っています。本当に異常気象や、天災が続いているようです。「神」からの警告と受け取らなくてはいけないと、考えるのは私だけでしょうか。

最初に申し上げました。言葉には意味があると。日本では、言霊の助くる国、言霊の幸う国と、言われるほど言葉を大事にしてきました。悪い言霊が発揮されているのではないでしょう。先日、私は二つの「生命」と出会いました。一つは国際化の事実を、痛感させられる「生命」でした。よく付き合ひのある娘さんが、初宮にこられました。名前を見ると、苗字が変わっていません。ご主人の名前も書いてよと、頼みました。なんとフランス人で、国際結婚だったのです。祈願の後で「フランス語で母のことをM・e・r・eと書いて、メールと呼ぶよね。M・e・rと書いて、同じくメールと読んで海のことだよ。つまりフランス語では、母の中に海があると言い、漢字は海の中に母があるんだよ。英語は海をS・e・aと書いてシーと呼び、女性全般をS・h・eと書いて同じくシーと発音するよね。どの科学者も、生命の始まりは海からというよね。ちなみに子どもを育む羊水は、海水の成分と同じだと言われるよ。胎児は生命の進化の過程を、十月十日掛けて行い生まれてくるのだって。生命を育む存在が、同じ発音であること、何かしら根源的なものを、言葉や文字は表すものとして、偉大な存在「神」に、教えられたのだと思うのです。生命は途切れることなく受け継がれてきたのだから、先祖に感謝しながら、日仏友好の象徴としてこの子音ちゃんを、育てましょうと伝えてください。」と話しました。感心してい

ました。今カミと申し上げました。漢字一文字で表すのは、たった五文字です。椿・三極こうそくみつまたです。紙は貴重でした。頭という大切なものを髪は保護します。後は上・守・神です。示す偏は天の神を現し、作りは稲光の象形文字で、「カミナリ」を表します。きわめて尊いもの、貴重なもの、それらを守るものを総称して「カミ」というのです。今日の集まりの皆様は、家族のすべての健康と幸福をお祈りされました。私の娘は、初詣の準備を整えてから、元日男の子峻平りょうへいを産みました。家族の増える幸せな、一年のスタートをした宮司から、幸福のおすそ分けをいたします。この二つのすばらしい「生命」のためにも、「災」から「幸」へ、代表漢字が変わりますよう希望し、祈願を終了します。

(鹿児島県 稲荷神社 宮司)

生いたちと伝えていきたい事

大島守彦

大東亜戦争六十周年にあたり思いを新たにして、心に残っている事、こうして今日がある事、今後に伝えていきたい事をお話し致します。

今からだ今からだと思って今日迄やってきましたが、何時の間にやら傘寿を過ぎてしまいました。夢のようでございます。世の中の変化に対応してこれからも神道の精神を伝え努力していかねばならぬと思っております。

大正末年生れの私どもの世代は多感な青春時代に等しく戦争の影が差しておりました。

昭和七年小学校入学、十三年中学校に入学しました頃は日中戦争が激しくなり、国家総動員法も発令されておりました。昭和十六年十二月八日大東亜戦争に突入し、私の進む道も変ってまいりました。父より神職の学校に行くような話がありましたが、戦争は激しくなるばかりで、十七年には日本本土が空襲をうけるような事態となり、国を守らなければならぬの一念から、十八年海軍飛行予科練に志願し入隊致しました。

この頃の事を思うと亡き両親の顔が浮かびます。いろんな思いがありますが、今日はよくぞ死なずにやってこられた事につき、終戦の時にあつた事をお話しします。

戦局は益々激しさを増し、本土空襲が続き、沖縄は占領され、いよいよ本土決戦の覚悟を決めておりました。広島、長崎に原子爆弾が投下され、ソ連の参戦と続き、最後の局面を迎え、もうなるようにしかならんと心に決めておりましたが、八月十五日、突然天皇陛下の玉音放送があり、遂に終戦となりました。

この時私は上海海軍航空隊より高知海軍航空隊にきて沖縄への特攻等による、本土決戦に備えておりました。

八月十三日米軍機動部隊は関東方面を空爆し、水上船艇も本土海岸近くに行動し、本土上陸が予想されておりましたので、十五日のポツダム宣言受諾により、ほっとしてなりゆきをみておりましたところ、十六日夜、高知海軍航空隊司令部の誤報があり、敵艦隊土佐湾より上陸中との事にて、一帯の陸海軍部隊は嚴重警戒戦闘配置につけとの命令が伝えられました。

夜中大爆音が起り、海岸附近の住民はリヤカー等にて荷物をつみ、山手の方に避難して大騒動となりました。私達も銃をもって戦闘配置につきました。住民より「敵は本当に上

陸したのですか。」「兵隊さん頑張つて下さい。」等激励する人達もありましたが、夜明け近くになり誤報であつた事が判明しました。忘れる事の出来ない事でありました。

この爆発は高知海軍航空隊より四キロ東の手結岬住吉に配置されていた海軍震洋特別攻撃隊の敵艦に備えて準備中の、特攻艇の一隻に燃料タンクの油が洩れて引火し、艇首の炸薬が爆発してつぎつぎに他の艇を誘発、二十三隻が大音響とともに火柱を上げ、黒煙が空高く舞い上りました。この事故で吾が予科練の戦友百十一名の生命が失われました。残念でなりません。

一時は生きて帰る事はないと思つていましたが、終戦六十年目を迎える事が出来ました。いろんな経験をしてきましたが、自分でやらねばならぬとの信念で今日迄やってまいりました。

神職となり御縁がありまして神道講演全国協議会に参加出来た事は大きな喜びでありました。

石井寿夫先生、佐古幸嬰先生を始め多くの先生方にお会いする事が出来、教えを頂きました。先生方の教えは今も私の心の中に生きております。

福岡県神社庁講演研究部会もこれ迄研修会を続けてまいりましたが、石井先生、佐古先

生に教えて頂いていた時のようにはいきません。その頃の先生方も多くお亡くなりになり、淋しい思いが致します。部会の皆さんと力を併せてやっていく事しております。

これ迄永く全国協議会と一緒に出席しておりました、福岡の熊野道祖神社飯田博信宮司が県神社庁講演部会長をつとめておられましたが、亡くなられましたので、副会長をしておりました私が会長の職をつとめる事となりました。先輩方が築いてこられました講演部を守っていかねばなりません。諸先輩方からの教えを生かして自分ながら頑張っていかなばならぬと念じております。

今は亡き先代の伊勢一宮椿大神社の山本行隆宮司様には永い間親しく御指導頂きました。特に先生が戦時中海軍に籍をおかれていましたので、私も海軍で仲間だといっている人なお話をして頂きました。先生の教え「中今に生きる」という教えを大切にし、直面する一刻一刻のいのちを力一杯発揮させ、人生を価値あるものにしていかねばならぬと存じます。今やらねば何時やれる。俺がやらねば誰がやる。経験を生かして機会がある毎に戦中戦後の話、慰霊祭他を伝えて行きたいと思っております。

(福岡県 六所神社 宮司)

蛍とともに

竹中基将

私が奉仕するお宮は岐阜市の中心に位置する稲葉山の麓に鎮座しております。境内には山からの伏流水が流れており、七十年程前までは蛍の姿も見られたと聞いております。一昨年の夏頃、宮司より「境内に蛍を飛ばすことが出来ないか。」と言われました。蛍は初夏の夜空を美しく点す虫たちであり、殊に自分で飛ばすことなど考えたこともなく、どうすれば良いかと思案し、氏子区域の公園で蛍の世話をしている方に相談し、御教授願いました。その方は普段より良く存じ上げている方で、蛍の生態など、一から教えて頂き、環境の整備、また蛍の幼虫は孵化してから五十個以上のカワニナという巻貝を餌として食べるという、冬の寒い日の採取まで幾度となく御協力頂きました。

昨年は、初めての試みでもあり、本当に蛍が飛んでくれるか心配で、毎夜観察に来ておりましたが、宿直の夜、初めて五匹の蛍が飛び回っているのを確認し、早速宮司に報告致し、喜び合いました。期間中、数百匹の蛍が乱舞する姿を見ることが出来、また、蛍火に

誘われて多くの方々が境内に見に来ていただき、大変嬉しく思いました。今年は、昨年
台風の影響もあり、若干蛍の数も少ないように思われましたが、蛍の乱舞と雅楽の調べを
合わせ「蛍と雅楽の夕べ」と題しコンサートを開き、大勢の方に楽しんで頂けた様に思
います。

地球上に生息する蛍は二千種類と言われ、日本には四十五種類が確認されております。
その中で、発光する種類は限られており、ゲンジボタル、ヘイケボタル、ヒメボタルがそ
の代表で、オバボタルなどのように光らない蛍も見ることが出来ます。同じ種類の蛍でも生
息地域により発光パターンが違い、大きく分類すると東日本の四秒間隔と西日本の二秒間
隔に分けられます。日本で最も親しまれているゲンジボタルは、全国に数多くの生息地が
あり、その内十ヶ所が国の天然記念物に指定されております。日没後にオスはいっせいに
飛んで発光してメスを探し、メスは葉にとまってオスが接近すると強く発光し、オスを誘
います。オスはメスに近づいた後、普段とは違ういろいろなパターンの光りを放ってメス
の関心を誘うような行動をとり交尾します。蛍の寿命は一週間から十日と言われ、この短
い間に子孫を残すために精一杯発光しています。はかなき故に蛍の光は私たちの心を
和ませてくれるのかも知れません。ゲンジボタルは千五百万年から五百万年前の間に日本

列島に発生・分布し、進化をとげながら、百万年前から日本列島全体に分布を広げたと
われております。

ところで、日本書紀（七二〇年頃）の巻第二の神代下に「彼の地には、多に螢火の光く
神及蠅聲す邪しき神有り」とあり「螢火」と螢の文字が日本で初めて登場しています。学
術的にもこの時代に螢は存在しておりますが、文献上では不明で、日本にいつ頃から螢が
存在していたかは分からないようです。化石もないそうです。平安時代になると、「万葉集」
や「源氏物語」「伊勢物語」などの中に螢の文字が出てきます。螢が水辺に住んで、光るも
のと記されている文献もありますので、この時代には螢が存在していたと思われる。「枕
草子」では、季節について「夏は夜。月のころはさらなり、螢の多くとびちがひたる」と
記され、夏の風物詩であったことがわかります。その他、いろいろな書物に出て来ますが、
ほとんどが恋歌として登場しております。江戸時代になりますと、浮世絵に螢の飛ぶ情景
や、庶民が螢に触れる風景が描かれております。江戸時代に唄われたわらべ唄で「ほうほ
うはたるこい・・・」と言う唄はよく知られています。

螢の放つ光の違いによって「源氏螢」「平家螢」と命名されたようで、源平の戦いを想像
させられますが、元気に飛び回り光を放つ源氏螢、あまり動かずに光を放つ平家螢、と名

付けられたとも言われています。多くの文献に登場するように、蛍の乱舞する姿は古くより日本人の心に溶け込み、初夏の夜のひと時を幻想の世界にいざなってくれるのではないのでしょうか。

まだまだ境内に飛び交う蛍の数は少ないですが、今後は蛍の人工養殖なども考え、将来は神社の境内一面に蛍が乱舞し、伊奈波神社の蛍が岐阜の初夏の風物詩になり、多くの参拝者に訪れて頂ける様に努力してまいりたいと思います。

(岐阜県 伊奈波神社 権禰宜)

終戦六十周年を迎えて

渡邊光彦

様々な価値観が共存する国際社会の中で、日本をめぐる国際環境は、激変の様相を一層深めております。

国内においても多種多様な価値観をもった日本人が増えていることも事実であります。こうした日本の状況の一挙手一投足を、諸外国は注目しているのです。

今日、日本は政治・経済・教育面などで、大きな歴史の節目を迎えているように思われます。

「どうも先行きが見えない」とか「日本はどう変わってゆくのか」と不安な気持ちを抱いている人も多いのです。

時代が大きく変化する時、人間は進路を見失い、疑心暗鬼の気持ちに捉われる。新しい時代に取り残されたくない、生き残りたいという本能が、必要以上に不安な心理を生むのです。その不安を解消し、進むべき方向をしかと見定めることのできる羅針盤、これこそ

歴史本来の役割だと言えます。コンピュータになぞらえれば、歴史というディスクには幾多の先達が残してくれた多くのソフトウェアが詰まっているのであります。

過去の日本人が危機にどう対処したかを知っていれば、いたずらに不安を抱く必要もないわけであります。

「歴史は繰り返す」という名言があります。かつて私達の先人は、歴史書を鏡物と呼びました。平安時代の『大鏡』、南北朝時代の『増鏡』など、過去の歴史を鏡になぞらえ、それに映る姿をわが姿と見て、自らを省みたのであります。

人はたった一人では生きられないのと同様に、過去を振り返らずには生きられません。英国の小説家であり、同時に卓抜した批評家でもあったG・K・チェスタートンは、「伝統とは、死者の民主主義である」と喝破したが、子供が親の後ろ姿を見て育つように、私達もまた、先達の後ろ姿に学ばなければなりません。それなのに終戦後、大東亜戦争は、勝者である連合国のもとで、極東国際軍事裁判を受け入れさせられたのです。近年、この裁判は国際法上違法で問題があったとの指摘もなされ、この裁判の遂行者マッカーサーでさえ、「東京裁判は誤りだった。」と述懐していることも伝えられていることは、今や周知の事実であります。

また、この戦争は連合国の勝者の論理で、日本の東南アジア諸国への侵略戦争との一方的な見方までされてしまったのであります。

このことに關しても、近年日本は東南アジア諸国民を、列強の植民地政策から解放した意義は高いとの評価があることも事実であります。

こうした状況と、終戦後の占領下で制定された現憲法、その趣旨に基づく政治、教育行政、学校教育、とりわけ歴史教育等々での弊害を、終戦後から今日まで引きずっていたことに、良識ある国民、歴史学者から批判されてきたことも事実であります。

物事には、何事にも功罪が付きものであります。戦後教育の成果も随所に見られたことも否定できませんが、最大の弊害は、神事を中心とした伝統文化を尊重し敬う、日本人教育、ひいては日本人の魂をもった人間教育を、国も教師も親さえもできなかったことにあると思います。その結果、自分の国の歴史に自信がもてない、もとうとしない国民を作ったのであります。

近年、こうした状況を改善・改革しようとする気運も高まり、遲きに失した感はあるが、政治改革・教育改革などがなされております。さらに、憲法改正・教育基本法の見直しなども政治日程に入るよう、世論を喚起する必要があると思います。

また昨今、中国、韓国、北朝鮮諸国との懸案事項である、靖国参拝・歴史認識問題・竹島問題・拉致問題等々の外交政策は遅々として進まず、政府の対応も国民の目には中国・韓国・北朝鮮諸国の言動に翻弄され続けている姿しか映りません。外交政策での期待すら抱かせない現況は、誠に嘆かわしい限りであります。つまり、日本の政治力、ひいては日本人そのものが、そして日本人としての生き方が試されているような気がしてなりません。それでは、日本人そのもの、そして日本人としての生き方を緇く場合、そのお手本は日本の古代史、それも「神話」や「伝説」の中に埋もれていると言つてよいでしょう。神話・伝説は民族の「祈りの結晶」であり、古代の人々が「かくありたい」と願った憧れや、民族的記憶の投影であり、古代人の歴史体験の反映なのであります。そして、『古事記』や『日本書紀』などに代表される「神話の時代」が、如何に重要で歴史的意義が込められて編纂されたかが理解できるのであります。

思えば日本は元来、多種多様な価値観を平然と共存させ、繁栄してきた国でもあります。つまり、八百万神という表現はその精神の発露に外ならず、古代の人々は実に様々な神々を信仰し、しかもその中には海外の神まで含まれていたのであります。まさに、「歴史は繰り返す」わけであり、激動の明日を果敢に生き抜こうとするなら、その何よりのお手本は、

まさに日本の古代史、それも「神話」や「伝説」にこそ見られると言っても過言ではないのであります。

古来、日本人は神々の信仰を通して、日本人としての心を育み、祭祀の実践の場である「神社」（鎮守の森）での「祭り」を通して、日本人としての生き方を学んできたのであります。そして、信仰のバックボーンとなったのが「神道」であります。「神道」は稲作民族、つまり日本民族固有の、自然を信仰の対象として敬い、森羅万象全てに神の姿を見出し、自然との「共生」を重んじる先達の日本人として生きていく上での生活の知恵でもあったのです。

全国津々浦々の「鎮守の森」（産土神）は、その地域の人々が先達のように敬神崇祖の念をもった地域人に、いや、日本人として神事を中心とした伝統文化を支える人に成長しているかどうか期待しながら、日々、じつと見守り続けているような気がしてなりません。

尚、「鎮守の森」の森が転化して、「杜もの都仙台」の杜に、杜が更に転化して「神社」の社になったとも言われています。

以上述べてきたように「神社神道」は、日本文化の原点であり、日本人の精神構造の原点となってきたと言っても過言ではありません。こうした歴史認識を踏まえた日本人とし

ての言動や生き方が、今、日本人に求められているのです。

終戦六十周年を迎えた節目の時だからこそ日本の原点、日本人としての原点を見つめる必要があると思います。そしてこの戦争で国のため尊い命を捧げた三一〇万の英霊に哀悼の誠と感謝の意を表したいと思います。神道人として先達に思いを馳せながら「元氣印」のもと、「本氣印」になって教化活動と祭りの振興に努め、「勇氣印」を出して神事を中心とした伝統文化を次世代に継承していききたいと思います。と同時に、宮司としてリーダーシップを発揮し「歴史を学び、歴史に学べ」を肝に銘じ、更なる使命感と研鑽に努め、氏子の協力と信頼を得ながら、「鎮守の森」の環境整備に努めなければとの決意を新たにしていくとあります。

〈参考資料〉 祥伝社「逆日本史」樋口清之著

(宮城県 川口神社 宮司)

岩木山信仰について

武内尊英

本州最北の地青森県。世界遺産白神山地北部に位置する津軽平野のほぼ中央に独立峰としてどっしりと聳え立つ岩木山は、標高一六二五米。頂上が中央に岩木山、北に巖鬼山、南に鳥海山と三峰に分かれております。決して高い山ではないが、小説家太宰治が十二単を着けた美女に見立てた如く、その姿は大層美しいものです。この岩木山に源を発する岩木川は津軽平野を潤し、さまざまな穀物を始めりんごを育み、時には農家・漁師等の山あて（山を頼りに、自分の状況等を把握すること）として津軽に恵みをもたらす母なる山であります。

山頂には南向きに奥宮が立ち、ほぼ一直線上に下居宮岩木山神社が鎮座します。参道はゆるやかな勾配で約三百米。楼門・拝殿・本殿と各手前に急な石段が待ち構えており岩木山へ登山するが如き感覚に捕われるのは私のみではないと思われます。東北地方では珍しい絢爛豪華な造りは日光東照宮に比され、当時の佇まいを今に伝えます。中でも拝殿は電

氣を始め瓦斯・水道も無く、正に不便な山頂に居るが如く、目を閉じていると江戸時代が偲ばれてくる様であります。

そんなお山に信仰が生まれない訳がありません。旧八月朔日を例祭とする向山・宵山・朔日山の三日間が、お山参詣やまさんけいと称される岩木山山岳信仰の象徴であります。各村内では一週間前あたりから、各産土神社の拝殿か神楽殿、あるいは行屋ぎょうや（仮屋）を建て合宿し、朝夕精進潔斎します。川を掃除し、メ縄をめぐらせ神聖な場所とし、水垢離をして身を浄め、笛・太鼓・手平鉦てひらがねの囃子はやしに合わせて「さいぎ、さいぎ」と唱えて心身を清浄にするのです。これは登山囃子と呼ばれる熊野・大峰吉野の修験者が唱えていた六根罪障が原型をなすものと考えられる唱文であります。「懺悔ざんげ々々、六根懺悔ろっこんざんげ、御山八大おやまはちだい、金剛道者こんこうどうしや、一々禮拜いちいちれいはい、南無帰命頂禮なむきみようちょうらい」であります。津軽の方言・訛りが入り、あまり原型を留めないが、仏教色が強いながらも神様への感謝を全身全霊を捧げ表現している、心からの呼びかけであります。

朔日山の前日、宵山の日には津軽一円よりお山参詣の行列が白装束に身を包みやつてきます。先頭を行くのは十米近くある大幟、その後にはヒバ材等のカンナガラ（鉋屑）かなど材木を削ってできる薄い木片（惟神とのごろあわせと思われる）を束ねた御幣が続き、

各集落より登山囃子を唱えながら徒歩で神社へ向かい、餅や収穫物を奉納し、御祓いを受け、翌朝の御来光を目指し、登山囃子を奏でながら、真夜中松明を頼りに山頂へ向かうのです。神社より山頂迄約六キロ、四時間程の行程ですが、昭和四十年スカイラインが開通し、気軽に登拝出来る様になりました。土地柄イタコ・ゴミソ等、通称拝み屋と呼ばれる祈祷師が多く、何人もの信者を連れ登拝していましたが、後継者問題で現在激減しております。若者の参加が少なく神社離れも同時に進んでおり、今後の事を考えると背筋の凍る思いがします。

津軽の人は祖先来、何百年もお山を眺めて育ち生きてきました。眼は口程に物を言うではありませんが、津軽人の視線は幾百万回となく岩木山に結びつき、自分達の山だという意識が自然に育ち、それぞれの心の中に鎮座しているのです。こうした郷土愛の心が元となり、全国各地の名山霊山の登拝行事に共通する様に、お山参詣は神体山であるお山と一体になる過程において毎年新たに新生し、一本気な津軽人の気質である「じょっぱり」（強情っぱり）を養っていくのではないかと思います。

お山参詣を始めこうした伝統行事に、神職として、又同じ時代に生きる人間として、氏子崇敬者と共に参加し、一緒に苦楽を共にし、酒でも飲みながら笑い合う事を通して、敗

戦後骨抜きにされた日本国民の、特にこの複雑すぎる現代社会の若者達の心に、日本文化の良さを伝える事が出来ればこれ幸いです。

境内に岩木山を詠んだ古い歌碑があります。

「富士みても 富士とやいはむ みちのくの 岩木の山の 雪のあけぼの」

御本家の富士山を意識した、強烈なじょっぱり魂が如実に表れた歌であります。この津軽の地に再び古き良き日本の曙が輝かしく昇る事を堅く信じ、今後共日々精進しようと思います。

(青森県 岩木山神社 権欄宜)

※登山囃子唱文

登山囃子とざんばやししょうもん
懺悔懺悔ざんげざんげ 六根懺悔ろっこんざんげ

御山八大おやまはちだい 金剛道者こんごうどうしゃ

一々禮拜いちいちれいはい 南無歸命なむきみょう

頂禮ちやうらい

九州の神宮林

黒田明司

正式には神宮明治百年記念林といひます。

私が九州の熊本に神宮の森が有る事を知りましたのは、平成十六年の四月頃でした。何故熊本に有るのだろうか？そこはどんな所だろうか？と思い、先ずは電話で伊勢の神宮にお尋ね致しました。

神宮の営林部の方は、六月と八月一月を除き、月に一度一週間この神宮林に来ること、そして案内も可能であることを伺い、神宮宮域林のパンフレットを送っていただきました。それによりますと、この九州の神宮林は、明治百年を記念して、昭和四四年から伊勢湾台風の被害木処分による資金をもつて熊本、宮崎両県に設定された。将来、宮域林における御造営用材生産の補完的役割を担うものであると記されています。

徳川大宮司様の時に木から得た収入は山に戻し木の育成に使う、というお考えのもとに、伊勢の地以外で檜の成長が早いこの地をえらばれたそうです。総面積は約一〇〇〇ヘクタール、そ

のうち約六割が熊本県にあります。

神社庁を通し話を進めていただき、平成十七年七月十四日に神宮林視察が叶いました。

私達熊本県神社庁の三人は朝六時熊本市を出発し、九時に熊本県球磨郡水上村役場到着。神宮司庁営林部技師補・東京農大卒業、神宮に勤めて七年目の山本さんと、地元で林業を営んでいて日頃の手入を委託されている神宮囑託の山中さん親子と、そして地元の工藤支部長さんと、二台の四輪駆動車に分乗。梅雨空の中、神宮林へと向かいました。

最初は舗装されている細い山道でしたが、途中からゴツゴツした石だらけの林道になりました。神宮の看板が有るわけでもなく、一見普通の山林と変わりありません。道の両側はかなり急な斜面です。やはり四輪駆動車で案内して頂かなければ来られない所だと納得しました。

途中の車窓からは、近いうちに間伐する目印に数本の檜にビニールテープが結んで有るのが見えました。車から降りて説明を受けましたが、雨が降ってきたので山小屋で説明を伺うことにしました。

周りは大きな杉が数本有り、その下に小さな檜が植えてありました。伺いましたら、ここは元杉林だったそうです。杉を全部伐らず、以前の生態系を残しながら檜を育てる、神

宮の森の育て方の方針を知りました。

さて、御遷宮は一三〇〇年前から行われています。そして、神宮の宮域林は御造営用材を伐り出す「御杣山」と定められました。その後檜が尽き、現在では、木曾や裏木曾の国有林から購入しています。しかし、国と神宮との関係がなくなった現在、従来のように御遷宮のために大量の適材を購入することは難しくなっています。

そんな中、神宮では大正十二年神宮神地保護調査委員会で、神宮林の経営管理についての基本方針が決議され、二〇〇年の計画で御用材を育てています。

神宮の神路山、島路山、前山の第二宮域林と呼ばれる山では、五十鈴川の水源の涵養と宮域の風致増進を図りつつ御用材育成に努めています。その広さは約二五〇〇畝、檜の人工林ですが、生態系のバランスのとれた檜と広葉樹の混合林になっています。そのほうがよい檜が育つそうです。

将来大きな木になるであろう木にはその成長を促進させるため、隣接木の枝先が触れあう木を伐る（受光伐）伐採方式を行っています。そして将来、大樹を期待できる木には二重ペンキで表示しています。

植える檜の苗はヘクタールあたり四〇〇〇本。二〇〇年間で胸高直径六〇センチ以上を一〇

○本程度とすることを目標にしています。二〇〇年の森林経営計画に驚きと感動を覚え
ます。

そして昭和の初めに植えた檜が第六十二回の遷宮には七〇〇年ぶりに伊勢の山から二割
程度が伐り出され、御用材として使われるそうです。これは記念すべき事であることも伺
いました。

九州の神宮林は、神宮の森林経営計画の基に営林部の方の指導により、地元の森林組合
の方々が手入れをしています。檜は植えられて未だ三〇年あまりですが、夏は下草刈、秋
冬は枝打ち間伐、三月は植樹作業が毎年繰り返されています。

本格的に御用材として搬出される日を目標に頑張っておられます。私達の知らないところ
で地道にお伊勢さんのために頑張っている人がいることに驚きと感謝の気持ちが沸きまし
た。

一回の遷宮には約一四〇〇〇本の檜が必要とされています。九州の神宮林、そこに檜を
植えたと仮定した場合、私の計算では二〇〇年後には立派な檜が十万本育ちます。御造営
用材生産の補完的役割を十分担う事が出来ます。

又、この山には径四〇センチ程の天然の檜も育っています。四〇年後には御用材として使わ

れることも可能です。その頃私は九十四歳、生きているか死んでいるかわかりません。でも楽しみです。九州は熊本で育った檜が、お伊勢さんに使われると思うと本当に楽しみです。九州の地で盛大なお木曳行事が出来る日を想像すると、心がわくわくし、将来の御遷宮が見えてくるようです。

九州の神宮林は私の知らない世界でした。そこには生態的に調和の取れた森林の育成と、二〇〇年後の御遷宮を目標に頑張っている人々の姿がありました。次回の御遷宮に向けて大変な勇気を頂きました。この事を子々孫々伝えながら神宮奉賛に邁進していきたいと思っています。

(熊本県 四山神社 榎宜)

神のみこともちとして

佐々木美津子

神々しい山々にかこまれた矢作の郷土、鎮守の社

天照御祖神社に対し崇高なる敬神の御心のもと、御氏子崇敬者をはじめ皆々様の心温まるご誠意のもと、永年に亘り念願でありました社殿新築造営工事が滞りなく順調に進み、七月二十三日夜に遷座祭を執り行いました。

当天照御祖神社は、正和五年（一二三六）矢作村鶴館城主千葉大藏廣胤が、天長地久、武運栄耀、住民の繁栄を祈願したのが創祀と伝えられており、御祭神に天照大御神、伊邪那岐神、伊邪那美神、武甕槌神、日本武尊、応神天皇、菅原道真公をまつり、神社の後方には鶴館城跡があり、今も石垣・堀等が残っております。

明治の御維新まで、不動尊を祀り、羽黒派の修験場として栄えておりましたが、神仏分離令により修験場は廃止され、旧江刺県より天照御祖神社の社号を頂き、明治五年（一八七二年）村社となりました。又修験場を営むかたわら寛永十二年（一六三五年）大乘院の

寺子屋「和田塾」を開き、地域の子弟の教育にあたってきましたが、新学制に移行し和田学校となり、後に陸前高田市立下矢作小学校と改称、彗星「フィンレーササキ」発見者（大正八年・一九一九年）佐々木哲夫、佐々木萬夫東北大学教授兄弟をはじめ、多くの子弟を世に送り出し、地域の人々から常に厚い信仰で祭られて参りました。

平成八年十一月、前宮司であられた主人が病死、その翌年国学院の研修を受け、神職の道に……。五十才を過ぎての神職の道は厳しく、「何をどのようにすればいいの」「この文書はどのように書けばいいの」とすべてがはじめてで、泣きたい思いの毎日でした。そんな時は、近所のおばさんに「美っちゃん、神社におまいりに来るのがとっても楽しいですよ」と。その言葉に勇気をもらい、私に出来ること、それは背のびすることではない、どんな小さいことでもいい、「真心」をもってご奉仕にはげようと、老若男女、地域のみならずと一緒に神社への奉仕、地域活動を行ってきました。

神社は決して一人の力で運営出来るものではない、皆が喜び集える場所であること。そのため

○明るい笑顔と、さわやかなあいさつを

○境内の美化整備を

○神社奉仕は「真心」をもつて 等々

女子神職の良さが發揮出来るよう常に心がけてまいりました。特に十一月の新嘗祭は、婦人部の人達と一緒に地域でとれた食材を使って料理を作り、神様にささげ、おさがりを頂きみんなで食事をしたり、町内の氏神様の参拝に出かけたり、又保育園児の七五三詣や入学奉告祭、小学生の夏冬休みのラジオ体操の集まり等々、神社に集えるように日々努めてまいりました。

小さなことを大切に心がけて歩んだ神職の道、幸い総代さんをはじめ地域の方々が神社運営に協力的であつたことが何よりも心の支えでありました。

ここ数十年前より神殿の雨漏り、土台の沈下、老朽化が進み社殿の改築を前提に具体的検討を重ね、平成十四年十一月社殿工事という大事業にふみ切り、責任役員会、総代役員会と会議の連続。東に西に工事にかかわる方々との交渉に、時には男に、時には女になり、いろいろな体験を重ねての日に、「主人が元気でいたなら・・・」と弱音をはく時もありました。

社殿新築造営事業にあたりましては、町内外の氏子崇敬者並びに各事業者の方々より、真心なる造営資金の御奉加を賜り、又請負業鈴木建設様には卓越した技術と高級材料の使

用により、見事に完成致しました。

矢作の郷土、鎮守の杜に大神様の正遷座をお迎え出来、地域の皆様方と喜びを共にすることが出来ましたことは、私の終生忘れえぬ感激であると同時に、その責任はいよく重く、大きくなることを痛感致します。

建設工事にとりくみ十年余り、神職の道を歩んで七年の歳月に亘り、御指導、御鞭撻を賜りました神職、総代、氏子崇敬者その他多くの皆様方に御礼申しあげ、今後は新たな気持ちで御神威の発揚と、世の為、人の為、神のみこともちとして神明奉仕にはげみたいと思います。

亡夫の道 歩みてゆけば 七年に 願ひかなえて 遷宮迎へる

(岩手県 天照御祖神社 宮司)

家族の愛こそ神の心

—お日待（新年神棚祭）の後で、子供対象に—

黒須主計

今、とても立派にお祭に参加ができましたね。今年は、ほく何年生になるの・・・？ほくは神様にどんなことを祈ったかな。きつとそのことを叶えてもらえると思うよ。

ところで、神様って何なのかな。ぼくはどう思う？おうちの人から教えられたかな。神様の声、聞いたことがありますか？ないよね。私も実は聞いたことがないんです。

実は、よく考えてみると、この神棚にいらっしやる神様は、ぼくのとおいお爺さん、お婆さんたちのみ霊なんだよ。人が亡くなって、三十三年、五十年過ぎると、そのときの悲しみや汚れが消えて神様になって、山の上について、故里を見守って下さるんだって。その神様を君の家でお迎えする。それがこの神棚なんだ。これをこの土地のみんなの神様としてお祭するのが氏神さま。ここではお日高さま（熱日高彦神社Ⅱ氏神）だよ。

年の初めにはその神様から一年の幸せを頂くので、こうしてお迎えし、おもちやお酒を

さしあげてお祭をするのです。

ところで、神様の一番お好きなものは何だと思いますか？お酒、お餅の外に……。それは「いい子」です。いい子つてどんな子かな。よく考えてごらん。

悪い心を持っていない子。うそをつかない子……。いろいろあるね。それを、「心がうつくしい子」って言うんだね。君は大丈夫かな。どうすればそうなれると思う？

そう、お父さんやお母さんの言うことをちゃんと聞いていると、きつとそうなれるよね。

あ、そうだ。神様の声つて、もしかしたらお父さんやお母さん、そしてお爺さんやお婆さんの言葉かも知れないよ。だってね、君のお父さんやお母さんは、そのお父さんお母さん、つまり君のお爺さんお婆さんの言葉で育てられ、そのお爺さんお婆さんもやっぱり同じようにして育てられたんだからね。

すると今、君のお父さんお母さんの言ってることつて、ずっと前のご先祖様が言ってることと同じなんだ。そして昔のご先祖様は、この神棚にいる。分かったね。だから君のお父さんお母さんは、お爺さんお婆さんより立派になり、君たちはそれよりもっと立派になる。神様の言葉はすごいね。そういう願いが込められた言葉が自然に言えるお家の人つて神様のお使いなんだね。だから君がしっかりしていないときに、お父さんやお母さんは

どうされる?・・・思っただけで怖いね。その怖さを私の祝詞で「恐み恐み」って言うのです。「恐れながら申し上げます」という意味です。でもその奥に限りない優しさがあるから安心なんだね。ぼくも、やっと神様の声が聞こえてきたぞ。

今年もお父さん、お母さんの言うことを守って、いい年にしようね。

お父さん、お母さん、私の祝詞の最後に「子孫の八十続 五十榎八桑枝の如く立栄えしめ給へ」とありましたね。これは祝詞に昔から備っている文言です。「下に行けば行くほど、榎や桑の枝が繁るように栄えさせてほしい」と願っているのです。これはお父さんお母さんに聞いてほしいのです。もしできるならば、子供は複数いた方がよりよく育つ。お爺さん、お婆さんの力を借りて、いっぱい育ててください。これは神様、即ち皆様のご先祖様からの願いです。

いろいろ子供をめぐって、昔には聞かなかった怖いニュースが入って来ますが、家庭がしっかりしていれば大丈夫。全部家庭の反映だと思えますよ。
神様のお使いとして、いい年にして下さい。

神慮への感謝

川崎太久美

今年の三月二十日午前十時五十三分、福岡県の玄海沖を震源とする震度七程度の地震があったことは皆様ご承知のことと存じます。

ちょうどその日は、昭和七年に福富小学校に入学され、今年七十九才から八十才になれる方々が同窓会をなさることになっておりました。久しぶりに、お互いに顔を合わせる事ができる喜びに、全国各地から総勢三十名ほどの方々が集まられるとのことでありました。「参加者の皆さんが、『せっかくのよい機会だから、地元の氏神様にお詣りをして、長寿と身体壮健の感謝と祈願をしてから宴会場へ向かおう。』ということに決まったので、その旨のお祭りをお願いしたい」との連絡をいただいております。

その日は十一時からの祭典ということで、ほとんどの方々は、十時半過ぎには拝殿上がっていただいております。私もお祭りの準備のため社務所に行っており、いざ社務所を出ようと思ったやさきのこと、ゴーツという音とともに社務所が揺れ出したので、今日

は特別な重量運搬車か何か、大型の特殊車が裏の道路を通っているのだらうと思うやいなや、異様な音をたてて社務所がすさまじく揺れ動くではありませんか。とっさに地震だと思つて外に飛び出しますと、目の前の樹齡三百年以上の大楠がザワザワと大きな音をたてて揺れに揺れ、私の立っているコンクリートの上も立っておれないほどの勢いで揺れました。

地震の直後、拜殿に上がつていらつしやつた方々の話によりますと、拜殿の前の門がまるで波にもまれる小舟のように揺れ、いつ倒れるかと心配でしたとのことでした。

この地震の影響で鳥居が二ヶ所、灯籠が三基倒れました。

十一時の祭典に間に合うようにと急ぎながらも、他の人より少し遅れて見えた男の方たちが二、三人いらつしやいました。その方々が、ちょうど地震のときに鳥居の下を通つて見える時刻にあたつておりました。

ところがどうしたとか、いつもなら参道を通り鳥居の下を抜けてみえるのに、その日に限つて横の公民館の方を通つてみえたのです。お蔭で倒れた鳥居の下敷きにならずに済みました。

また、ご婦人の方々も少し遅れた方が四、五人いらつしやいましたが、地震の時刻には

すでに鳥居を通りすぎて、灯籠の傍の木製の腰掛け台につかまって揺れに耐えられたということです。灯籠もその方向に倒れましたが、ちよつとの差で大事に至らずに済みました。しかしこのご婦人方も、もうちよつと遅くみえておれば、鳥居の下敷きか、灯籠の下敷きになられたと思います。何秒かの違いでした。

地震のあと総代会長さんが、すぐ近くの自宅からカメラを持って見え、倒壊した鳥居や灯籠を写真に撮ってくださいました。

二、三日して、その時の写真を持って見えたので拝見してみますと、周りに人影は全くなく、倒れる前の鳥居だけが立派に写っているではありませんか。私はどきつとして、不思議な感にとらわれたあと、「この写真はいつ撮ったのですか」と尋ねると、「私にもはっきりした記憶はありませんが、今年の正月過ぎであることは間違いない」とおっしゃる。その写真には神社幟が立ってなく、注連縄の吊り紐が切れて右端が垂れ下がっているところからみて、私の記憶からすれば、雪と強風のため倒れた幟を倉庫に仕舞込み、後日注連縄の吊り紐を直した二月か三月の初め頃に撮られた写真ではないかと思われまふ。

総代会長さんは就任されて五年になります。私が通いのため、朝夕の拝殿の戸の開閉からお賽銭のことまでお世話をかけますので、神社には一日に数回見えます。五年間のうち

には少なくとも七千回以上足を運んで下さっているその総代会長さんが、今年の二月か三月の初めにふと思いたって、鳥居を写真に撮っておこうと思われたのには、ただならぬ意味があると存じます。しかも、倒れた二の鳥居と三の鳥居しか写真には写っておりません。これはどう考えてもご祭神の思召し以外の何ものでもないと存じます。

「この鳥居は今まで倒れたことはない。しかし、もうすぐ今まで経験したことのない大変大きな地震が来てこの鳥居は倒れて壊れる。何とか今の姿を写し出して残してもらいたい。そして再び鳥居を造り直すときには、その写真を見て復元してもらいたい」というご祭神のご配慮としかいいようがありません。

同窓会の前に、思い出深い氏神様にお詣りをして、長寿祈願を思い立たれた方々で、遅れて見えた人たちをわざわざ横路にまわされて地震の災禍から命を救ってくださったご祭神のありがたい慈しみのご神慮。

このようにご祭神はいつもこの世の中で起きるすべての現象をお見通しなさっていらっしゃる。そして皆様方の身の上をお護りくださり、幸せと恵みを与えてくださっているのです。我々はこのご祭神のありがたいご神慮によって生かされているという感謝の真心をもってご祭神を拝むことこそ、ご祭神に応える唯一の人の道だと存じます。

(佐賀県 福富神社 宮司)

日露戦争戦勝百周年にあたり

三浦久幸

本年は日露戦争戦勝百周年という大きな節目の年に当たります。日露戦争は、当時全世界の大陸の六分の一を所有し、アジア全域を脅かしていた列強最大の国ロシアに我が日本が国家の存亡の為に戦い、多大な犠牲を出しながら歴史的勝利を収めた戦争でした。

この戦争を見直すにあたり、当時の日本が置かれていた国際的状況ですが、十年前の日清戦争勝利により、日本有利の下関条約を締結したことに到ります。これに対しロシア・フランス・ドイツによる三国干渉で遼東半島を清に返還せざるを得なくなりますが、返還後はロシアが進駐し艦隊を派遣します。義和団事件の際には混乱收拾を名目に満州へ侵攻・占領し、撤兵期限を過ぎてもなお居座るロシアに日本は危機感を募らせていました。

そうした状況下で、アジアでは列強諸国による植民地化が進み、タイと日本程度しか完全な独立国はありませんでした。しかも自前で独立を守り抜いたのは我が国ぐらいだったのです。一方、ロシアは凍らない港を得る為に西へ東へ絶えず南下政策を繰り返していま

した。西側はイギリス・フランス等により阻止されますが、東側でロシアの南下を阻止し得る力を持った国は日本を於いて他に存在しませんでした。満州まで迫ったロシアの野望を止め、我が国を守る為に我々の先輩たちは敢然と立ち向かつて行きました。かい摘んで言えば、これが日露戦争の世界史的意味であります。

次に、我々の先輩はどのような精神的態度で日露戦争に立ち向かい、いかなる国民性を示していたか、その一例を紹介致します。

戦争が始まってすぐに、文部大臣名で全国の学校に向けて一つの訓令が出されました。その内容は「我が日本には戦いにおいて相手を侮蔑するような精神的伝統はありません。我々は敵であつても敬意を表して、正々堂々と死力を尽くして戦います。それを子供たちに教えて頂きたい」という趣旨の通達です。戦時中にこのような訓令を出した国は恐らく世界で日本だけでしょう。これが明治の精神であり、だからこそ大國ロシアに勝利したと思います。明治の精神は敵に敬意を表しながら、しかも死力を尽くして戦うところにありました。これが当時の日本人の精神的態度であつたのです。今の私たちが忘れかけている精神的態度ではないでしょうか。

そして戦争終結後、日本政府はまずロシアの戦歿者の慰霊を行っています。激戦地であ

りました旅順にロシア風の墓地と顕彰碑を建てて、日本政府の主催で慰霊祭を執り行いました。これは明治四十一年の出来事です。日本の戦死者の慰霊祭はその一年六ヶ月後に行っています。つまり自国の戦死者より先にロシア側の慰霊を日本政府主催で行っているのです。

「昨日の敵は今日の友」という言葉がありますが、敗れた方が悲惨であり悔しいのだから、まず敵側の墓地や顕彰碑を先に建てています。しかも、最初は神式でやるという話で決まっていたものを、ロシア側がロシア正教でやりたいと言うので、ロシア正教の神父さんを呼んで執り行いました。このような大慰霊祭を日本政府主催で行ったという当時の日本の国ぶりを良く知って頂きたいと思いますね。

次に、日露戦争の勝利が世界にどれほどの影響を与えたかについて。冒頭でお話した通り、日露戦争前夜のアジア情勢は、当時シャムと呼ばれていたタイと日本が独立を保っている中で、もし日本が敗北したらどうなっていたでしょうか。アジア諸国はもちろん、日本はロシアの従属国或いは列強諸国の植民地支配を受け、国の主権は奪われて日本は消滅していたかもしれません。当時の米国大統領セオドア・ルーズベルトは日本、ロシア両国艦隊の海戦に言及した書簡の中で、「日本艦隊が勝利を得る可能性は二〇%と考えるのが

妥当であり、敗北を喫した折には日本は滅亡の悲運に遭遇するだろう」と記しています。

その絶望的な状況下で、日露戦争に日本が勝利した事は世界的に大変大きな意味があります。日本の勝利は列強が支配する世界の中で苦しんでいたアジア・アフリカ諸国に「自分たちも列強を打ち破る事が出来るかもしれない」という独立へ向けての勇気を与える機会になった、世界史を変えた大事件だったのです。

最後に、日露戦争の御英霊は約八万八千柱にのびります。列強諸国によるアジア植民地化が進む中で祖国防衛の為に敢然と戦地に赴き、家をも身をも顧みず国の御楯として祖国を遙か離れた戦場で戦い、数々の御功績を築き上げ、我が国の平和と繁栄の礎となられました。しかしながら、今日では日本が戦った戦争は何もかも侵略戦争と言われるような風潮が生まれ、ましてや日露戦争が祖国防衛の為にやむなく戦わざるを得なかった状況だったという事など殆ど理解されておらず、誠に残念でなりません。ここに日露戦争戦勝百周年にあたり、今こそそのような風潮を改めて、日露戦争へのしつかりとした歴史観をお持ちになり、日本という国や日本人である事にもっと誇りに思つて頂き、国を護る為に戦い散華された御英霊に感謝の祈りと誠を捧げましょう。

真まことの愛

牟禮照子

平成十七年六月二十七、八日にかけて、天皇皇后両陛下が、サイパン島を御訪問されました。兵隊と共に、一万六千人の一般島民が子供を含め、〃バンザイ岬〃から海へ身を投げ玉碎していった島、その岬の同じ場所に立たれた両陛下は、深々と頭こゝろを垂れて黙禱を捧げられました。戦後六十年経つてようやく島民の悲願が叶つて、両陛下をお迎えする事が出来て、天皇陛下の思い、島民の悲願がようやく実現し、玉碎した御霊に慰霊の心が届いた思いが致します。「天皇陛下、萬歳！」と叫び乍ら、子供を背負った婦人が海に飛び込む姿がテレビで放映されました。戦争も、サイパン島玉碎の事も知らない世代が多くなつて来ている時、美智子皇后様が天皇陛下と共に岬にお立ちのお姿が、何とも云えない夫婦連帯の絆を感じ、一つの物語と重なりました。

一九九八年（平成十年）インドで開催された国際児童図書評議会ニューデリー大会で、美智子皇后様は基調講演をなされました。皇后様は流暢な英語で御所から世界に向けてご

講演遊ばされ、それは「橋をかける」と云う御本になりました。皇后様の少女時代、戦争たけなわで疎開生活を余儀なくされ、読みたい本も思う様に身近になかった時、お父様が下さった神話伝説の本が「自分に根つこの様なものを与えてくれた忘れないお話として、四世紀の頃の一人の日本の皇子の物語があります」と述べられ、御自身が読まれた少女時代の本として、日本武尊やまとたけるのみことと後の弟橘媛おしなほのひめのお話を紹介されました。

日本武尊は第十二代景行天皇の皇子で、武勇に優れていましたので、天皇の命を受けて九州の熊襲くまそを討ちに出向きます。休む暇もなく、東国の蝦夷えみしを平定する為、又出陣します。その時尊は、大和から伊勢神宮に参拝され、叔母君である倭姫命やまひめにお会いになり、天叢雲劍つぐみ（三種の神器の一つ）と袋を戴かれます。途中、駿河国（静岡県）の焼津で、土地の豪族から鹿狩りを勧められて野原に入ったところ、火を放たれ、妻の弟橘媛おしなほのひめと共に殺されうになります。尊はその時、倭姫命から戴いた剣で周囲の草を薙ぎ払い、授けられた袋を開けると火打ち石が入っていたので、それで逆に迎え火を放ち、危うく難を逃れました。それ故この剣は以後、草薙劍とも云われる様になったのですが、更に尊一行は相模国さがみのくにから船上かすさへ渡ろうとして、走水はちみずと呼ばれる今の浦賀水道を横断中、潮の流れの速い処で暴風雨に遭い、船が沈みそうになります。物語はここからなのですが、尊に従っていた弟橘おしなほ

媛は「私が海に入り、海の神の怒りを鎮めるので、あなたは使命を遂行して下さい」と云い、海に身を投じます。その時媛は、美しい別れの歌を残します。

さねさし相模の小野に燃ゆる火の

火中に立ちて問ひし君はも

「相模の野原の燃えさかる火の中で、私の事を心配して氣遣つて下さった君よ！どうか任務を果たして下さい。」危急の時に尊の示した愛情、氣遣いに対して感謝の氣持を歌ったものです。この物語の犠牲は「いけにえ」とは少し違っていると、皇后様は書かれておられます。又「弟橘媛は日本武尊と任務を分かち合うような意志的なものが感じられた。愛と犠牲と云う二つのものが、寧ろ一つのものに感じられた」と仰っておられます。この自己犠牲こそ、真の愛の姿だと私は思います。無事に任務を遂行し、大和へ帰る尊は、群馬の碓氷峠から関東平野を望まれて、弟橘媛を偲ばれて「吾妻はや」「あ、私の妻よ」と詠嘆されたと云います。これから関東の事を吾東、吾が妻、「東の國」と呼ぶ様になったと云われています。

真の愛は人々の心に永遠に残ると思えました。使命を遂行し、尊は宝剣を熱田神宮に納められ、やがて病にかかり、能煩野でお亡くなりになれましたが、この御魂は二羽の白

鳥となって大和の方へ飛び立って行つたと云われています。

サイパン島玉碎の悲しい現実とは少し異なるかもしれませんが、バンザイ岬にお立ちになられた天皇皇后両陛下のお姿から、尊く美しいものを感じさせて頂きました。

現代は自己中心の人が多くなつてきています。真の愛は自己犠牲を伴うもので、美しく崇高なものでございます。今の世相に欠けつつある美徳を、もう一度思い直して見る時ではないでしょうか。日本の国の発展の陰に、歴史の尊い犠牲のある事を忘れてはならないと存じます。

(長野県 富士浅間神社 欄宜)

神宮月次祭を奉仕して

榊原久康

例大祭の後の貴重な御時間を頂戴いたしましたして、本日ご参列をいただきました皆様方にお話をさせていただきたいと思ひます。

私も稲荷神社の宮司を拝命いたしました以来、日夜大神様に御奉仕をさせていただいておりますが、今日は私が感動をもつて体験させていただきました事についてお話をさせていただきます。

それは、今から十一年前の平成六年の年に、私、なぜか選ばれて伊勢の神宮祭礼に祭員として奉仕をさせていただく機会を与えていただきました。

時あたかも前の年の平成五年に、神宮第六十一回式年遷宮が斎行され、全国民が神宮への参宮でわきかえっている翌年でありまして、六月に執り行なわれる月次祭という祭に奉仕をさせていただく事になりました。

御承知の通り伊勢の神宮は、私達神社本庁が包括する全国八万余の神社の本宗でござ

いますし、皆様の御家庭にも年末年始、神宮大麻という御札が頒布されておりますので、当然御存知の事と思います。

元々伊勢神宮は、本来は単に「神宮」と一言で言われており、その中に皇太神宮である内宮、豊受大神宮である外宮とに分かれております。今回奉仕させていただきましたのは天照大御神をお祀りされている内宮での月次祭でございます。神宮の月次祭は六月、十二月の二回執り行われ、神嘗祭と合せまして「三節祭」といわれ、由緒深いお祭でございますが、特徴的な神事として、午後十時と翌午前二時に由貴の大御饗が供えられます。午後十時の祭を「夕の大御饗祭」、午前二時の祭を「朝の大御饗祭」と申しまして、それぞれ夕御飯、朝御飯をさしあげるわけであります。

その日、私は神宮斎館に於きまして潔斎をし、身じたくを整えて、皇学館大学の学生に斎服を着装していただき、斎館の中庭に祇候するわけですが、元より私は臨時の祭員でありますし、最後尾でございますので、真っ先に出てまいりまして、天皇陛下の御姉様であらせられます祭主池田厚子様を始めといたしまして、大宮司様、少宮司様以下祭員の皆様がお出ましになるまで、意を正してお待ちを申上げるわけであります。

当日の夜は、たしか曇天の闇夜だったように記憶いたしておりますが、その闇夜にたい

まつの燈だけの神宮のしんとした御神域にたたずみ、張りつめた静寂の中で私は不思議な体験をいたしました。それは体感と申しますか、私自身が透きとおっていく感覚にとらわれた事があります。まさに神と自然と私が一体と成っていく、そういう感覚なのであります。「我」が無くなっていく、清々しく成っていく、透きとおっていくのがわかるんですね。その時、恥ずかしながら自然と涙が出てまいりました。

まだ参進もしておりませんし、御正殿での御奉仕もさせていただいておりませんのに、涙が止まらないのであります。

もうその後の祭事の全てが感動感激でございました。まず参進の時、足元を照らしだすたいまつと燈だけの中で全員の進む歩調が、祭主池田厚子様が進まれる歩調に自然に合うのでございます。当然私も含め、衛士の方も、先導役も、たいまつ役の方も、全ての人間が同じ方向へ足を進め、参進してまいります。闇夜の中、杳の音だけが響く中を参進していく、まさにその中の一人として私がいるという感動、さらに御正殿前に全員がその玉砂利の上に著座をして身じろぎもせず、肅々と進められていく祭事に足の痛みなど感じられず、そして御正殿のすぐお側にて奉仕させていただいているという思いが、私にとりましても何事にも代えがたい、神職として今後二度とでき得ぬであろう神宮での奉仕の体験者

として、それを原点に今後も大神様に奉仕をさせていただきたいと願っておりますが、な
にせ、皆様方がよくご存知の通りの人間でありますので、その所は、皆様方が神社同様に
私を支えて頂きますようお願い申し上げます。

神宮も、平成二十五年に第六十二回目の遷宮が行なわれる事になり、今後氏子の皆様にも
御造営に際しまして、御浄財をお願いする事に相成る事になるうかと思いますが、氏神
様への信仰と共に、本宗である神宮様へも、更なる志を氏子一丸となりまして賜りますよ
うお願い申し上げる次第であります。

(宮城県 稻荷神社 宮司)

美しい心うつくしきこころ

岩田健司

私事になりますが、昨年の春、一人娘が進学の為わが家を巣立って行きました。娘は憧れの故郷を離れての生活に期待に胸を膨らませているようです。しかし初めて子供を外に出す私たち夫婦にとっては、とても複雑な気持ちで娘を見送りました。

ちょうど一ヶ月が過ぎた頃、楽しいはずの一人暮らしも、おそらく帰った部屋には暖かな温もりはなく、思っていたより随分と淋しい思いをしているのではないかと、娘にはじめて手紙を書きました。

引越しの時、黙ってそつと部屋にお祀りした神棚には、あなたが体調を崩さず、元気で学生生活を送れるよう、家族でお祈りしたお札がお祀りしてあります。毎朝たとえ十秒でも良いから故郷や家族のことを思い出して神棚を拜んで下さい。あなたが家族のことを忘れて遊びに現を抜かしていると、いつのまにか心も荒んでくると、神様をお祀りする心をしたためて論しました。

今までは、何でもあるのが当たり前と思っていた数々の恩恵に、故郷を離れてはじめて、母親の慈愛、家族の温もりを身に沁みて感じたのか、その年の暮れには、新しい年のお札をお祀りしたいと、自分から言って来ました。

我が家では毎年、年の暮れに必ず家族全員が揃って神棚の御前でお祭りをし、家屋敷のお祓いを行っています。そしてこの日だけは、父親として子供達に一年間を顧みて唯一話をする日でもあります。

短絡的な向きもありますが、娘のことばに家族が揃ってお祭りをする大切さを思わずにはいられない日でもありました。

どうか故郷を離れて生活する子供たちの部屋に、子供を思う親心の表れとして、神棚を送ってあげて下さい。親元を離れている子供たちはきつと感謝し、美しい心を持つことと 생각합니다。

扱、本年は平成二十五年にご齋行されます第六十二回神宮式年遷宮の諸祭儀が始まります式年遷宮元年の秋とぎを迎えました。

式年遷宮とは、御承知の通り二十年に一度神様の御殿を造り替え、神様をお遷しするお祭りであり、千三百年の長きに亘って続けられて来た日本最大のお祭りであります。

この遷宮の準備は、新しい御殿を造る御用材を伐り出すことから始まります。

五月二日の山口祭、木本祭を皮切りに、六月三日にはいよいよ遷宮の御用材を伐り出す御杣始祭が斎行されました。

一万本にもものぼる遷宮の御用材の中で、最初に奉採される代表木が、神宮の御神体をお納めする御樋代木であります。古くからこの木は御祝木、御神木として神聖視され、御神木をお迎えする土地の人々のもてなしの心が、お祭りや奉祝行事となり、今に伝えられています。

今回も前回同様、長野県上松町の本曾谷と岐阜県加子母の裏木曾から伐り出された御樋代木は、嘉例にならない長野、岐阜、愛知の各地で賑やかに奉祝行事が繰り広げられ、六月八日には県境の三重県桑名市の揖斐川の伊勢大橋で合流し、引継式が各県神社庁関係者、各奉仕団の人々の手によって厳かに執り行われました。

桑名宗社で御滞泊された御神木は、翌朝千三百年に及ぶ長い歴史の中で、初めて四日市市松原町の聖武天皇社にお迎えすることが出来ました。

これまでは四日市市を通過して、津市の三重県護国神社に奉搬されておりましたが、聖武天皇社の宮司様をはじめ、地元自治会の熱心なるご尽力により実現されたものです。

地元では奉迎委員会が結成され、隣接する松原公園も連合自治会長の働きかけによりお借りすることができ、半年前から何度もく／＼会合を開き、諸準備を進めて頂きました。

聖武天皇社は奈良時代に聖武天皇がこの地に立ち寄られたことを偲び、鎌倉時代に創建されたと伝えられています。天皇が一夜を過ごされた時、地元の人々が鉦や太鼓で旅の疲れを慰めたのが、夏祭りとして有名な石取祭の始まりと言われています。

古くは参道の大木と大木の間に太鼓を、木の枝に鉦を吊り下げて叩いていたものを、いつの頃からか、鉦や太鼓を祭車に乗せて威勢の良い掛け声とともに切れ目なく打ち鳴らして町中を練り歩くようになりました。また夜になると提灯に明かりが灯され、お祭りを一層盛り上げたそうです。

御樋代木奉迎祭の当日は、絶好の祭り日和に恵まれ、各町の祭車五台が集結。平日にもかかわらず、各町自慢の揃いのハッピーに身を整えた青年団約百名による歓迎の賑やかな鉦と太鼓が鳴り響く中、御神木の到着を今か今かと待ちわびる参会者約三千人が日の丸の小旗を振ったり、万歳を唱えたりして一層緊張感が高まる午前九時、注連縄が張られ紅白幕で飾られた両宮の御神木が、無事聖武天皇社に到着。

私は胸が弾けんばかりの感激と興奮を覚えながら、兼務神社の四日市支部神職として、

光栄にも奉迎祭を御奉仕させて頂き、はじめて御神木をお迎える喜びを噛み締めつつ、御神木が無事神宮に奉搬されますことを謹んでお祈り申し上げました。

私は多くの人の輪によって御樋代木奉迎祭という千載一遇の経験をさせて頂くことが出来ましたが、聖武天皇社にお仕える宮司様はじめ代々の宮司様が、伝統ある石取祭を通して神まつる心のすばらしさを、氏子の皆様に訴え続けてきた御努力のお徳を頂いてお迎えすることができたことを感謝申し上げなければいけないと思つた次第です。

会場内は、奉安された御神木に手を合わす人々、子供に御神木のことを教える大人たち、一層ボルテージがあがる青年団と、喜びに満ち溢れた奉祝ムード一色に包まれていました。中でも、ある老夫婦がお孫さんに「今日はこんなに有り難いものを拝ませて頂いたのだから、きつといい事があるね」との微笑ましい会話に、国の先行きに不安を抱く今の世相とは裏腹に、平和な心のやすらぐひと時でもありました。本当に素晴らしいことです。

お祭りは、私たちに普段の日常生活では決して得ることの出来ない美しい心こころを蘇らせてくれるのだと、心の底から感嘆の声をあげたくなりました。

この遷宮制度を定めた我が民族の叡知、千三百年という歴史の重みはかりそめなものではないと、心が高ぶるのを感じました。

恩師、石井寿夫先生のお言葉を借りるならば、「遷宮はまさしく世界の宝」であること、更には、わが家のお祭りも美しい心を蘇らせてくれる大切な年中行事として心から強く意識した日でもありました。

「民のため 世のため祈る 神わざの しげき御国は なほぞ榮えむ」

度会常良の歌を心の糧に、神まつる美しき心の素晴らしさを訴え続ける一人でありたいと思います。

(三重県 椿大神社 権禰宜)

終戦六十年に思うこと

水谷光衛

今年は大東亜戦争が終結しまして、六十年を迎えます。八月十五日の終戦の日が近い事もあり、最近はずいぶん靖國神社について騒々しく、総合雑誌の七月号では皆特集を組んでいます。それらの雑誌では、多くのアンケートを載せています。どうも首相の靖國神社参拝に反対する数の方が多いのです。小泉首相の最初の頃は皆さん応援して、靖國神社参拝は当然の事とされていたのですが、どうして、こんなに反対が多数となったのか腑に落ちない現象です。左翼の人とか、社会党的な人の考え方は反対も当然なのですが、しかし左翼的な思想の持ち主が少なくなった現在でも、中国などに諂^{こゝろ}う人が多いのです。特に政治家等に其の弊があるのは残念な事です。なかでも、古賀誠自民党元幹事長が、日本遺族会長で、それを代表するような形での発言「近隣諸国に配慮し、理解してもらうことが必要だ」はおかしい事です。産経新聞六月十五日では同会事務局が「会の正式見解ではない。遺族会としては、首相に靖國神社を参拝してもらいたいという考えに変わらない」と

答えています。

中国が反対する理由は何か。どうもA級戦犯が祀られているからというのが中心というか根本らしいです。A級戦犯というのは東京裁判での論議です。東京裁判そのものが裁判の形を取りながらも、勝利者の一方的な裁判であって、国際法に基づくものではありません。判事十一名はいずれも戦勝国で占められ、検事の役もまた戦勝国のみで担当しました。その上、法の不遡及禁止の原則（事後法禁止の原則）と罪刑法定主義の原則に違反しているのです。昭和五十八年五月二十八、二十九日の池袋のサンシャインシティで行われた「東京裁判」国際シンポジウムの際、西ドイツ、ルール大学長クヌート・イプセン博士は、「平和に対する罪（侵攻戦争を行った罪）を裁く東京裁判の管轄権は、その当時有効であった国際法に基づくものではなかった。」「裁判所条例は、事後立法を含んでいて、東京裁判自体により「一般的な正義の原則」と認められていた罪刑法定主義とは相いれないものだった」と国際法に違法性を端的に述べているのです。以上のように、東京裁判は、国際法準拠を装いながらも、実際はそれを歪曲拡大解釈し、我が国の戦時指導者を戦争犯罪人としたものであり、我が国に対する報復裁判以外の何物でもなかったのです。ただサンフランシスコ対日平和条約第十一条に「連合国戦争犯罪法廷の裁判を受諾し」とあるのを以て

裁判の正当性を主張する人がいるのですが、此の原文は *accept the judgment* であつて、これを裁判と誤訳しているのです。本来は「諸判決」と訳すべきです。交戦諸国が平和条約の中に「交戦法規違反者の責任を免除する規程」即ち「アムネスティ条項」と呼ばれる「国際法上の大赦」を設けるのが通例であり、そのための東京裁判の判決の失効を確認した上で、戦犯を釈放するに違ひないと予想しての、刑の執行停止を阻止するための条文なのです。当然に判決の意です。また此の平和条約には中国は招集されなかつたのです。この条約について発言する法的資格は無いと思います。中国の主張は法的な偽装に過ぎなく、日本は侵略者であるとの主張を続けたい政略です。平和条約というものが一切の戦争を停止し、旧怨を流し手打ちをすることなのに、それを自分の覇権意欲の道具に使うことにすぎません。大国であるとの矜持は持たず、白髪三千丈の嘘を連ねる外交を重ねるのみです。日本の外交は、それに倣^{おそ}ねての態度に終始し、武士道的元気が少しも無いのが気掛かりです。国を護るといふ筋の通つた憂国の信念はうかがえません。特に政治家に明治の志士の意気が一片も感じられません。

小泉首相の靖國神社参拝は今年も続けていただきたく思います。首相が回を重ねて参拝を続けられ、陛下の御親拝につながるものとたく信じております。終戦六十年を迎える

年に思う事は、陛下の靖國神社御親拝を仰ぐ事です。

最後に昭和天皇の御製を紹介します。

○爆撃にたふれゆく民の上をおもひ

いくさとめけり身はいかならむとも

○身はいかになるともいくさとどめけり

ただたふれゆく民をおもひて

○国がらをただ守らんといばら道

すすみゆくともいくさとめけり

これは昭和二十年八月十四日に詠まれた御製です。

(福島県 原中神社 宮司)

敬神の家に余慶あり

石垣正彰

だいぶ前のことになりますが、テレビのお笑い番組で神主姿に扮したタレントが、お祓いの仕草をする場面がありました。その時は何と馬鹿にした事かと、聞こえぬ相手に怒りを覚えた記憶があります。日々の職務として携わるその様を茶化した行為に憤りを感じた次第です。しかし、一般の方々から見れば我々神職を象徴するのに「お祓い」の姿が第一に上げられるのも事実で、神主さんにとり、お祓いは最も多く認識されている見方であることを、そのテレビ番組から教えられた次第でした。

確かに「お祓い」は神事を執り行う場合に欠かすことが出来ない大切な姿であることは間違いないです。『声に出して読みたい日本語』というベスト・セラーの本があります。本の内容は「暗誦もしくは朗誦することをねらいとしており、ただ目で黙読するのではなく、大きな声に出して詠み上げ、自分の息遣いを楽しむ要領で日本語のバリエーションを味わってください」と序論で述べられております。

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす」
「月日は百代の過客にして行き交ふ年も又旅人なり」

「行く川の流れは絶えずして本の水にあらず、淀みに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しく留まりたるためしなし」

ご存じのとおり『平家物語』『奥の細道』『方丈記』の冒頭句です。中学時代に覚えた文章が懐かしく思い出されます。その本の中に何と「祓詞」があり、何となく一安心、しかし「教育勅語」が入っていないのが残念でありました。

私共の日本の国は古き昔より「言霊の幸はふ国」として、言葉に備わる神秘な力、言葉によって幸せがもたらせるという觀念が、既に奈良時代頃には共通認識として位置づけられていたと言われております。

祓詞を朗々と申すことで罪穢れが祓われ、清々しさを夫れ夫れが感じて頂くことが大切です。それには、祓詞を申す神職だけでなく、皆様方も真剣な気持ちでお祓いを受けることがより大切であります。日常何げなく発する言葉もよく／＼注意したほうが、お互いに良い人生を送れるのではないでしょうか。それには先ず、我が家の「山の神」から正さねばと反省しているところでもあります。

皆様方は氏子として、お稲荷様の恩恵を常に頂いておるわけですが、太陽が誰も分け隔てなく等しく日の恵みを与えてくれるのと同じで、氏神様は先ず氏子へというのが神社の信仰であります。その有り難い御恵を感じることが出来るか否かは、お一人／＼の心の持ち方一つにかかっています。稲荷の神は五穀、特に「米」の神秘的働きを尊敬し、感謝や祈りを捧げ敬い、稲荷の神と称えております。八月十一日の新聞記事に食料自給率七年連続四〇％という主要先進国の中で最低の我が国において、お米は食料安保の最後の砦です。「お米」を大事に、私共の命を伝えてくれる神聖な穀物として、初心に帰り深く思いを新たにすることが稲荷大神様への感謝の表し方であります。

戦後の政治で大きな間違いは農政にあったという声を聞きますが、はつきり言つて私には難しいことは分かりません。とにかく国民の生命を守る最後の糧が「お米」しかないという事実をよく考えることが大切ではないかと思ひます。今日、飽食の時代と言われるほどある意味では豊かな食生活の現在であります。どうぞ一人でも多くこの現実を直視してください。「そんなことは杞憂に過ぎないよ。自由貿易の国際社会にあつては日本の工業技術力で充分に対応が可能である」の声、たしかに現在はその通りかもしれませんが、世界人口は増え続ける傾向にあり、又農地は樹木伐採等により砂漠化の現象にあります。農

業従事者の減少、少子高齢化社会を目前に控えている現在において、今が大切な時であると考えを深くするものであります。

日本国民が「豊葦原瑞穂の国」と称えた英知に思いをさせ、稲荷信仰を盛んにすることが食料を守る生命を守る橋頭堡ではないでしょうか。

神社における信仰は難しいことは何もありません。日本の国土に生を受け、「お米」を食べて育った人は全て知らず知らず稲荷の神様の御神恩を頂いている訳で、手を合わせ「頂きます」と言葉を発するとき、そこには既に神の働きがあるわけです。お米は弥生時代前から栽培され、各時代を通して大切にされてきました。再度申し上げますが、食料安保の上から考えますと、お米が高い安いの問題ではありません。命にかかわる問題であります。最後はこの狭い国土で最低限の食糧需給を充たす必要があります。「そなえよ常に」まだ間に合います。どうぞお米を大事にしてきた我が国の正しい伝統を、今一度認識を新たにすることが、基幹食料の生産を担う農業を守り育てる大きな柱となり、確かなお国の繁栄につながる道です。

お米を大事にすることは、稲荷の神様の恵を頂き生かされているという大きな喜びが湧いてくるものであります。

お祓いにより、心身の清浄を願ひ、毎日頂くお米に手を合わせるといふ自然の中で裏付けされた信仰は、心の平安と豊かな生活をより確かに送れる証となり、ご家庭が今にも増して、健康でよりお盛んなるものとお祈り致す次第であります。

(宮城県 竹駒神社 欄宜)

日本狼の絶滅百年に思ふ

南 美宜

一、山の荒廢・鹿の激増

かなり以前より騒がれてゐる事です、鹿が増へすぎて想像以上に全国の山々が荒れてゐるさうです。その遠因の一つは捕食關係にあつた狼の絶滅にあります。確かに原生林として有名な大台ヶ原の映像を見ましても、原生林といふよりは鹿の食害によつて禿げ山に近い様相すら呈してゐます。最近の新聞記事によりますと、鹿以外に猿や猪等を含めた農作物の損害額が、食糧自給率が先進国中最低の四十%といふ我が国にもかかはらず、年間数億円に達すると報じられてゐました。

そして先程来、皆様も仰つてをられますやうに今年は日露戦役戦勝百年といふ節目の年に当たるわけですが、丁度最後の「日本狼」が捕らへられて百年目の年でもあるのです。環境の激変にもよりますが、狼や朱鷺（トキ）など哺乳類と鳥類に限つても、明治以降すでに十八種が絶滅に至つたといふ事です。その中でも特に狼は、食物連鎖の頂点に立つ存

在であつただけに生態系の崩壊等、自然環境への影響ははかりしれない程大きいといひます。けふはこの狼の絶滅について、最近思ひ付いた事も含めてお話ししたいと存じます。

二、狼への畏敬

ご存知のやうに「ローマ」の建国神話では敬意をもたれてゐた狼ですが、牧畜を生業とする欧州では「赤頭巾ちゃん」の童話にも象徴されますとほり、害獣として忌避される存在として扱はれる場合がほとんどのやうです。

日本では「狼」といふ名前の通り大いなる神の「大神・狼」であり、古代には真実の神といふ意味の「真神（まかみ）」とも呼ばれてゐたほどで、絶滅するまで尊敬され畏敬される対象であり続けました。

しかし絶滅の理由はかなり複合的な要因が絡む為かどうも判然としません。駆除されたからとか、ジステンパーや狂犬病がトロッコ犬や猟犬を通じて狼に蔓延したからともいわれますが、確かにいづれの理由も正しいのでせう。

三、大群の出現・絶滅の予兆

ただそれにしては広範囲に数多く生息してゐたはずの狼の、このかき消すやうな絶滅の仕方がどうも不思議でならないのです。

例へば『遠野物語』によりますと、ある時遠野の山で数百といふ数の狼の集団が見られたのを機に遠野では狼が減つたといふ事ですし、奈良県の吉野でも似た話が宮本常一によつて採集されて居りまして、ある人が見たことも無い数の狼を見て七十六匹まで数へて恐くなつたといふ話ですが、やはり吉野でもその大群を見た頃を境にして急に狼が居なくなつたと書かれてゐます。

狼の大群の出現が、その滅亡の予兆であつたといふ事は、徐々に減つたといふより突如居なくなつた感が否めません。單なる駆除乱獲説・病氣説・環境変化説の他にも、もつと別の絶滅理由もあるやうに思へてなりません。

今となつてはもう説明される可能性もほとんどないでせうし、そこがいかにも神秘的な日本狼らしいところであると思ひます。

四、両墓制の起源

俗に、戦ひがあると狼が増へるといはれます。これは戦争で死人が出ると狼の餌が増へるからだといふ事です、さうさう生きた人間を襲はなかつた狼も、人の死体だけはあさつて食べたやうです。

正岡子規に「狼の墓掘り探す落葉哉」といふ句があり、これも墓をあばいて人の死肉を

食らふ狼の習性を詠んだものですが、我が国 特に関西に多い「埋め墓」と「参り墓」の両墓制は、もしかしたらこの狼の習性に由来するのではないかと私は考へてゐます。土葬にする「埋め墓」と、祭事儀式を行ふ「参り墓」を分ける理由は、死を穢れとして区別する必要があつただけではなく、狼に死体を食べてもらふ事で魂を山に帰してもらふといふ信仰が元々あつたのではないかと想像してゐます。狼が「大いなる神」の意味を併せ持つ名前であるのも、狼が魂を山へ送り届ける、この世とあの世を繋ぐ神聖な動物であつた事に起源があるやうに思ひます。

五、「大口の神」と「真神ヶ原」

『大和国風土記』逸文には「大口の神」といふ「人食ひ狼」が明日香に居たと書かれてあり、『万葉集』の方でも明日香にある同じ場所を「大口の真神ヶ原」と詠んだ歌があります。「真神」「大口の神」といふどちらも狼の古い名が付いてゐますが、それが「人食ひ狼」であるといふ風土記の記述から、「大口の真神ヶ原」といふ所が人の死体を食べて魂を山へ帰してもらふ「狼葬」の場であつたと見るのは少し穿ち過ぎでせうか。『万葉集』では、地名の「真神ヶ原」以外には、四五〇〇首もの歌の中に狼そのものを詠んだ歌が他に全く無いといふのも、狼が「魂送り」を司る神そのものであつたゆゑだと思つてゐます。

六、纏め

もちろん「狼葬」など、学問的には何の確証もありません。両墓制の地域差の大きさを見ても一概に断定は出来ません。ただ狼が絶えた今日、両墓制の意味をかういふ直感以外に辿れるものも他に少ないやうに思ひます。今更何故狼のやうな古い話を、と思はれたかもしれませんが、数千年といふ歴史の中で日本人が狼と共生しなくなつた時代といふのはたつたこの百年しかないわけです。

決して遠い昔の話ではありません。埋め墓と参り墓を分ける両墓制も古くは全国的なものであつたといはれてゐますし、今のお墓と各家々のお仏壇あるいは祖霊舎（みたまや）との関係も、なんとなく現代の両墓制と言へなくもありません。

とまれ今年のお盆は、五山の送り火を見ながら全国の山々の鹿による食害を憂ひ、絶えた狼を偲び、両墓制の起源にまで思ひを致す事になつたわけです。一方、目を海外に転じますと米国では本来の生態系を回復させる為、既に三十年以上前から絶えた狼の復活と保護増殖が行はれ、鹿の数も一定に保たれるやうになつたさうです。また、ポーランド・スイス・イタリア・スペイン・ポルトガル・ギリシャなどでも狼を復活させて、既にいくつかの荒れた自然が蘇るといふ成果も現実に出てゐるさうです。自然保護の観点でも、本来

我が国こそ、この百年を埋める「神威の発揚」が待たれるところです。エコロジ―が叫ばれて久しいですが、神職の一人としてこれから自然保護の為に何が出来るかを考えていきたいと思ひます。ご静聴ありがとうございました。

(京都府 松尾大社 権禰宜)

機械屋

佐藤勇穂

いきなりですが、「超音波浴槽内における金属切削の切削抵抗と表面粗さについての一考察」これが私の卒業論文でした。私は、神職には珍しいというよりは変わっているといった方が当てはまるのですが、理系の工業大学出身です。今改めて自分の口にしていても関わらず、論文の内容はよく理解しておりません。

ちなみに超音波浴槽とはどういうものかといいますと、今日お集まりの方々のご厄介になったことではないと思いますが、よく整形外科のリハビリに使用される手や足を入れ、ブクブクと小さな泡の出る浴槽です。もっと簡単にいうと、眼鏡屋の店頭にあつて、眼鏡を洗浄してくれるあの入れ物です。その中で金属を切ると、超音波の力でよく切れるのではという考えから実験を行いました。結果についてはここでは秘密にしておきます。

さて、今日はもう少し私の大学時代のお話をさせていただきます。私の所属していたのは、機械工学科機械工作ゼミというところで、先程のように金属を切ったり、延ばしたり、

さすがに食べるまではいきませんでした。四六時中一緒にいました。鉄などを切ると当然切り屑も出ますし、工具も痛みます。

そこで、我々のゼミでは、針供養祭に似た「切り屑報恩感謝祭並びに工作実習室安全祈願祭」という祭事を行っておりました。一大学の一室で行われている珍しいその祭典は、当日その実習室で一番大きな機械であるNC旋盤機の前に、机や棚を駆使し祭壇を拵えて、いつもは実習室の片隅にひっそりと佇んでいる神棚を祭壇中央に備え、地元の神主さんを待ちます。

皆様も御存知の一通りの式が流れ、いよいよ玉串拝礼ですが、この玉串が少々変わっています。金属の円盤を切って捻れた「切り屑」に紙垂を結んだものでした。一つ間違えば出血しそうな「鋭い玉串」を恐る恐る持つ神主さんより受け取り、一人ずつ拝礼し、最後にはお供えした飲み物やお菓子で直会を行いました。その御利益があつて私達は全員無事に卒業することが出来ました。

その直会の席で、ご奉仕いただきました神主さんより「どんなに技術が進んでも、必ず人の手で行わなければならない所があります。ともすれば、華やかな技術の部分ばかりが注目されがちですが、職人といわれる機械にも勝る技術を持った方々が産業界をリードし

ているということを常に心に刻んでいて下さい」とのご挨拶を頂戴しました。それを受けて、教授が得意気に「本当の機械屋は泥臭いんだよ」と言ったことを思い出しました。

本年は、皆様方も既に行かれたかもしれませんが、愛知万博が開催されております。トヨタ館など、技術系パビリオンに人気が集まっているようですが、我々神社界も出展しているのを御存知でしょうか。社叢学会が中心となり、神社本庁が後援し、神宮式年遷宮のPR等を行っております。一方で最先端の技術、かたや千三百年の歴史、これらが一緒にあるところにおもしろさと思われれます。

神社のお祭り一つを取っても、祭場の清掃、幟立て等の装飾、祭典後の直会……。これらに携わる人々がいてこそ祭祀を厳かに斎行することが出来ます。単純に時間数だけでいいいますと、祭典自体はおよそ一時間位のものですが、そのための準備ということになると、その何十倍もの時間とお金が使われております。ご関係の方々には改めて感謝申し上げます。

私は、現在、北海道神社庁に奉職しております。したがって、神社の祭祀ということに携わることが少なく、事務的なことばかりに追われ、よそ見をしていると机が書類でいっぱいになってしまいます。忙しさのあまり、暖かみのある応対が出来ず、よくご指摘を頂

戴しております。仕事は機械のような正確さ、応対は女性のようなたおやかさを心掛けた
いと思います。

先日、自分の財布の中から出てきた、大学時代の「ガス溶接免許」の写真を見て、しみ
じみと「若かったな」と思い、懐かしい当時のお話しをさせていただきました。

なお、屋根の修理等などは頼まないで下さい。資格があるからといって、溶接が上手い
とは限りません。

(北海道 土別神社 権欄宜)

忠孝一本

野口次郎

四年ほど前から年に二回程度、宮城県警察学校にて、御英霊について講話する機会を得ている。手前味噌にて恐縮だが、受講生の感想は素晴らしく、御英霊の遺書を学ぶことは警察学校生徒に限らず、青年が倫理観・使命感を得る為に有用であると思う。

そこで、講話の中で取り上げている御英霊の遺書と共に、警察学校生徒の感想を紹介したい。

先ずは、古谷眞二命みことの御両親にあてた遺書を読んで戴きたい。

「御両親はもとより小生が大いなる武勇を為すより身体を毀傷きしやうせずして無事帰還きかんの誉れを担になはんこと、朝な夕なに神仏に懇願こんがんすべくは之親子の情にして当然也なり。然し時局は総てを超越こせる如く重大にして徒に一命を計らん事を望むを許されざる現状に在りあ。大君に對し奉り忠義の誠を至いたさんことこそ、正にそれ孝なりと決し、すべて一身上の事を忘れ、後顧こうこの憂うれいなく干戈かんかを執とらんの覚悟なり」

古谷眞二命は、昭和二十年五月十一日、南西諸島洋上にて戦死、満二十三歳であった。

戦後日本のあり方を憂いて割腹自決した三島由紀夫は、その三十日前に広島県江田島にある海上自衛隊の教育参考館にて、この遺書を読み、次のように言っていて泣いている。

「俺には書けんなあ。俺は駄目だ。まだ命を賭けて書いたことがない」、「流れるような名文だ」であった。自決前であった三島をも感動させた古谷さんの決意、それが如何許り尊きものか、まさに魂の書に三島は涙したのだ。

古谷さんに関しての警察学校生の感想には「古谷眞二さんは、国家に対して忠義を尽くすことが親孝行になると言っています。古谷さんは私と同じ二十三才だとは思えないほどの精神力の持ち主だと思いました。国の為とはいえ、どうしても自分を一番に考えてしまうのは人間として当たり前の事かも知れません。しかし、ここで学ぶべき事は自分のことしか考えられない人間は、いつまでたっても成長できないんだということです。私は警察官として県民の為に仕事をしなければならないという自己犠牲の精神が必要で、古谷さんがおっしゃったことと重なる部分があります。そういう意味でも古谷さんの言葉はとて身にしみました。自分はこれから体を張って宮城県民を守っていかなければならないんだ、という気持ちがいよいよ一層湧いてきました」

戦後の日本人にとって、忠孝一本とは必ずしも理解しやすい言葉ではない。どちらかと言えば、軍国主義の宣伝文句のように理解している向きもある。

たとえば、戦前国家の否定を前提に戦没者の遺書を理解しようとすれば、「一心に母を案じた親孝行な青年を、忠孝一本などといった美名のもとで、当時の国家は一方的に母の下から戦場へと送り込んだ」となってしまう。はたして、そうだろうか。青年の心中では、国への忠義と母への孝心は別のものであったのかどうか。次の記録から考えてみる。

林市造命、昭和二十年四月十二日、与論島東方洋上にて戦死。満二十三歳。

母に残した手紙の一節

「晴れて特攻隊員と選ばれて出陣するのは嬉しいですが、お母さんのことを思うと泣けて来ます。母チャンが私をたのみと必死でそだててくれたことを思うと、何も喜ばせることが出来ずに、安心させることもできず死んでゆくのがつらいのです。（中略）私もまだ母チャンに甘えたかったのです。（中略）一度会ってしみじみと話したかったのですが、やはり抱かれてねたかったのですが、門司が最後となりました」

この手紙を読んだときの母の心を思えば、誰しも涙を禁じ得ないのではないか。しかし、母まつゑさんは戦後、次の手記と短歌を残している。

「泰平の世なら市造は、嫁や子供があつて、おだやかな家庭の主人になっていたでしょう。けれども、国をあげて戦っている時に生まれ合わせたのが運命です。日本に生まれた以上、その母国が危うくなった時、腕をこまねいて見ていることはできません。その時は、やはり出られる者が出て防がねばなりません」

「一億の人を救ふはこの道と母をもおきて君は征きけり」

母国をそして一億の国民を救うための道を進んだ息子を、母は決然と誇り高く語られている。その母心がひしひしと伝わる手記である。しかし、短歌の「母をもおきて」の一句からは、惜しんでも惜しんでもなお余りある、我が子を失った母の悲しみがうかがえて、一層切なく思えるのだ。

林さんの遺書については、次のような感想があつた。

「林市造さんが母に残した手紙から感じることは、母親に対する本当の素直な気持です。何も偽ることなく、また恥じることなく、まるで小学生の真っ白な心の中のような文章にとっても心打たれました。（中略）今回私が一番強く感じたことは『自分に甘えるな』ということです。（中略）今の自分よりも本当に辛い人なんて星の数ほどいるということを認識するべきだと思いました」

日本浪漫派を代表する保田與重郎に、特攻隊に關しての記述がある。

「昭和十九年から二十年にかけて、わが青少年の示した国魂は、国史上の精華であり、未曾有のものであつた。誠ある言葉は、神々の言葉として、誰が忘れようか。一度きけば忘れ得ぬ人のまことより出たことばは、明瞭の記憶として、思はぬ時にわが頭上の天にあらはれた。まことにそれは空に描かれた文字である。翼ある詞である」

保田が云うところの国史上無比未曾有の国魂を示した青年たちは、皆等しく心の底からの母思い親思いの孝心あつき青年たちであり、まさしく忠と孝とは一つであつた。

最後に紹介する感想からも以上のことは、御理解頂けると思う。

「私は彼らの魂に触れたことで、自らを省みるきっかけとなりました。あまりにも平和ボケしている自分に恥じらいすら覚えます。特攻隊員と警察学校生という違いこそあれ、市民の為日本の為に訓練する日々は同じはずです。しかし、彼らは死ぬ為の訓練をしていて。遺書の詞を借りて、今彼らに言うことが出来るのであれば、あなたたちもまた、死するために生き抜いた偉い方々です、といつてあげたい。そして、私はあなたがた一兵士の死をこの上もなく尊く思います。日本の為に投げ打つた彼らの命、魂、意志を私は受け継いでいきたいと思います。私達がいずれ本物の警察官となり、この国の治安を支える一助

になれたなら、日本のためという彼らの思いへの私達なりの報いになるはずです。今後、警察道に生き抜く覚悟を決め、私は本物になることを目指します」

己の死に向かって努力し続けた六十年前の青年たちの言葉が、現代の青年を励まし人生の尊さを教示している。我が日本の歴史の持つ力をつくづくと有難いと感じるのだ。

(宮城県 志波彦神社鹽竈神社 欄宣)

子供の躰は大人のつとめ

佐古一洸

ある学校で、家庭についての標語を集めました。優秀賞に選ばれたのは、

「父よ、何か言ってくれ。母よ、何も言わないでくれ。」

でありました。正しく現代の一般家庭の姿を、如実に表わしております。今の子供たちの問題は、実は我々親の問題なのであります。

かく言う私の家庭は、三男一女あり、一番末の娘は今大学二年生で、他の兄たちは皆独立をしております。ただどの子も嫁を貰っていないのが、シヤクの種であります。先程の標語のように、以前の私は「父よ、何か言ってくれ」の部類で、子育てはほとんどタッチせず、只管仕事一筋、酒二筋でありました。幸い妻は、教育熱心の世話焼きで、四人の子供たちをきっちりと育ててくれました。

そして今は、妻と私二人だけの「甘い甘い新婚家庭」ならぬ「暗い暗い旧婚家庭」であります。普段私は、家ではほとんど無口です。もっとも酒が入りますと、誰よりも多弁に

なりますが……。一方妻は、のべつくまなく喋り通し。喋り足らず近頃は、飼いだにも話しかけております。この犬の名は、娘が吹奏樂をやっていましたので樂器のチュウバと名付けました。そのチュウバに、妻の老婆が話しかける図と相成るのであります。しかし、妻もだんだん年をとってまいりました。かくして、わが「ローマ（老婆）」は、一日にしてならず」であります。

○

人間が地球上の動物として与えられた使命には、大きく分けると三つ。1、生きるということ 2、子供を作ること そして一番肝心なのは、3、その子供をきちんと育てること であります。

ある動物園の園長さんは、トラの子の話をされました。

トラのお母さんが子供を産むと、当然子トラはお乳を飲みます。その時トラは子供でも爪を持っている。爪でお母さんのお乳を握るわけです。そうしますと、お母さんは痛くてたまらないから、子供の首筋を噛んで投げ飛ばす。子供は何故投げ飛ばされたか判らない。そして又、お母さんのお乳を掴む。そうすると又、投げ飛ばされる。そういうことを何度もやっているうちに、爪を出して握ってはいけないということを、覚えていくのであります。

す。

またトラは、子供でも牙が生えている。最初は牙を立ててお乳を噛む。母親は痛くてたまらないから、又投げ飛ばす。そういうことを何度もやっているうちに、牙を使つてはいけない。舌で飲まなければいけないということを理解する。これが躰であります。

そうすると、こういうトラの子供は成長して、子供たちが一緒に遊ぶにしても、牙を使わないし、爪を使わないから怪我をすることもありません。

ところが、何かの事情で母トラが育てないで、人間が哺乳瓶で育てた子供のトラを、ある程度成長した段階でトラの群れに戻すと、三日も持ちません。何故か。それは躰を母親から受けていないから、子供たちで遊ぶ時に牙を使い、爪を使って他の子供を傷つけてしまうからです。だから、群れから当然放り出されてしまう。そうすると、それがやがて非常に凶暴となり、反抗的なトラとなつて育っていく。

ということです。我々人間の子供も、全く同様であります。

「つのつく間は親が見ろ」、一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、六つ、七つ、八つ、九つ、所謂、三つ子の魂百まで、つのつく間に、どういう環境の中で暮らしたかは、人間にとつて生涯にわたる影響を与えるのであります。

かく考えますと、「しつけ」というのは、小さい時、ほんの幼稚園に行くぐらいまでの間にやらなければいけません。その時に、「こういうことはしてはいけないんだ」と言うことを、父親や母親或いはお爺さんお婆さんが理屈ではなく、はつきり身体でおしえなければなりません。

○

春になるとウグイスが鳴きます。ウグイスの特徴である「ホーホケキョ」という鳴き声は、親鳥が鳴いて聞かせないと鳴くことが出来ないそうです。遺伝子には、親が教えずにても活性化する遺伝子と、その親が教えなければ活性化しない遺伝子とがあるのであります。姿形はウグイスだけれども、ホーホケキョと鳴かないウグイスが野山にいつばいいるのではないのでしょうか。これは、そのまま人間にも当てはまる真実であります。

日本人も日本人であるという特徴は、親が教えてやらなければ目覚めることが出来ません。今、日本には姿形は日本人であるけれども、日本人の心に目覚めていない日本人がいつばいおります。やはり親が、ホーホケキョと鳴いてやるのが一番大切なことであります。そうすれば日本人としての遺伝子が活性化し、日本人の子供として立派に成長していくのであります。

白金も黄金も玉も何せむに

まされる宝子にしかめやも

(山上 憶良)

将来の日本を支えてくれる、金や銀真珠よりも貴重な子供達の為、家庭のあり方を一度真剣に考え、健全なる家庭を築いていかなければなりません。

「隗より始めよ」、まず私を含め心ある皆様方が、その範を示していただきますことをお願い申し上げ、拙い講話を閉じさせていただきます。

(京都府 松尾大社 宮司)

ゲーム脳

村田和之

広島から参りました村田でございます。

今迄広島といえば原爆、日本三景世界遺産宮島が通り相場でありましたが、数日前より、がぜん衆院選広島六区に無所属で立候補を決めた、あのホリエモン。ライブドア社長、堀江貴文氏の出馬で、自民党を離れ、新しく国民新党をつくり立候補する、元自民党政調会長、亀井静香氏との激戦に一変、広島は一躍注目を集めたのであります。

インターネット業界の「風雲児」、フジテレビ買収投資のすさまじさ、日本文明の価値観を壊し続け人間をも含み、金とマネーゲームも金もうけの対象とし、母親に対する愛情も無く感謝も持たず友人もいない人間。おカネの前では全て平等と考え、書かれた著書の中でも最大の無駄は年寄りの説教と説く風雲児ホリエモン。来月には選挙も済んで一件落着するであろうが、コンピューターやインターネット等と横文字に弱い古代人の私には、この様な人間を造った時代の流れが気になって仕方がなく不安を抱く一人であります。

扱て、この数年前、青少年の犯罪非行問題がマスコミに登場し、日に日に凶悪化、又、低年齢化する現状、小学校一年生のクラスで学級崩壊がささやかれました。額が小さいからと万引きを犯罪と知らない学生達、親や、先生をも殺してしまう現代っ子、自殺希望者をメールで集め集団自殺する若人、昨年最高であった錠剤型の麻薬使用者は今年は十倍に迄昇り、しかも摘発された八割の人が二十才以下、学生の売春もほとんどの子供が自分の方から大人を誘い小遣を捻出しているとか。どこ迄落ちたら気付くのであろうか。

戦後の貧しさの中より立ち上り、高度経済成長により、核家族、共稼ぎ、カギっ子、ゲーム遊びと進み、今日日本古来の文化、道徳は薄れ忘れさられようとしています。

忙しさあまり放任された子供達、一生懸命にゲームに夢中となり「ゲーマー」といわれる様な恐ろしい人間となつてしまつているのであります。

最近「ゲーム脳」という言葉を耳にすることが多くなりました。しかし、子供部屋で静かに過す子供に満足してはいけません。毎日三時間ゲームに熱中し数年間続ければ必ずゲーム脳になるといわれています。特に十歳迄の脳の发育段階にある子供の場合は、もっと早く「ゲーム脳」になるといわれています。

ではその「ゲーム脳」とは、ゲームに没頭することで、ゲームをする画面に現れる情報

にのみ反応する神経回路が強化されるため、脳の思考回路が退化してしまい人間の脳の前側部分にある「前頭葉」という脳の部分の機能が衰え、充分にものを考える力が弱くなり忍耐や自分をコントロールする力が低下し衝動にブレーキが効かず、瞬間的に画面に現われる情報にのみ反応し瞬間にボタンを押す行動にのみスムーズになつてくるのであります。瞬間的に敵を撃つたりするような反応を求められるゲームは特に危険で、創造性、善悪の判断、忍耐など、人間らしさを形成する機能全部が低下してくるといわれています。

前頭葉が衰えると会話を省略し、いきなり行動を取ったり、汚い言葉を平気で使うようになります。たとえ知能指数が良く成績が優秀でもブツン人間となり善悪の見境の無い人間となるわけです。従つて衝動的に殺人を起したり、又、死んでもすぐやり替え生き返ると思うのであります。

ではこの恐しい「ゲーム脳」にならない子供達を育てるには如何にすべきであるか。私達の先人達は昔から教えて参りました。「三つ子の魂百迄」と答へは正にその通り三才から遅くとも七才迄の内にしっかりと「しつけ」をすることでありまゝ。もしもそのしつけをなまけ教えない場合必ず十五才の頃その反発が表われるであろうと指摘されております。人間らしさを無くしてしまう「ゲーム脳」の怖さは、たとえばゲームをしなくなったから

といつても一度ゲーム脳になれば急にはもとにはもどりません。

私達の子供に対する日頃の「しつけ」を実行したならば「ゲーム脳」で悩むことはないのです。

「かわゆくは三つ叱って五つ褒め七つ教えて良き人にせよ」。社会で学校で教えない日本の教育、私達の家庭で教えれば「ゲーム脳」は防げるのです。

情報社会の今、何の防止設備も無い家庭の中にテレビやゲームの機械はスイッチ一つで土足で私達の中に入ってきます。恐ろしいことです。

「たちねの庭の教えは狭まけれど広き世に立つもといとぞなる」。私達一人一人の心構え一つで防げるのです。

日本人は神の心を持つ民族、豊かな心を持っていた民族、あなたのご家庭から「ゲーム脳」を出さないために。

(広島県 長束神社 宮司)

教育のヘソ

戸内康雅

私達日本人は風呂が好きだ。湿気の多い国だからだけの理由でもない。もと／＼清潔を好む文化であろうか、と思つています。

皆さんは、風呂に入る時、どこから洗つて入るか!? 殆どの人が汚いところから洗つて入るようです。安心して下さい。間違ひではないのです。

だが、私は、その汚い所より、もう少し上の臍のところから、洗つて入るべきだと思つています。私たちの臍は、先祖つまり親から戴いたものです。勿論、私達の体は先祖さまからの授かりものですから、優劣があるわけでもありません。ところが、洋の東西を問わず、臍のない人間は居りません。臍が無い蛙に返るわけにも行きません。

しかも、その臍は、私達の子や孫にも譲つて居ります。そうした臍なのですが、美しくもあり、醜いものでもあるかも知れません。だが、美人だから美しい臍だという保証もありません。

童謡、唱歌が聞こえない

ところで、この臍は生まれた時から、僅かに一つ必ず有ります。その生まれた時、育つ時、私達の周りに、子供を寝かす子守歌が聞こえません。少子化の時代だからだけでなく、教えられてないから歌えない。私達の子供の頃は、弟妹を背負って、上手、下手なく歌って子守りをした。時には音痴も音痴、歌詞を適当に替えても歌った。

こうして、次の年代へ子供の文化が傳わったものでしょう。今日では、子供の音楽教育と云えば、ピアノのバイエルは習っても、古くから伝わって来た童謡も唱歌も習わないから、歌えない。我が国が古くから伝えて来たリズムが、伝わらない。

もともと我が国は、和歌、物語、謡曲、落語、歌舞伎などが、盛んであった。そして、それを聞いたたり、歌ったり、作ったりして、我が国の文化を受け継いで来た。また、我が国には二千年以上も前から、隣の朝鮮半島やシナ大陸から、政変があつたり戦争が起きて難民として入国して来た。それらの難民の皆さんに、これらの芸能などを通して、我が国の文化を良く理解して馴染んで戴いて来た。一日も早く、日本文化に融け込んで戴くの役に立った芸能でもありました。

親と共に、ちい・と共に

ところが、近年になると、親と共に暮らさない若い人たちが増えた。

嫁をもらったり、婿を戴くと、近くの町や市のアパートやマンションに住まわせて、自分の家に通って農業をやる若者の話をよく聞くようになりました。住民登録は村にあって、隣の町のアパートから通って村役場に勤めておる職員もある程で、悪い流行と云うか傳染病かと思われる例が多いのです。傳染病ならワクチンや投薬もあるのですが、残念ながら附ける薬も草津の湯も無いようです。

私は、このことが住んで居る故郷との縁が薄くなり、親や祖父母から傳わる年中行事も、行儀作法も傳わって行かない、これを恐れるのです。実は、私は現在八人同居で、三代とも暮らしています。孫には、来客があれば、畳の部屋ですので座って挨拶をさせます。

三文廉いと云われぬように

いろんな事を申したようですが、我が国の祖先が今日まで傳えて来た年中行事や物の考え方などを、美しい文化、習俗として、神まつる生活を通して、これを「ヘソ」と共に永く傳えて行こうと云う考えで申上げて居ります。

そこで、むかし私達は

「ぢい・ばあに育てられた児は、三文廉い」

と云われました。私も、ぢいやばあに育てられた一人でありました。そのため、日本文化の一端を、なんとか私にも伝えられました。これからの私も、子や孫に伝える役目が、未だ残って居ります。

そこで、いま私は、

「ぢい・ばあに育てられてない児は、三文廉い」

と、率直に申し上げます。なぜ廉いか?!

禮儀も知らず、古い良い伝統・文化や歴史が伝わっていないからです。

難しい事でもありません。誰でも出来ることです。今日から始めれば良いのです。

いま、教育に臍が見失われています。

まづ、朝起きて、神棚に手を

「パーン、パーン」

と、打ってみせることから始まります。元気よく、風邪をひかず、転ばぬように身を守り、まづ自ら傳統文化を守り伝え、誇りを失わない良い国にしようではありませんか!

(福島県 心清水八幡神社 宮司)

子供の育成を考える

松本スミ子

昭和四十八年、新年歌会始 御題「子ども」

昭和天皇陛下 御製

氷る広場する子どもらの

とばしたる風船はゆくそらのはるかに

甲高いアハハハ、クックックと楽しさうな子供の声。すると「どうしたの」と氣遣ふ母親の満足さうな様子。どこにでもある様子に幸福感が沸いて来ます。

平成十五年（二〇〇三）七月一日突然思ひもかけぬ重大なニュースが入って来たのでした。四才の幼児が中学一年の十二才に町中連れ廻され、身体を損傷され、駐車場の屋上よりつき落とされると云ふ痛ましい事件が起きたのでした。その犯行に身の毛もよだつ様な思ひをしました。その後、小学校内での女の子による殺人事件等、色々な若い者達による悲しい事件が多数発生している様子が見られます。何故多発するのでせうか。

四才児殺人の後二度と悲しい事件を起してはいけなさと、事件現場には小さな慰霊の像が建立され、市民が花をさ、げて命の尊さを考へ、幼くして事件に巻き込まれた幼児の冥福を祈つて大人への警鐘と関心を高くしてゐます。

こんな痛ましい事件が多発して行くのでせうか。私は教育関係・社会福祉の関係でもありません。一家庭の者として考へるだけです。戦後のきびしい困難な社会を過ごした一員として反省する許りです。

戦中戦後を通じて苦しい時に育ち、暮しの中で自分の子達にはそんな思ひをさせたくないとの気持ちから自由に育て、日本人としての自覚を失ってしまったのではないかと反省する事が大きいのです。

今、社会が悪い、教育が悪いと云はれますが、家庭の生活の動向、つまり精神的な荒廃が基本的に変化して来たのでせうか。

今また「ゆとりの教育の見なほし」とか、色々な事が云はれてゐます。最近の発表によると、不登校の生徒が減り、それでも十二万三千人、中学三年生が三分の一と云はれ、平成十四年度ではやや減少気味との事です。

先日熊本大学の発達障害児の研究をされ、カウンセラーとして活躍されてゐる高原朗子

先生のお話しを聞く事が出来ましたが、講義の中、対人面としての子供と親が見つめ合ふ静かな環境、人と上手につき合へない子供がある。

現在は、(イ) あり余る遊具 (ロ) カラフルな色刺激 (ハ) 多くの音刺激 (ニ) ビ

デオ等の普及等により感情の欠落が多く見られるとの事でした。結婚をして子供を生まない。自分達の生きる方が大事だ。家族観の変化が見られ、二〇〇二年の出生動向の基本調査によると、結婚したら子供を生むべきだと考へる未婚の男性は七六%、女性は六九%であり、一九九八年にはそれぞれ八八%八五%と減少してゐると表が示してゐます。

伝統的な家族観が損なはれる重大な変化が起りつつある様に思へます。

人口の減少は国としての成立も危ぶまれて来る様です。

大切な子供をよりよく育てるにはどうしたらよいかと色々の方面でも研究され議論されてゐます。まず家庭のあり方をと私達の県では始めました。ココロ根っこ運動と云はれその推進が行はれ、①あいさつの声かけ運動 ②我が家のきまりを作りませう ③家庭で十分間の読書に取り組みませう。

家庭内のコミュニケーションを計り、心の絆を作る運動が展開されます。

県議会でも教育の非常事態宣言を行ひ、重大な少年事件を憂慮して子供の育成に大きく

関はつてゐます。

結び結ばれた唯一の尊い命を、神様の分霊である大切な命を守り育てられ、人間として大きくはばたく様に、親としての大切な使命であると思ひます。どなたでもさう思ひ願つてゐるのです。

国を失つた民族は世界中にたくさんあります。私達には祖先より培はれて来た美しい風土が、文化があります。その風土、文化を次の世その又先の時代まで継いで行く事が大切です。

数年前までは鎮守の庭で子供達の大きな声が聞えてゐましたが、それが今では仲々聞えなくなり、家の中での生活が多く見られる様になつて参りました。

そして人と人との交流が少なくなつて来ます。命の尊さを考える時間も少なくなつて来ます。その足らない時間を如何にして埋めて日本人としての思ひを、此の香しい国土を、文化を、風土を育てて行くのは私達の務めではないかと考へられます。

神社に奉仕する者として無力を感じますが、少しでも多勢の子供達と交はりを持つて行きたいと思ひます。一人の母親として神主として。

武士道の心

井出 舜

武士道とは、わが日本民族の培ってきた歴史上、殊に武士が明日をも知れぬ戦国の世に厳しき戦の中で一命を賭して、「忠」と「義」を重んじ、人の礼節や、生きざまに、自ら悟りを開いた道といえます。

武士は武器（剣、槍、弓矢等）を携え、武芸という職能で奉仕する存在であります。その世界は弓矢に始まり、槍や剣の威力、魔力（呪力）によって、運命も左右されると考えられました。武士はなぜその様な中で生きなければならなかったか、それは殺伐・激烈なる戦闘の義務をさけようとしないう勇敢さがあつたからです。

武士は義を信じれば、いかなる困難にも立ち向ってゆく「戦闘者」でもありました。しかし、一方激しい戦闘の敵に対して、人道的な同情とその中に思いやりの情を痛感している優しい人でもありました。「敵をも愛する」心と思いやりの情のない者は、武士にあるまじき行為として、軽蔑されました。

この敵に対する勇猛果敢な戦闘精神と敵に対する限らない深い同情との二つの精神が高度に結合したところに武士らしき存在がありました。反発する二つの精神がどうして、日本の武士において統合されたのでしょうか。

それは、「彼岸」を信じる人であり、しかも、その彼岸の人が現世に雄々しく生き、雄々しく死することを望んでいるからで、生死よりも、「名こそ惜しめ」の一言にたりますのであります。これは事を信じ、それを望んでいたからに他なりません。武士のいさぎよさ、「切腹の心情」など彼岸の心情なしでは、到底解しがたいところであります。

この彼岸思想は、日本土着の家門の祭りの心情と、仏教哲理とが、厳しい武士の戦闘生活の中で、自然に結びついたものだと考えられます。これは仏教の教説としての「彼岸」とも思えないし、国学者の説く死生観とも異っている独自なものであります。

人生のさけがたい悲劇的な運命、その運命に極限的な状況において対決する事を余儀なくされた日本の先人達が、自然に悟り得た実感的な「美」であり、「英知」でありました。

例一——中世の武士像

信州上田藩真田家では、戦乱の世、天下わけめの戦い、西軍大坂の豊臣側につくか、東軍江戸の徳川側につくかの判断に憂慮の時、父真田昌幸、その子信之、幸村の親子の武士

道の中に、幸村は豊臣への「恩顧と義」の重さを説き、一方、兄信之は、真田の家名の存続と尊きを重んじ、双方譲らず、父昌幸は、どちらにも武士としての「理」あることなり、として、東西に分かれ、相交戦することとなりました。西軍についた親子殊に幸村は、武士として恥ずかしくない一矢むくいた果敢な戦いを果し、大坂側の露と消えたのであります。兄信之は徳川側の勝利に於いて、信州、松代藩に国替えとなりましたが、明治の時代まで、真田家の存続に尽した事となりました。戦国の世の武士の運命とはいえ、厳しき決断と悲しき別れの例であります。

武士道の変遷

武士道は、時を[・]経ると共に形式的におちて、己が本心にもとづいて、潔く生死の決断をするという第一義から遠ざかつていくこともありました。「忠」とは、もとく君臣水魚の間にあって、本心をもつて君に対する事であり、主君の為には、心の底から奉仕して、命を棄てることを本望と信じたのであります。主君の命が、おのれの本心において、義と信ずるところに至れば、「忠諫」して屈せぬところもありました。

このような徹底した諫めの剛直さは、戦国乱世では認められましたが、江戸時代では疑われてきました。泰平の秩序が続くと、その忠は、いつしか主君の命令に一方的に服する

ことを意味するかのように解せられ、秩序維持の風潮が見られ、いわゆる古武士の雄々しい氣風が薄れてきた感がありました。武士道がまったく形骸化してきた「宝暦」年間には、「忠臣は二君に事^{つか}えず、武士にして忠なる者、余、その必ず有る事なきを知るなり」と・・・

しかし、それは、戦場の古武士の、生き／＼とした精神が衰えはじめた時代に、これを維持しようとして、修正された道であつたのかもしれない。

本来の武士道を語るならば、抽象的に教条化されない以前の戦国の武士の精神を直視すべきだと考え、武士道の「忠」とは、もと／＼武士が武士たる本来の姿であつたと思います。

例二―思想的武士道

佐久間象山の人物像（ペリー来航 鎖国か開国か）

象山は、文化八年（一八一一年）二月二十八日、松代城下浦町で生まれました。

父は佐久間一学、当時佐久間家は、わずか五両五人扶持の微禄だったが、一学は武士として儒学の素養が深く、同時にト伝流の剣術の達人でもありました。時の藩主は、真田幸尊^{ゆきたか}でありましたが、一学を側右筆^{そばゆうひつ}、表右筆^{おもてゆうひつ}に拔擢し、幸尊^{ゆきたか}いわく、佐久間一学は、まさ

に文武両道の達人で、真田家で求める「期待する武士道の一人である」と認めておりました。その子佐久間象山は六歳の時、漢文の指導を受け、十六歳では、藩の家老で漢字の素養の深かった鎌原桐山から経書を学び、同時に藩士の町田源左衛門から会田流の和算を学びました。さらに竹村七左衛門に馬術を、河野左盛から水練（水泳）を学び、十七歳の時には、藩老、恩田頼母（たのも）の知遇を受け、やがて二十歳の時に、活文和尚から、華音（中国語の琴）を学び、又、二十三歳のときには藩が招いた長野豊山から孟子の講義を聴講しております。その年の秋、江戸に遊学して、佐藤一斎の門人になりました。その学問の経営は、かの有名な林大学頭でありました。

一斎は学問所で朱子学を教えているふりをして、陽明学も教えておりました。門人は三千人に及んだといい、西郷隆盛もこの流れを汲んでいるといわれました。

佐久間象山は開国論者で、攘夷派でもありました。象山いわく、攘夷を行うにしても、敵の能力を知らなければ何もできない。第一、現在の日本の国力では、日本に迫る外敵など追いつくことなど到底できない。それには、軍事力を強めるべきだ。優れた軍事力を持つ西欧の実態に学ぶべきだと喝破し、この考えは、一貫して朱子学の信奉者であった感があるのです。

象山の得意な学問は、朱子学の他に、易学、数学、兵法（軍事学）砲術などでありました。

象山は、西洋の砲術を学んだ時も、西洋の砲術は理にかな適っている。これは数学を重んじているからで、万学の基と位置づけました。しかし西洋の砲術も易学によって分析万能だとして、「東洋の道德、西洋の芸術」と銘打ち、これを一口に言うならば、「和魂洋芸」と略称されました。

象山の人柄と風格

横浜の応接所で、アメリカのペリー提督が象山を一目見て思わず頭を下げたという。

あの人物の発する「氣」に圧倒されたと聞いております。当時とすれば珍しく、大柄で、身の高さ、六尺あまり、目は鋭く、人を威圧する風格があつたといわれます。門人を選ぶにしても、出合う人を選び、武士道からしても、「国家に役立つべき、人間の純粋な精神力とは何か」というこの事を生涯の命題として追い求めたと言われました。

佐久間象山は、「自分は二十歳にして一国（藩）に属することを知り、三十歳にして天下（日本）に属することを知り、四十歳にして五世界（国際社会）に属することも知った。」この発想がなければ、到底「志」を遂げることは出来ない、と現在でいえば、ローカル

(地方) から発想し、やがてそれが、グローバルリズム(国際感覚) に到達することを述べております。

佐久間象山の門下には、吉田松陰がおりました。しかし、国の行末に命を賭した二人は、「志」半ばで、象山は暗殺、松陰は処刑され、露と消えてしまいました。しかし、道の教えは、吉田松陰の門下の高杉晋作に受け継がれていったのであります。

結論

武士や志士たちは、武家社会に端を発して「義」「情」、そして忠君愛国、天下国家の存亡等、歴史と文明、文化を育み、形成されてきた。戦国時代、明治維新、昭和の敗戦に至る迄は少なくとも、我が民族の国風として、陰ながら生きていた。しかし、戦後「国敗れて山河あり、城春にして、草木深し」の如く、現世は「物で榮えて心で滅ぶ」国民と化してきた。武士道の礼節や大和魂を無くした民族となつてはなるまい。

最後に、世界五輪大会で金メダルを得た講道館―武道の達人の言葉から一言。

「近年、目標を持たない若者が多い。将来の自分のやりたい事を明確にし、努力を惜しまないその精神力、たとえば目標が達成されなくても、努力する過程で得る事が絶対ある……」と。

大自然の恩恵、先人の培ってきた伝統文化を忘れず、長い根底にある民族の「証」、「武士道の心」を見直す時ではないかと思えます。

(長野県 諏訪神社 宮司)

神道講演構成法

神道講演の大先達、渡辺武清先生を始め、野村清臣先生、宮地保先生、河本眞澄先生、石井寿夫先生、佐古幸嬰先生など神社界のために一生を捧げられた大先生が神去りまして久しい、先生の教えの万分の一でも恩返しできればと門下生は各地で祈りの庭のひろがりを願ひ神明奉仕に励んでいます、講演内容を組立てる構成法を参考迄に佐古先生の「庭のおしえ」より抜粋し、神道講演の手引きにしてみました。

「論」と「証」

一般には序論、本論、結論からなる三分法が主ですが「序」「論」「証」「結」の四分法からなる構成法の必要性を説かれています。

それは、本論をさらに分析して「証」を独立させ「論」の正しさを証明する。

「論」で神道の古典を引用し大綱をしめし、その真実性を証明するために具体的な例話「証」を語る。

内容として

I 何のために語るか（祈願）

1 神命をかしこんで立つ

2 まず祈れ

3 正しい志を

4 まじめな生活を

5 話は生きている

II 何を語るか（内容）

その一 体験を語る

1 体験を語る

2 体験を反省する

3 二つの「門」

① 自然のいのちのなかに神様を見る

② 人間のいのちのなかに神様を見る

その二 講演の内容

1 岩戸を開け、門にとどまるな

2 位に中す

3 講録をつくる

① 話の材料を集める

② 話の材料を選ぶ

③ 話をまとめる

④ 特に切り捨てについて

Ⅲ いかにかに語るか（表現）

1 わかりやすく語る

① 話はわかりやすく

② 自分の言葉で語る

③ 抽象的な論理よりも具体的な事実を

④ 話には“うねり”を

2 至誠をもって語る

① 主催者にも聴衆にも深い感謝を

② 至誠をもって語る

③ 遺言の覚悟

3 自然に語る

① 講録をはなれて

② 自然に語る

③ 個性ある語りぶりを

以上、紙面の都合で構成法を簡単に記してみました。詳細については各地で活躍している門下生、又は、事務局迄お尋ね下さい。

第二十一回神道講演全国研修大会 宮城大会の記録

於 志波彦神社鹽竈神社

神社本庁研修所所長 矢田部正巳

顧問 阿部 信

(神社本庁長老)

々 工藤 伊豆

(神社本庁長老)

々 田中 光彦

(宮城県神社庁庁長)

々 宮本 勝重

(福島県神社庁庁長)

々 西舘 勲

(岩手県神社庁庁長)

々 須藤 茂忠

(青森県神社庁庁長)

々 緒方 久信

(山形県神社庁庁長)

々 面山 千岳

(秋田県神社庁庁長)

々 真弓 常忠

(住吉大社宮司)

々 大野 俊康

(元靖國神社宮司)

々 黒岩 龍彦

(宮崎神宮宮司)

顧問 矢野 憲一

(元神宮禰宜)

大 會 會 長 宇仁 繁儀

(志波彦神社鹽竈神社宮司)

実行委員長 村田 和之

(長束神社宮司)

実行副委員長 佐古 一洌

(松尾大社宮司)

々 戸内 康雅

(心清水八幡神社宮司)

実行委員 渡邊 知宣

(疋野神社宮司)

々 芦原 嚴夫

(旭川神社名譽宮司)

々 二橋 一彦

(砥鹿神社宮司)

々 藤井 昭彦

(元神宮禰宜)

々 秋野 義正

(神明社宮司)

々 谷田 勉

(櫻山八幡宮宮司)

々 中野 幸彦

(多賀大社宮司)

々 大野 順弘

(檀森神社宮司)

々 落合 偉洲

(久能山東照宮宮司)

々 木下 鉄二

(大江八幡宮宮司)

実	事	事	々	々
行	務	務		
委	局	局		
員	員	長		
芦原	生	畠田	村田	村田
高穂	經和	明彦	佳子	和弘
(旭川神社宮司)	(松尾大社権宮司)	(松尾大社権彌宜)	(長束神社権彌宜)	(長束神社権彌宜)

神道講演全国大会のあゆみ

大会	開催年月日	開催場	大会会長	実行委員長	事務局長	講話集
第1回 東京大会	昭和46年8月4～6日	神社本庁		石沢 久英	久保田博人	
第2回 広島大会	昭和50年8月8～10日	塩屋神社		石沢 久英	河野 貞愛	
第3回 伊勢大会	昭和54年8月27～29日	神宮会館		冢瀬 好一	山本 行隆	五十鈴川
第4回 九州大会	昭和58年6月7～10日	太宰府天満宮		西高辻信貞	宇都宮正元	神国の春
第5回 みちのく大会	平成元年8月21～23日	高山稲荷神社	工藤 伊豆	新山 昌孝	平澤 明穂	平成の民の祈り
第6回 伊勢大会	平成2年8月20～22日	椿大神社	岡本 健治	山本 行隆	二橋 一彦	うまし国日本
第7回 東京大会	平成3年8月27～29日	全国神社会館	大野 俊康	山本 行隆	青島清三郎	食国の祈り
第8回 宮崎大会	平成4年8月24～26日	宮崎神宮	大宮 四郎	山本 行隆	本部 雅裕	
第9回 愛媛大会	平成5年7月19～21日	愛媛県護国神社	大宮 四郎	山本 行隆	小川 純生	天翔るみたま
第10回 東京大会	平成6年7月21～23日	靖国神社	大宮 四郎	山本 行隆	坂 明夫	
第11回 北海道大会	平成7年8月3～5日	鳥取神社	山本 行隆	鈴木 瑞彦	奥谷由起子	大禊
第12回 広島大会	平成8年7月16～18日	三瀧荘	山本 行隆	村田 和之	村田 和弘	

大会	開催年月日	開催場所	大会会長	実行委員長	事務局長	講話集
第13回伊勢大会	平成9年7月17～19日	神宮会館	山本 行隆	矢野 憲一	中村 昌司	神路山
第14回京都大会	平成10年8月27～29日	八坂神社	真弓 常忠	佐古 一冽	嶋田 達久	追憶
第15回東京大会	平成11年9月9～11日	全国神社会館	宮西 惟道	村田 和之	生寫 經和	神国の教え
第16回愛媛大会	平成12年8月23～25日	石鎚神社	十亀 興美	村田 和之	生寫 經和	伊予の雄叫
第17回石川大会	平成13年9月4～6日	白山比咩神社	山崎 宗弘	村田 和之	生寫 經和	白嶺
第18回鹿児島大会	平成14年8月21～23日	霧島神宮	高橋 弘平	村田 和之	生寫 經和	肇国の誓ひ
第19回愛知大会	平成15年6月25～27日	熱田神宮	小串 和夫	村田 和之	生寫 經和	剣のこころ
第20回島根大会	平成16年7月13～15日	出雲大社	千家 尊祐	村田 和之	生寫 經和	国引の集い
第21回宮城大会	平成17年8月23～25日	志波彦神社 鹽竈神社	宇仁 繁儀	村田 和之	生寫 經和	鹽竈ざくら

神道講演全国協議会 役員

幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	副会長	会長	顧問	顧問	顧問	顧問	顧問
藤井昭彦	秋野義正	二橋一彦	芦原嚴夫	渡邊知宣	佐古一洌	村田和之	矢野憲一	黒岩龍彦	大野俊康	真弓常忠	阿部信	
元神宮欄宜	神明社宮司	砥鹿神社宮司	旭川神社名譽宮司	正野神社宮司	松尾大社宮司	長束神社宮司	元神宮欄宜	宮崎神宮宮司	元靖國神社宮司	住吉大社宮司	神社本庁長老	
							幹事・監查	幹事	幹事	幹事	幹事	
							生寫經和	木下鏌二	大野順弘	中野幸彦	谷田勉	
							松尾大社權宮司	旭川神社宮司	久能山東照宮宮司	多賀大社宮司	櫻山八幡宮宮司	

平成十七年八月現在

あとがき

平成十七年八月、待望の神道講演全国大会、東北地区開催が実現となった。講演研究の大先達、同志でもあった神社本庁前総長で青森県高山稲荷神社宮司の工藤伊豆先生の肝入りで平成元年第五回の神道講演全国大会が高山稲荷神社で開催されて十六年振りの東北地区開催である。これも一重に佐古副会長のご尽力と志波彦神社・鹽竈神社宮司宇仁繁儀先生の温かいご理解とご協力が実を結んだものである。開講式には神社本庁より総長代理として塙東男理事、宮城県神社庁長田中光彦先生等々花を添えて頂き、全国各地より十分間の実習発表研究のため過分な旅費を費やし馳せ参じた四十名の参加者、他に東北地区の大先輩激励参加、志波彦神社・鹽竈神社神職養成所学生達の手伝いや聴講、又、野口次郎祐宜による記念講演「鹽竈神社の信仰」と内容豊かで盛り上った研修会。

本庁主催扱いとなり四年目、本庁の後押しもあり国大・皇大生にも講話集を参考資料として配布頂く迄となった。昭和四十六年に第一回全国大会を神社本庁で開催されて以来、先輩諸先生の熱意あふれる指導で全国各地に社頭講話の重要性が認められたことは喜ばし

いことであるが、先般来、師と仰ぎ基礎を築かれた諸先生が次々と神去られる現状は痛恨の極みである。工藤先生にも宮城大会打合せのため五月二十五日高山稻荷神社に一泊、宮司様と親しく友好を温めたのに九月十九日突如として神去られた。今は工藤前総長の講演研鑽に励む同志の姿に「語りべとして後に続くを信ず」と託された言葉が心に染み尚一層の研鑽を誓うものである。

この度宮城大会開催にあたり、神社本庁を始め、志波彦神社・鹽竈神社、又東北地区各県神社庁、著名神社等々、多大なるご協鑽ご協力に対し厚く御礼申し上げ、何時ものことながら一年前よりの取り組み下見打合せと開催要項、講話集作成にと目に見えない縁の下ご力持ち、事務局員の各位にはただただ頭の下がる思いで感謝にたえません。又、大会にご参加された諸先生、ご縁を頂いた諸兄には廃れ行く世相に光明を照らすべく参考資料の一部として存分にご活用され、神明ご奉仕下さることを乞願して挨拶いたします。

平成十八年初春

第二十一回神道講演全国研修大会

宮城大会実行委員長 村田和之

講話集 鹽竈ぞくら

—第二十一回 神道講演全国研修大会 宮城大会—

発行 平成18年6月1日

編集者 装幀者
— 神道講演全国協議会事務局

印刷所 吳市広白石一—二—三四
製本所 株式会社 ユニックス

発行所 — 神道講演全国協議会

〒六六〇〇四 京都市西京区嵐山宮町三 松尾大社社務所内

TEL (〇七五) 八七一—五〇一六 FAX (〇七五) 八七一—三四三四

落丁・乱丁の場合はお取り替えいたします

